

米英思想研究抄

松田福松著

国文研叢書

No. 25

米英思想研究抄

社団法人 国民文化研究会

松田福松著

はしがき

世界の現勢において、英語はほとんど世界語として渾球上に通用してゐる。この西欧文明を代表する英語国民の魂魄を読み破ることは、現代日本人の為さねばならぬ作業の一つである。本書は、非力ながら、その一つの試みである。

既に頽齡に在る著者の旧稿をまとめて世に問うて下さるのは、全く国民文化研究会諸友の厚意と尽力の賜物である。ここに深甚の謝意をささげる。

昭和五十八年十月五日

遠州浜名湖畔にて 著者しるす

刊行のことば

社団法人 国民文化研究会

理事長 小田村寅二郎

(亜細亜大学教授)

ここに編した一書は、私どもが半世紀余にわたって米英思想研究の方面で師事申し上げてきた松田福松先生の文集である。先生はまた、明治英学界の巨星・齋藤秀三郎先生の「正則英語」の継承者として著名であるが、その折々の御労作の中から、夜久正雄氏(亜細亜学園理事、同大学教授)と松本幹男氏(拓殖大学助教授)のお二人による選択編集がなされ、著者の御了承を得て上梓に至つたものである。

松田福松先生は、よほひ齢すでに八十七を数へてをられるが、去る昭和五十二年、満八十歳を以て城西大学教授を退職せられた後は、御長男の居住勤務地である浜名湖畔の湖西市に移られ、なほかくしやく豊録として研究・執筆に従事され、さらには地許の依頼をうけて文化講

座の一翼を担任して元氣な御生活を過してをられる。しかも、終始変らぬ謹厳かつ御誠実な御風格は、接する人ごとくに深い感銘を与へずにはおかない老先生でもある。

さて、本書の編集に当たった前記夜久さんと私は、昭和八年に旧制一高に同時入学して直ちに、文化団体「一高昭信会」に加はり、先輩に多くのことを学んだが、そこで一高の大先輩に当たる三井甲之先生に師事した機縁で、その系列にあられた多くの先学の教へに接したことであった。松田福松先生は、その五指に数へられるお一人であられただけに、その御著述を通じて、先生の心魂からのお教へを深くいただいた次第であった。

なほ、上掲は先生の近影を、ご紹介の意で挿入させていただきます。

夜久さんは、戦後、松田先生とホイットマンの訳詩で共に従事された深い関係もあり、先生の全著述に目を通して来られた経験に立っての今回の選擇であったし、夜久さんを手助けされた松本さんは、英文学の専門分野にあって、松田先生を敬仰してやまない新進学徒であられる。このお



二人の編集作業に、著者が全幅の信頼をお寄せになられたさまは、はたの見る眼にもよくうかがはれたことであつた。先生のお喜びを偲び、向後とも御健康であられることを祈りつつ、この一書を多くの後輩諸君とともに、心の糧とし、外国文化の思想の摂取に当つての良き指針としたいものである。

なほ、本書の中扉の写真のうち数葉は、数年前私が訪米した折に、南北戦争の古戦場ゲティスバーグを訪れる機会を得、そこで手に入れた資料を活用してくださつたものである。以上、本書刊行に当つての拙言とさせていただきます。

昭和五十八年十月二十三日

目次

はしがき

刊行のことば(小田村寅二郎)

第一章 リンカン……………1

一 詩人としてのエイブ・リンカン……………3

二 スプリングフィールドを離れむとして……………14

三 ゲティスバーグ・アドレス(訳)……………15

第二章 ホイットマンとアメリカ(『ホイットマン詩撰』から)……………19

一 ワルト・ホイットマン……………21

(一) ホイットマンの時代……………21

(二) ホイットマンの生涯……………28

(三) 『草の葉』について……………58

	(四) ステイヴンソンのホイットマン評について……………	70
	二 ホイットマンの詩の訳……………	75
	(一) プロオドウェイ・ペイジェント……………	75
	(二) 大統領リンカン追悼歌……………	83
	(三) 秋の小川……………	105
第三章	アメリカ詩の一流流——ロバート・バーンズ……………	107
第四章	航海文学と西部文学……………	127
第五章	シエークスピア研究序説……………	133
第六章	ロバート・ブラウニングとサー・ウォルター・スコットの詩の訳……………	151
第七章	コールリッジの教訓……………	161
第八章	イギリスの古道とサー・ウォルター・スコット……………	171
第九章	キプリングの小説二篇について……………	181
第十章	ウイリアム・サンダスン著『経国要略』について……………	199

一 ウイリアム・サンダスンについて……………201

一一 序の訳……………202

第十一章 『雲上の声』——A VOICE OUT OF THE SERENE——

(斎藤秀三郎先生英訳・明治天皇御製集)……………209

第十二章 「靈魂の系図」について(カーライルを中心に)……………217

(一) 序……………219

(二) ゲーテとカーライル……………226

(三) マッチーニとカーライル……………234

(四) エマソンとカーライル……………241

(五) むすび……………249

著者自撰略歴並びに著作目録……………257

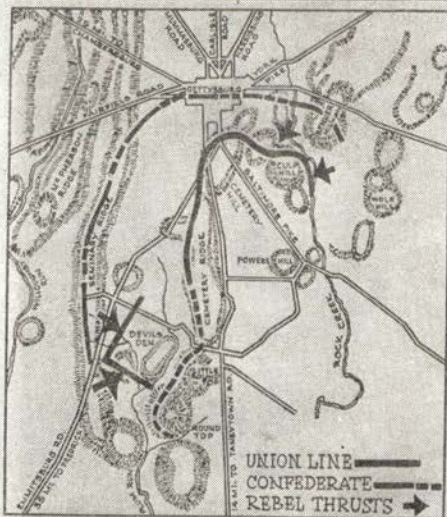
第一章

リンカン



一少女の要望にこたへて髯を生した大統領時代のエイブ・リンカン

Copyright 1958



The heavy black line on the above map indicates the strong defensive position occupied by the Union Army of the Potomac. About four miles long, it begins on Culp's Hill, extends west to Cemetery Hill and then south to Little Round Top. The Rebels are drawn up a mile west on Seminary Ridge and north through Gettysburg to Benner Hill. Sickles' 3rd Corps yesterday moved out of its assigned position (dotted line) to the V-shaped line where it caught the full fury of Longstreet's Corps. McPherson Ridge (upper left) was scene of Wednesday's action.

ゲティスバーグの戦闘図。Unionは北軍，Confederate は南軍。当時の新聞の覆刻版より。

一 詩人としてのエイブ・リンカン

『エイブラハム・リンカンの生涯と著作』十巻での百年祭記念版編輯者であり、其内のリンカン二巻の事実上の著作者マリオン・ミルズ・ミラーは、リンカンについて次のやうに書いてゐる。

「数年前の事自分はヘンリー・ホイットニーのリンカン伝編著に携つてゐたが、当時ヨハネス・ゲラート作のリンカンの胸像の写真を——これは自分の考へでは全てのリンカン像のうち最も知性的の面をよく表はしてゐると思はれるが——或るイタリア生れの少年靴磨きに見せて、誰の肖像か知つてゐるかと問うてみたことがある。すると其の少年は、最近学校で学んだ教課から思ひついたのであらうか、『ホイットイヤか知ら？ ロングフェロー？』と半ば問ひかへすやうに言うた。そこで自分は、

『いや、リンカンだよ、あの偉大な大統領だ』
と答へた。すると少年は、

『さうかな、だけど顔を見ると、詩人のやうなんだが』と言うた。

これで私はかねて摺んでゐた結論への裏書を得た。即ち、若しリンカンがケンタッキーの山奥に育たず、ニューイングランドのやうな、もっと開けた、文明度の高い地方に住んでゐたとしたなら、法律とか政治とかいふ煩さい仕事には携らず、ホイッテイアのやうにもっと長く農耕の業に従ひ、やがて文筆を以て世に立ち、現在我らの有するアメリカ詩人と少くとも同等の、又場合によっては更に価値高き詩作を残したかも知れないのである。」

かう言うてミラーはリンカン三十七歳当時の述作にかゝる詩二篇を引用し、且つリンカンが終生愛誦してやまず、日頃友人達との談話に屢々口吟して、吟誦の都度熱涙の眼をうるほすのを禁じえなかつたと伝へられてゐる二篇の詩を掲げて、リンカンの詩魂を物語つてゐる。今その二篇の愛誦詩をとつて、リンカンが如何に平生から「世間虚仮」の実相に徹し、死をみつめてゐた人であつたか、そしてその現実痛感の上にこそ始めて、あの巍々たる葱嶺の如き彼の人格も成就せられ、絢爛たる青史上の偉績も築き上げられたものであるかといふことを我らは忘れてはならないと思ふ。

リンカン愛誦詩の一はスコットランドの若くして逝いた薄倅の詩人、ウイリアム・ノックスの今日まで伝誦せられる唯一の名篇「など、人の心の傲おごり驕たかぶることかある」である。リンカンはこれを、新聞紙上か何かで散見して、十五六年前にも一度見たことがあるが、誰の作品か是非知りたいものだ、当時の詩作仲間ウイリアム・ジョンストンに宛てた手紙の中に云うてゐる。その詩は徹頭徹尾人生の無常感を歌うたものであつて、恵心僧都の「白骨觀」にも比せられるべきものであると思はれる。かういふものは、西洋における東洋思想といはれて宜しからう。その詩

あゝ！ など、人の心の傲り驕ぶることかある？

流れて消ゆる星のごと、みそら飛びゆく雲のごと、

闇にひらめく稲妻か、磯にくたくる浪の穂か、

いのちを終へて、とこしへに人は墓場に入るものを。

そびえて高き榿の葉も、柳も共に散りはてゝ、

土にそゞげば、諸共に風に吹き舞ひ積もるなり。

老いも若きも、世に高き品ある人も賤しきも、

土に帰れば、諸共に眠るはとの塚の中。

母が愛ぐしとかしづきて、撫で育てにしみどり児も、

そのみどり児の、暫くも目かれ惜しみしその母も、

強きかひなにその母とその子いだきしその父も、

無常の風のさそふとき、すべては逝きてとどまらず。

桜に匂ふ頬の色、雪を欺く肌のつや、

歛び躍る眼の光、乙女の姿いまいづこ？

その乙女子に焦れたる、若き心のときめきも

幽明、境をへだつれば、醒めてはかなき夏の夢！

政柄とりし王の手も、袈裟をまとひし僧の身も、

あまねく世をば憐みて涙そゝぎし聖の眼、

天下無双の勇士ぞと、世に謳はれし雄ごゝろも、

空しく地下の白骨と化して横たふ墓の奥。

春は種蒔き秋は刈る定め担ひし農夫らも、

山羊を原へと追ひ上げて放ち飼ひする牧夫らも、

食を求めて家々を門づけあゆむ乞食らも、

消えゆくさきは諸共に、我らが足に踏む草ぞ。

天なる幸を味ひし、世の大いなる聖らも、

敢へて罪をば悔いずして、そのまゝ逝きし罪の子も、

賢愚、凡聖、浄不浄、善人悪人別ちなく、

塵にうもれて言葉なく、いづれと問へど音もせず。

交替循環窮らず、滅び失せゆく醜草か、

年々歳々咲き誇り、またも散り失する花のごと、

たゞその如く世の人も、この現身の我がまなこ

さへぎる人らことごとく、滅び失せゆく世の定め。

我らは歩む、祖たちの曾つて歩みしその道を。

わが眼に映る世の様も、同じくおやの見し姿。

汲みて飲む水、仰ぐ日も、わが祖たちの曾つて飲み、

曾つて仰ぎし同じもの。我らと祖とひとつなり。

我らが胸に思ふこと、祖も同じく思ひけむ。

死を忌み生に焦るゝも、祖と我らとへだて無し。

しかはあれども、生きの身の我らを何かとよめ得む。

いのちは、なべて我らより天翔けりゆく、鳥のごと。

愛も憎みも悲しみも、また喜びも、祖たちは、

我らと等しく分ちけむ。しかはあれども、我ら今

つめたき骨ゆ何を聞く。とはにもだせる唇は

愛も憎みも、悲しみもまた喜びも語り得ず。

彼らは逝きぬ、あゝ逝きぬ。彼らを覆ふ土の上、

彼らの住みし家の内、踏みゆく者は我らなり、

また住む者も我らなり。彼ら歩みし巡礼の

道に起りし種々の事にぞ出遭ふわれらまた。

さなり希望も憂愁も、快樂苦痛皆共に

一つに帰して分ちなく、光は照らし雨そゞぐ。

頬に浮べる笑、涙、口ゆ洩れにし歌、嘆き、

波また波の寄るがごと、連続反覆、涯もなし。

またゞくひまぞ、吐く息の、また引く息の束の間ぞ。

今日紅顔の美少年、あす玉樓の住ひ主。

けふ金殿の華奢嬢、明日経維子のまとひ主。

あゝなど、人の心の傲り驕ぶることかある？

更に、リンカン愛誦の別の一篇は、同時代の詩人、オリヴァー・ウエンデル・ホームズ作『残るひと葉』であって、上出ヘンリー・ホイットニーのリンカン伝に次の一節が有る

「繰返し／＼幾度となく筆者は、リンカンが

『若かりし其の昔、

口づけしかの赤き唇も、

苔蒸せる墓の下。

耳にして其の胸を

をどらせしその懐かしき名も

幾とせぞ、草の上。』

と口吟して、おのづと熱涙の眼に迸り出づるを禁じ得ぬ姿を見たことであつたらう。それは恐らく、ジエントリヴィルの(母の)墓を思ひ出したものであらうか。或は又(リンカンの初恋の人、結婚を間近に控へて果敢なくなり、生涯忘るゝ能はざる記憶を彼の胸に深く刻みしアン・ラトレッ嬢の)サンガモ河畔の墓を思ひ浮かべたものであつたらう。」

ホームズの詩篇全体としては、例の物静かに、悲しみを心の奥にたゞへて笑を面に示す、ユウモラスな代表的作品の一つであるが、リンカンは特に此の篇の右に引用されてある一節に強く心を惹かれたものであらう。さてその詩――

最後のひと葉

われ曾つて彼を見たり、

わが門口過ぎゆく姿、

そして又

よろめきて石敷き路を

杖たか鳴らし歩みゆく

その姿。

世の人の噂を聞けば、

無残なる時の利鎌の

入らぬ先は、

逞ましき美丈夫の

彼にまされるは此の町に

無かりしと。

されど今、街あゆみゆき、

行きずりの人を見る

その瞳、

悲しくも瘠れ果て、

力無く振る首は言ふ

「皆無し」と。

若かりし其の昔、

口づけしかの赤き唇も、

苔蒸せる墓の下。

耳にして其の胸を

をどらせし懐かしき名も

幾年ぞ、草の上。

わが祖母の語るを聞けば

——あな哀れ老いたりし祖母とじ刀とじ自とじのゆきまして、幾年ぞ——

彼の鼻は、ロウマ型、

驚なして。其の唇は

雪に咲くバラのごと。

されど今、其の鼻も細く、

顎の上に、坐りてぞ見ゆ、
杖のごと。

そびら、弓なし、声立てゝ

笑ふさへ、憂はしく

ひゞ入れるごと。

われこゝに坐して、彼を

たゞ眺め、あざわらふ

罪を知る。

されど、かの三角帽、

半ズボン、等々のいでたちの

可笑しさよ。

春となり、枝に残る

いや果ての、我、ひと葉とて残りなば、

笑へ、人、今のが

為すがごと、捨てられし古えだに

すがる吾をば。

(昭和二十二年『興風』四月号所載)

一一 スプリングフィールドを離れむとして

一八六一年二月十一日の月曜日、リンカンとその家族は、一団の人々と共に、首都ワシントンに向けて、多年住みなれたイリノイ州スプリングフィールドの町を旅立った。

合衆国分裂の危機を孕む重大時局を乗切るべき大統領の重責を荷はむがためである。この日、雪まじりの小雨が降ってゐて、余り華々しい門出とは言へなかつたが、リンカンは列車の後部のデッキに立って、見送りの隣人たちに次のやうな別辞を述べた――

皆さん、今わたくしが立ってをる立場にある人でなければ、このお別れに臨むわたくしの悲痛な気持をお察しはつきません。現在のわたくしは全て、この町の方々の賜物です。この土地にわたくしは四半世紀以上を過ごしました。この土地でわが子たちは皆生

れ、そのうちの一人は葬られてをります。

いつまた皆さまにお目にかかれるかわかりません。わたくしの担はねばならぬ責任の重さは、建国の父ワシントンの時代以来、恐らく他のなんびとも未だ曾つて荷ったことのないほどのものでございます。ワシントンその人も、その終始仰いで止まざりし天佑神助なかりせば、決して成功することは無かったでせう。

建国の父を支へたその同じ神のお助けがなかったなら、わたくしは成功できないと感じます。そしてその同じ全能の神に、わたくしはお助けを仰ぎます。それ故、どうか皆さま、お祈り下さい、わたくしが神のお助けを得ますようにと。これ無くしては成功が出来ませんけれど、お助けを得れば成功うたがひ有りません。もう一度、なつかしい皆さまに尽きぬお別れを申し上げます。

三 ゲティスバーグ・アドレス（訳）

今は八十有七年の昔、わたくし共の親たちはこの大陸に、自由を母とし、「万人は生

れながらにして平等なり」といふ命題を建国の理想とする、あらたなる国を生み成しました。

いまわたくしどもは、その国が、またいづこなりと、苟くもそのごとき由来をもち、そのごとき理想に立つ国が、永く存続し得るや否やをためす一大内戦に従事して居ります。その戦争の一大決戦場に、わたくしどもは今あつまって居るのでございます。わたくしどもは、その戦場の一部を、この国を救はむがためにそのいのちをすてた人々の永遠のやすらぎの場所として献げるために参って居ります。これはもとよりわたくしどもの当然なさねばならぬところでございます。

しかし、さらに大いなる意味におきましては、わたくしどもにはこの土地をささぐる力はありません——はらひ浄める力はございません。ここに戦はれました勇士たちが、戦死者生存者のわかちなく、共にこの土を浄められたのでありまして、これにいささかも増減することは、わたくしどもの微力の決して及ばぬところでございます。世の人たちはここでわたくしどもが申す言葉をあまり気にもとめず、また永く記憶しても居りません。けれども、あの勇士たちがこの地において立てられたいさをは、永久に忘れら

Executive Mansion,

Washington, _____, 1862.

Four score and seven years ago our fathers brought forth, upon this continent, a new nation, conceived in liberty, and dedicated to the proposition that "all men are created equal"

Now we are engaged in a great civil war, testing whether that nation, or any nation so conceived, and so dedicated, can long endure. We are met on a great battle-field of that war. We have come to dedicate a portion of it, as a final resting place for those who here gave their lives that the nation might live. This we may, in all propriety do. But, in a larger sense, we can not dedicate — we can not consecrate — we can not hallow, this ground —

The brave men, living and dead, who struggled here, have hallowed it, far above our poor power to add or detract. The world will little note, nor long remember what we say here; while it can never forget what they did here.

It is rather for us, the living, to ~~stand here,~~ ^{we here be dedicated}

ゲティスバーグ・アドレス自筆原稿第1枚目（2枚目の-
ted につづく）（エキゼキユテイヴ・マンシヨンの名の印刷
された用紙に記されてゐる）

れやう筈はございません。ここに戦つた人たちが、かくも立派にここまで推しすすめて来られました未完成の仕事にわれわれ生きて居る者こそむしろ、献げられねばならぬものでございます。むしろわれわれこそ此の地において、わたくしどもの前途に残つて居る大事業に献げられなければなりません。——これら名譽ある戦死者から、その方々が最後のひといきまでまごころをささげ尽されましたあの大義のため、いよいよ忠をはげます献身の熱情を、わたくしどもこそ受けただかなければなりません——これら戦没者の死をあだにはさせまじ、この国を神のみ蔭のもとにふたたびあらたに自由の国とし生れ変らせ、そして人民のために人民自から人民を治めるといふ政治を、この世から滅び去ることあらしめまじと、わたくしどもこそここにまごころこめて誓ひあはさねばなりません。

(新訳稿)

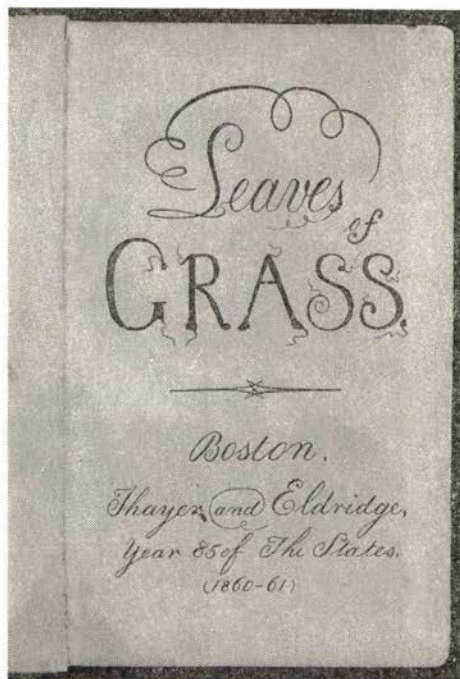
第二章

ホイットマンとアメリカ

(『ホイットマン詩撰』から)



ホイットマン (『草の葉』第三版・扉の肖像)



ホイットマン『草の葉』（第三版）扉

一 ワルト・ホイットマン

(一) ホイットマンの時代

ホイットマンの精神的開展を先導したエマソンは、『草の葉』の出版に先立つこと五年の一八五〇年に、その講演集『代表的人物論』を公にしたが、その中でこんな事を言っている。

「かうした元初のまゝの張りきった未熟さから脱け出して、情感認識の力が充分の成熟に達し、而かもまだそれが顕微鏡的にならない、といふやうな時機が、必ずどこの国民の歴史にも有るものだ。で、さうした時刻の瞬間にあつては、人間は宇宙大の広さを持つこととなつて、足はなほ無限の闇の諸力を踏まへながら、その眼、その頭脳は太陽と星の回転してやまざる大宇宙と欲談する。これこそ実にその国民が成人の健康に達し、気力の盛を極むる時機である。」

ニイチエが最初にその研究題目に選んだ「悲劇時代のギリシヤ」を見よ。国を挙げて

ペルシャ戦をたゞかった国民的感激は、不朽の人類文化財として我らの手に残されてゐるではないか？ カアライルがその「英雄としての詩人」の典型を其人に見たシェークスピアは、いかなる時代の人であつたか？ 「無敵艦隊」の来寇を迎へ撃ち、アングロ・サクソン世界制覇の初一步を確かに踏んだイギリスのエリザベス時代ではなかつたか？ イタリヤの文芸復興のカトロチェントオ、ヴェダの神謡よりヴェダ Tantra の哲学、仏教の興隆に至る印度の英雄詩『マハアバアラタ』の時代、また粟散辺土の一小国日本を「日出づる処の天子、敬まつて書を、日没する処の天子に致す、恙なきや」と、さしも一世の文華を誇つた大隋と拮抗せしめられた聖徳太子より「咲く花の匂ふがごとき」日本の第一次文芸復興を実現した寧楽の「上つ代」を見よ。それらは皆、世界文化史上に、永久の貢献を残した、我ら人類共通の「心の故郷」であつて、エマソンの言の空しからざること証する史的事実である。

ホイットマンの時代も又、アメリカ合衆国の生成史上において、まさにそれら各民族の Coming of age (成年) の時代に匹敵すべき、人類の等しく忘るべからざる一時機に相当する。アメリカ合衆国人の魂に永久忘るべからざる刻印を捺した南北戦争(いか

にそれが深刻且つ広汎のものであったかは、一八六八年から一九〇〇年に至る三十三年間、僅かに一つの除外例を別にしては、ワシントン府白亜館ホワイトハウスの主人公は皆が皆、揃ひも揃って常に曾つての南北戦争の北軍将校であった経歴の持主であった事からも察せられよう。は、また同時にホイットマンその人の生涯における、生命の潮の絶頂を形づくる。

当時の合衆国は、大ミシシッピの水運による中部地方の開拓より更に一大飛躍して、茫々たる原始の大陸を横断し遂に the West (西部)！ の征服に到達したのだ。それは実にシオドア・ロウズヴェルトがその史的研究『西部の征服』中に指摘してゐるやうに、一千年のその昔、遠くヨオロッパ大陸の北、スカンディナヴィヤの深く湾入したフイヨルドを輕舸に乗って出発した Viking (入江の人) たちが、暴風と狂濤とを以て世界に鳴る北海の荒浪を蹴やぶって大ブリテンの島に上陸して以来、西へ／＼とつゞけられた Westward movement (西方への民族移動) の長旅が大西洋を跳び越えて、新大陸への殖民となり、バアクリ僧正が十八世紀に予言して

「西へ西へと帝国は進んで行く、

始めの四幕は既に終った。

五幕目で劇は終り、日もまた暮れる、

大団円こそ前古未曾有の壯観なのだ。」

と歌った、その五幕目の序開きが合衆国の独立となり、千古の森に嘯く風うそぶを聞きつゝ、東部沿岸地方から次第に内陸へ／＼と進んで、「ぼくはどうかすると心がきまらずに十分もぐる／＼まはりをしてゐることが有る。が、結局いつもと同様に、西南か西へと歩いて行く。東方へは無理に我慢して行くのだが、西方へは心も軽く出かけて行く。東の地平線の彼方には美しい風景も充分な原始性や自由も到底見られるとは信じられないのだ。だからそっちへは歩いて行かうといふ気持が起らない。それに反して西の地平線上看える森は夕陽の沈む彼方まで涯しなく広がってゐて、そこには煩さい部落や都会などは無いのだ。ぼくは自由に、気まゝに暮りたい。こっちはには都市があり、向うがには斧斤未だ入らざる原始林が招いてゐる。で、ぼくはいつも都市を離れ、いよ／＼原始林の奥深く分け入って行く。ぼくがこんな事を殊更取り立てゝ言ふのも、それがアメリカ人全般の気持だと信ずるからである。ぼくはどうしてもオレゴンの方へ行かずに

はいられない、ヨロッパの方へは真平だ。」と書いたソウロウの気持をそのままに、凡有る自然の暴威、猛獣毒虫及び原住民の一切の攻撃とたゞかって、森を拓き地を掘つて、一步一步此の無限なる自然の宝庫、新大陸を西へ／＼と移動して行ったそのアメリカ大陸に於ける終点、アメリカ合衆国の大陸的完成を意味するものであった。(その「西方への移動」は遂に今日、渺茫たる太平洋の波濤を越えてほくらが現に住み、生活してゐる此の極東の天地へと、更に画期的の大飛躍を、今度の第二次世界大戦を通して遂ぐるに至つたのである。)アメリカ国民は今やそのいはゆる Last Frontier (最後の辺疆) キャリフォルニアに達して、遙かに万里の海波を越えて日本に、支那に、そして又印度に相對したのである。南北戦争の勃発した一八六一年に至る約五、六十年の間に、合衆国の人口は七百万から一躍三千万を算するに至り、且つその人口の半数が此の同じ期間においてアリガニイ山脈を越えて其の東方より西方へと移動したのである。いかにその間の西方移動が怒濤の如き勢ひを以て行はれ、大河の一時に決するが如き情態を示したかが想察せられるであらう。一八四八年は例の Gold Rush (金鉱への急移動)の端を發したキャリフォルニア金脈発見の年である。("Gold! Gold! Gold from the American

River!!”「金— 金— アメリカ河の金だぞ—」の叫びに響応して、アメリカ全土のみならず、遠くヨーロッパから、また東洋から「有史以来の人間颶風」が、此のアメリカの最後の辺疆を目ざして、或は海を航し、陸を渡り、湖水に浮かび、山嶽をよぢ、砂漠を横断し、死の谷を踏み越えて蝟集し来ったことは、一世の耳目を聳動し、マルクスをして「コロンブスのアメリカ発見以上の大事件」と評せしめた。同時にそれはアメリカ文学史上空前の黄金時代であつて、僅か一八五〇年より五五年に至る五年間をとつて見ても一八五〇年には前に掲げたエマソンの『代表的人物論』のほか、ホオソオンの代表作『緋文字』が公刊せられ、ホイッテイヤの『労働の歌』も出た。翌五一年にはメルヴィルの『白鯨』とホオソオンの『七つ破風の家』が、そのまた翌年にはストウ夫人の『トム爺の小屋』が、更に一年置いて五四年にはソウロウの『ワルデン』、そして次の一八五五年にはロングフェロウの『ハイヤワサ』と共に、わがホイットマンの『草の葉』初版がそのBarbaric yawp（野蛮の叫声）を「世界の屋根の上空に」ひびかせることゝなつた。一般社会生活の颶風の進展と相表裏してアメリカの文界、思想界もまた、竜巻の如き勢ひを以て渦巻き漲り、その独自の表現へと突進しつゝあつたかど納得出来

よう。この間において、合衆国の農業時代は南北戦争を中軸として大きく回転して、一八五〇年から六〇年に至る十年間に合衆国特許局に登録された新発明の数が無慮二八〇〇〇件に達した一事にも示さるゝやうに、世は急速に Machine Age (機械時代) へと突進し、鉄道(一八二八年に合衆国最初の開通を見て以来、一八四〇年には延長二八〇〇哩に過ぎなかったものが、三十年後の一八七〇年には五二〇〇〇哩に及んだ)、鉄道工場、及び全国労働組合が各般社会生活の上に支配的影響を持つやうになって、こゝに完全なる近代化、工業時代への脱皮が行はれたのである。この時ホイットマンは此のアメリカの近代化への転化の初頭、なほ独立戦の記憶生々なまなましき雰囲気のうちに育ち、南北戦争を通して身を以て合衆国の国家的統一の完成を体感したのであった。かれが独立不羈の一箇の「我れ」を飽くまで讚美すると同時に、戦友愛の実践者であり、またデモクラシーの祖国、郷土としてのアメリカの熱烈な愛国者であったといふことも、何の不思議もないのである。世界を見渡せば、アメリカにはホイットマンの二歳の兄としてソウロウ有り、一歳の兄としてはドイツのカアル・マルクス、一歳の弟としてはイギリスのハア・バート・スペンサー、二歳の弟としてはロシアのドストイェフスキイが有った。ま

た南北戦争が一八六五年に終結した翌年には、大西洋横断の海底電線布設の大事業が完成し、その翌々年一八六八年には、日本では、西郷さんらが錦の御旗を押し立て、
「宮さん／＼おんまの前にヒラ／＼するのはなんぢゃいな」と東海道をわらじがけで「朝敵征伐」に下って来てゐたのである。

(二) ホイットマンの生涯

かれはその「別れの歌」の一篇「さよなら」の中で、自分の詩集『草の葉』について「友よ、これは本ではない、

これにさはるものは、一箇の人間にさはるのだ。」

と歌つてゐる。『草の葉』が即ちホイットマンなのだ。言葉は人そのものであり、言葉が全部なのだ。ホイットマンを知るには『草の葉』を読めばよい。伝記は無用である。いくら伝記を探っても、ホイットマンその人は出て来ないのである。殊にかれ自身、その一生の労作たる『草の葉』——万物に、特に自己とアメリカに、呼びかけた彼のモノ

ログ、かれの未来の友と、海外の諸国とへ残す遺言の書——の制作動機とその発展過程については、かれみづから『歷程回顧』のうちに、かれ特有のおしゃべりでくどくどと（何か捨てがたい言葉も混って）述べてゐるから、それを読み解いて見ればよい。『草の葉』はわづか一打ダテばかりの詩篇の集としてかれの三十七歳のとき、一八五五年に初版を刷ってから、かれの没年一八九二年に約四百篇の完集本として第十二版を出すに至るまで、かれと共に生長して来たのである。それは読者みづから『草の葉』の言葉に検せられたい。こゝには読者がみづから『草の葉』を読み解かるゝ参考として、主として『草の葉』の諸前提、即ちホイットマンが『草の葉』を書くまでの環境と遺伝について、かれ自らがしるした『自選日記』その他の資料から二、三のヒントを覚書きしておく。

かれは一八八三年、六十四歳の当時発表した『自選日記』の巻頭に、自分の Genera-logy（家系）、祖父母たちや両親の思ひ出、自分が生れたポオマノック（ロング・アイランドのインド名）と其処にすごした幼少年時代の記憶、（かれがその最も美しい抒情的傑作の一つ「ゆりかごのはてなくゆるゝゆらぎより」に歌ってゐるかれの幼時の経験、詩人としての天命の自覚をつかんだかれの経験は、このポオマノックの月白き夜の砂浜

においてあった) 最高の読書、『アラビヤ夜物語』とウォルター・スコットの小説及び詩、その他)、ラファイエット將軍歓迎会に臨んで、老將軍の胸に抱き上げられてキッスして貰ったこと、一家がブルックリンへ移り、自分は家を出て(かれは八人兄弟の次男坊であった)、各種の新聞社に印刷工として働き、十六、七歳から盛んに弁論会に入したり、小説類の耽読家で何でも彼でも手当り次第読みあさったこと、またニュー・ヨーク市の印刷工場で植字工をしたり、十八歳になるかならずでロング・アイランドの田舎の学校教師になつて Board round (生徒の家を泊り歩く)して、表面には現はれぬ人情の機微に深く動かされるところが有つたこと、二十歳頃故郷のハンティントンの町で週刊紙を独力で創めたり、またニュー・ヨーク及びブルックリンに戻つて印刷工及び新聞寄稿家(大概は散文、時として覚束ない「詩」のこゝろみも)として生活をつづけ、ハドソン河の渡し場を熱愛し(「實際ぼくは渡船場といふものがいつも好きで好きで堪らなかつた、渡しはほくに模倣を絶した、流れてやまぬ、活きた詩を提供してくれる、」こゝから彼の名篇の一つ「渡しを渡つて」や短いが忘るべからざる絶唱の「船の上に舵をにぎつて」などが生れた) また雑踏を極むるプロオドウェイの大通りを屢

屢訪うてアンドルウ・ジャクスン、ウェブスタ、クレイ、シュウワド、マアティン・ヴァン・ビュウレン、コシュート、ハレック、ブライヤント、英国皇太子、チャアルズ・ディキンズ、日本からの最初の使節ら等々を眺めたり、(「プロオドウエイ・ベイジエン」の長篇のうちにかれは此の「日本からの最初の使節ら」の姿によって暗示された東西両洋文化の大綜合のまぼろしを歌ってゐる、) またその通りを昼も夜も往来してゐるバス(勿論、当時は馬車であるが)の御者らと親交を結び、(「かれらを惚ればれと眺めたであらう者は豈ラブレイヤセルヴァンテスのみならむや、ホウマヤシェークスピアもまた」とかれは此の「奇妙な、自然な、眼の鋭い、実に素晴らしい人たち」を評してゐる、) また各所の劇場に足繁くかよつて当時の名有る俳優や歌劇歌手らの演技に夢中になつてゐたり、(これら一切の要素は結局かれの『草の葉』の素材としてかれの生命のうちには吸収されたのであるが、) かくて一八四八、四九年(かれは三十歳に達した、)にはブルックリンの『デイリ・イーグル』新聞の編集者として、ついでニュー・オルリヤンズの『デイリ・クレセント』新聞の編集部員として、(このニュー・オルリヤンズへの旅行の往復は、愛弟ジェフを同伴したものであつて、「中部諸州を悉く通り、オハイオ、

ミシシッピの兩大河を下り：恐らく往復の総里程八〇〇〇哩に及んだ」のであった、次いで五一、五三年には、病弱に陥入った父を助けてブルックリンに家屋建築の業を営んだが、五五年には遂に父は病没した。この同じ年にかれの『草の葉』の初版本が、かれの友人ロウム兄弟の町印刷屋で、恐らくかれ自身も手つだつて印刷されることとなった、「幾たびか原稿を書いたり消したり——（ぼくは目次の「詩的」表現を抹殺するの随分苦心したが、たうたう成功した）——した挙句に。」

以上を概括して彼は次の如く言つてゐる——

「以上最初から述べて来た事を概括すれば、（そして、勿論、記録に洩れてをる事がもっと／＼ずっと沢山有るのだが、）今や善いにせよ惡いにせよ固まつた僕自身の性格と其の後其の性格が経験した文学的其の他の生長との主要なる根源ともなり其の特定の型を形成する力となつたものが三つ有ると僕は考へる——一つには、遙か遠いオランダから此の地にもたらされた母方の血統、（確かに一番優れたもの）——二つには、僕が父のイギリス系統の要素から貰つてゐる底力の我慢強さと中心の骨組み（頑固、意地張り）——それからロング・アイランドの僕の生地、海岸、幼時の所見、受けた印象、そ

これらのものと熱帯のブルックリン及びニュー・ヨーク・とを合せたもの——更に恐らく、後に僕が南北戦争中に味はった諸経験を加へたもの、これが第三。」

「といふわけは、一九六二年に、当時ニュー・ヨーク第五一義勇隊の士官であつた弟のジョージが重傷を負つた(十二月十三日、第一回フレリクスバアグ会戦)といふ報せしらに愕かされて、取る物も取りあへず僕はヴァージニアの戦場に赴いたからである。……」

ホイットマンは西紀一八一九年五月三十一日、ロング・アイランドのハンティントン郊外、ウエスト・ヒルズの村に生れた。父はウォルター・ホイットマン(一七八九年—一八五五年)。始め農業に従事してゐたが、後には大工職兼建築業に転じた。一六四〇年トルウ・ラヴ号に乗つてマサチューセツツに移民して来たジョン・ホイットマンの子孫で、無教育ではあつたが、トマス・ペインの崇拜者で、「人がもしどうしても愚か者でないわけにいかんなら、自分の好きな愚か者になれば、幾らか心がいえるだらう」と言ふのが口癖であつたといふ。母はルイザ・ヴァン・ヴェルソア、*perfect mother* (非の打ちどころのない母)とホイットマンが終生渴仰してやまなかつた婦人、その名が示すとほりオランダから来た家系であるが、その父コオネリヤス・ヴァン・ヴェルソア少佐は

純粹のニュー・ヨーク子で、牧馬の名人で「その家には陽気な人達が溢れ、アミー祖母さんのクエイカ帽子を被った優しい老姿、頗る快活で顔の赤い、肥った祖父おぢいさんの良く響く声と独特な顔貌」は少年ホイットマンの記憶に懐かしい影をとどめた。(このオランダから来た血筋の影響であらう、ホイットマン三十七歳当時のダゲレオタイプの与へる印象が、レムブラントの描いた『エムマウスのクリスト』像の表情に酷似するのは。かれは頗る母親に似てゐたのである、殊にその眼の表情など。)兄弟八人、「長兄ジェス次に自分、妹たち二人、メリとハンナ・ルイザ、弟たち四人、アンドルウ、ジョージ、トマス・ジェファソン、それから末弟のエドワード、一八三五年に生れて、いつも一人前の仕事が出来なかつた、近年のぼく自身のやうに」とホイットマン自身記録してゐる。この大勢の家族の中にあつて、かれはつねに親思ひ、兄弟思ひの子であつた。「ワルトは終生その母に自己の動静を逐一報ずること小学生の如くであつた。母はかれが不遇をかこつた世界における信頼と純愛との巖であつた。かくも一切の愛情をさゝげて母に傾けつくしてゐたことが、恐らくかれの性的特異性や物質的貧困にもまさせて、かれの独身生活の原因となつたものであらう」と、一伝記者は記してゐる。またかれの死後、そ

の遺産の大部分は「一人前の仕事のいつも出来なかった」末弟エドワードのために残されたのであって、かれは多年かれ自身の乏しい収入からこの弟のために零細の貯金をしてゐたのであった。

かれは Loaf (のらくら遊んで日を暮すこと) が好きで、几帳面に物事をやるたちではなかった。またかうと思ひこんだ信念は断じて曲げることをしなかった。だから華々しいジャーナリストとしての門出を約束されながら、屢々その新聞社の経営者側と一致することが出来ず、断然袂を払って去らなければならなかったことも一再ではなかったのだ。かれが編集者として最後にたづさはった『ブルックリン・フリーマン』新聞社を一八四九年九月十一日辞するに際しても、

「ぼくに好意を寄せて下さった方々には、この機会に心からなる感謝の至情をさぐげるとも変らず、ぼくの軽蔑と挑戦をおくる。」と訣別の挨拶を掲げたのであった。

弁護士及び医師の少年給仕から始まって、印刷工、植字工、投書家、教師、新聞記者、

建築家、それから後には下級官吏等、ホイットマンの外面的生活形態は幾変転してゐるが、かれの胸に描くまぼろし、かれの Fancy (詩魂) はつねに一貫してゐた。それは「み空伝ひて鳴りひびく」二、三のウタをのこす」こと、十九世紀のアメリカに盛に auto-chthonic (土から生えぬきの) 文学をうちたてること、にはかならなかつた。かれは予言者としての詩人、国民詩人の天命を自覚し、飽くまでも自己に忠実なることによつて其の自覚を一貫したのである。「簡單明瞭なれ。——解らん理窟をこねるな。凡有る靈には、それ自身の言葉が有るのだ……」かう信じたかれは、一方古今東西の第一級の文学、聖經賢伝 (シエークスピア、ホウマ、ダンテ、エスキラス、ヘブライのバイブル、インドのバガヴァド・ギイタ、ゲルマンのニイベルンゲン、ゲエテ、テニスン、ユウゴオ、カアライル、エマスン等々) に眼をさらし、或はこれを波濤の磯にくだくる音にあはせて朗誦し、或は静夜浜辺にひとり立ってみ空に散りばふ星屑のまたゝきを仰ぎつゝ悠遠なる生と死の思念にわれを忘れ、或は暖き陽につゝまるゝ夏草の葉のそよぎに天地の愛のこゝろを直感しつゝ、ひたすら自己に沈潜し、自己内心に鳴り出づる言葉のひびきを、或は森蔭に囀る淋しき鳥のさやけき声に、或は大海の五百重千重しき波寄する大うねり

のリズムに合せて、千練万鍛した末の幾篇かを、かれの愛する『草の葉』の名のもとに、発行者を待たずみづから印刷して世に問うたのであった。その初版の序に、かれは言ふ、――

「およそ地上いつの世に存在した一切の国民のうち、アメリカ国民こそ最も豊かな詩的天分を有してゐるものであらう。合衆国そのものが本来最も偉大なる一の詩篇である。今日までの地球上において、どんなに大きく、またどんなに動きの烈しさを極めたやうなものでも、これにまさるわが合衆国の豊かな広袤と無尽の活動に比すれば、その生彩を失ひ、またいかにもつましやかなものに見えてしまふ。遂に此の国土においてこそ一切の人類の所作において宇宙たる昼夜の交代に匹敵するものが現はれたのだ。こゝにこそ一切の羈絆から解き放たれた活動が、必然個別と細目とを度外に附して、大集団を成して自由無碍に進動しつゝあるのだ。こゝにこそ永遠に英雄の本質をさし示す勇俠寛仁の徳の成就が有る。こゝにこそ瑣末なるもの悉くなげうって、古今中外に比例を絶したる大群衆、大集団の大胆不敵の布置と、理想への追求猛進とを以て成さるゝ行業が縦横自在に展開されその有り余る素晴らしい蕃殖力を惜しみなく雨ふらすのである。これを

見て人は納得する。なるほどこゝにこそ夏と冬とを併有する富があるのだ、それは断じて破産する憂がない、五穀が地に稔り、果樹園が林檎を降らし、入江に魚棲み、男子が婦人に子孫を生まれむ限りにおいては、と。」

この確信に満ちたアメリカの使命の予言者は、南北諸州の壮大凄惨を極めた対立激突と統一ある合衆国崩壊の危機に面して果して如何の感懐に打たれたであらうか？ かれの『自選日記』の一節「挙国民の奮起と義勇従軍」の言葉を読んで見よう。

「どこかでぼくが言った事であるが、一八六〇年に先立つ三代の大統領在任期間が示したものは、このアメリカの共和制下に在っても全くヨーロッパの王政下におけると同様に為政者の墮弱と悪徳とは可能だといふ一事であった。しかもあの奴隸制を主張して国の分裂を意図する者共に対し、あの悪魔の再来に対し、それがハッキリ顔を見せるや否や素早く立ち上って見事にこれに組みついて行った国民の意気については、ぼくは何と言ったらいだらう？ あのチャアルストンで国旗に向って反逆の銃撃が行はれた時の、あの大火山の爆発にも似た全国民の一斉奮起は、従来大いに疑はれてをった或るものゝ存在を疑ふ余地なく証明したものであって、これでもう国家分裂の問題は本質的

に即座に解決がついたのである。ぼくの判断によれば、これは恐らく古代現代を問はず如何なる時代においても、政治の進歩とデモクラシイのためにこれほど壮大な、これほど心を温める光景は未だ曾つて無かつたと思ふ。また将来も無いであらう。それは単に表面に現はれて来たものだけによつて言ふのではない——それも大切ではあるが——しかしそれが背後にさし示したものの、これこそ真に永久の重要性を有つものだったのである。新世界人の魂の奥底深くには、国家統一の意志が揺ぎなき底つ岩根として形成され固着されて来てゐたのだ、そしてこの意志が断乎として、且つ絶対多数者に存して、微塵もこれに手を触るゝを許さず、また反対の議論を容るゝ余地を残さず、凡有る危機にも恐れず立ち向つて、いついかなる時にも一切の外面的拘束を断ち切つて大なるごとく爆発する力を持つてゐたのだ。これは実に現世紀の、またアメリカの最善の教訓であり、またぼくらがみづからその一分子としてこれに参与し得たことに真に大いなる特権として誇るものである。(二)一つの偉大な光景、過去一切の歴史にその比を見ないデモクラシイの不滅の証拠が、この南北戦争によつて提供されてゐる——一つはその始まりに、次の一つは終りに。前者は国を挙げて、自から進んで、武器をとつて一斉に奮起したこ

と、そして後者は一八六五年の夏、おだやかに、またお互ひ怨むるところなく一切の軍を解隊したこと、である。」

例によって最上級の形容詞がフンダンに使用して有るが、かれにとっては実にしかくその心にひしと感ぜられたに違ひない。いよ／＼かれのアメリカに対する、アメリカ国民に対する確信は固められたのである。が、そこにまで到達する間の、全国民の悲風惨雨の体験は痛く／＼愛に満ちたホイットマンの魂を打ちつづけずにはゐなかつた。かれの眼は、かれが衷心から熱愛した野人大統領エイブ・リンカンのそれのごとく、この五年間、全アメリカ国民の眼と共に抑へがたく、とめどもない悲喜の涙にひたりつゞけてゐたのであつた。一九六一年七月の最初のブル・ランに於ける戦ひの、北軍の敗兵ワシントン府に入る日の、かれの手記を読んで見よう、――

「……敗兵たちは二十二日の月曜、夜のひき明けからロング・ブリッジを渡って続々とワシントン府に流れ込んで来た——この日は終日雨が小止みもなくシヨボシヨボと降つてゐたが。戦ひのあつた土曜、日曜（二十、二十一日）は頗る乾燥して、猛烈に暑かつた——塵ほこり、すゝと煙が重なつて汗にしみこむ、その上へまたそれらが重なり

つもって汗にしみこむ、それがあの無我夢中である人たちの体軀に吸収されていったのだ——かれらの戎衣はどれもこれもあたり一杯の粘土の微粉で裏の裏までも沁みとほつてゐる——それは軍隊の歩列、おびたゞしい輜重車、砲車等の進行のために、乾いた道路や踏みつけられた畑などから到る処まひ上つてゐるのだ。すべてかうした泥と汗と雨とで固まつた軍隊が今や戦場をすてゝ逃げかへり、ロング・ブリッジを渡つて続々とくりこんで来る——二十哩の恐ろしい進軍、しかもワシントン府へ負けて、敗残の烙印を押されて、虚脱した魂のぬけがらを抱いて帰つて来るのだ。あの君たちが出かけていった時の広言はどうしたか？ あのと誇らかな壮語はどこへいったか？ 君たちの旗は、君たちの楽隊は、そして君たちが捕虜を縛つて連れかへる筈だったあの繩はどこに有る？ よし、楽隊は奏してをらん——また旗も、一つとしてみじめに細くその竿にすがりついてゐないものはないのだ。……午前中、ワシントン市街は到る処かうした敗兵たちの姿にいろどられてゐた——妙な外観をした者共、眼も顔も並の人ではない、濡れそぼつて（その日一日雨は絶えずシヨボ／＼と降つてゐた）そして恐ろしくぬれて、飢ゑて、ゲツソリと頬も落ち、足は皆腫れ上つてゐる。親切な人たちは（それも余り数は多くない

のだが、急いでこの兵士らに供すべく炊出しの用意をしてゐる。大釜を火にかけて、汁を、コーヒーを、湧かしてゐる。歩道に食卓を据ゑ——大馬車に何杯となく山盛りのパンを買ひとゝのへて、見る／＼大切れに切つて行く。こゝには二人の老婦人、面立ちも優しく、教養高く人柄も美しく此の首都でも指折りの人たちののだが、今荒けつりの板のにわかづくりの食卓のそばに立つて、置き並べた食べ物、飲み物を供してゐる。そしてそれらを自分の家から半時間ごとにその日一日、あとから／＼補充せしめてゐるのである。雨ふる中に二人は立つてゐる、終始黙々と働いて、白髪のお婦人、敗兵たちに食を給仕してゐるのだが、その両頬には涙が幾筋も伝はつてゐる、殆んどひまなく流れ伝うてゐるのだ、身は絶えず働きながらも。かうした深い興奮、群集と運動、また必死の促進の只中であつて、多数の、頗る多数の兵士たちが眠つてゐるのを見るのは不思議な感じがする、——一切の只中で前後不覚に眠つてゐるのである。かれらは処えらばずグツタリと眠りこける、家々の戸口の階段、地下室だの垣根の柵だのに寄り添うて、或は道路からわきへはといった空地の上に、倒れたまゝ昏々と眠つてしまふ。あそこには可哀さうに十七か八の少年が大きな邸の門前に寝てゐる、実に静かに、深い／＼眠りにはい

つてゐる。中には眠りながらも、しっかとその銃を握りしめてゐる者もゐる。或は五人十人、隊を成して、戦友同士、肉親の兄弟のやうに、互ひに寄り添うて——そしてかれらがかうやって寝てゐる上に、小止みなく雨は降る、ムツツリと不機嫌に降りそゞいで止まぬのである。」

だが、かうやって情感に満ちた、かれの当時の記録を一々写してゐては限りが無い。それらは読者みづから、かれの『自選日記』なり、『戦争覚え書』なりについて読みたい。こゝには只もう一箇所、リンカン暗殺の報の伝はった其の日のかれの記入を読んで見るにとゞめよう。それは一八六五年、四月十六日、「リンカン大統領の死」と題する一項である。

「ぼくの当時の手記の中に、エイブラハム・リンカンの死について、かうした一節が有る。——かれはアメリカの歴史と伝記とに、今日までのところで、その最も劇的な追憶を残したばかりではない、——かれは残してゐる、とぼくは思ふ、最も偉大、善良、特徴の最も際立った、最も芸術的、道徳的な人格を。かれに欠点が無かつたのではない、また実にかれは様々な欠点を大統領たる間にもさらけ出しましたが。しかし正直、善良、

炯眼、良心、それから（も一つ新しい美徳、これはすべての他国の知らぬ、この国でもまだ本当に知ってはをらぬ、が将来立派に証明されるであらうやうに世界万国の基礎であり、また結合力となるもの）、ユ、ニ、オ、ニ、ズ、ム（團結主義）、その最も真実な、内包の広い意味で、——これらがかれの性格の底つ岩根を形造つてゐた。これらをかれはその生命を以て証した。あかしかれの最後の悲劇的光芒は一切を淨め、一切を照らして、かれの姿の周り、かれの頭の周りに、聖なる耀きをそゞぐのである。そしてそれは苟くも歴史の生きむ限り、愛国心の続かむ限り、永久に滅ぶることなく、また時と共に愈々その耀きを増して行くであらう。この国の統一は多くの人々に助けられて来たのだが、もう一つの名、ひとりの人を取り出さねばならぬ場合には、かれこそ、すべての人にもまして、これを将来の時代に対してまもりとげた人なのである。かれは暗殺された——が、国家の團結は暗殺されない——サ・イラア！一人たふれ、また一人たふれる。兵士はたふれふす、波のやうに沈む——だが、大わだの隊伍は永遠に押し進む。死はその任を果し、抹殺する、百人を、千人を、——大統領を、大將を、大尉を、兵卒を、——だが、国民は滅びず！」

ホイットマンはこの確信を胸にいだいて、愛弟ジョージ負傷の報に取る物も取りあへず南方ヴァージニアの戦場にみづから急行した。それはこのリンカンの死に先立つ満二年半、一八六二年十二月の事であった。幸ひ弟の傷は軽かったが、かれはこの時から戦争が終結して野戦病院の閉鎖するまで約三年間、或はヴァージニアの実戦場に、また殊にワシントン府内外の多数の陸軍病院において、日夜親しく傷病兵の看護に献身した。同胞愛に溢れてゐたかれの胸は、みづから銃を取って同胞の殺戮に加はるをゆるさず、南北の別無く此の痛ましき戦ひに傷つきたふれし人らの上に、やむにやまれぬかれの熱涙を、平等に注がしめたのである。この間かれは耐乏困苦の生活を送り、或は写字をしたり、或はブルックリン『イーグル』及び『ユニオン』、ニュー・ヨーク『タイムズ』等の諸新聞紙に（後に大部分『自選日記』及び『綱帯夫』の中に収められた、戦争中の鮮かな見聞の筆録を寄稿したりして僅かに身を支へてゐた。実にこの期間はアメリカ合衆国史上最大の時代であったと同時に、その時代の息づきを全国民とその心臓の鼓動をあはせて息づいてゐたホイットマン自身の生命的振動も、その最大振幅を示した時期であった。その永遠の記念が一八六五年詩集『軍鼓のひびき』として『リンカン大統領追悼詩』と

合せて発表された。(これはいづれも完集本『草の葉』の一部として収められてゐる。なほ『自選日記』の前半は此れと併せ読むべき、当時のかれの散文記録である。)後かれが中風の発作に倒れ、終生半身不随の身となったのも、この時の過労にその端を發してゐるものと言はれてゐる。

この時期はかれが後に『歷程回顧』の中で「あの三、四年の年月と、その年月の与へた経験がなかつたならば、『草の葉』は今日存在してゐなかつたであらう」と述懐した「苦痛に満ちた物凄いな月——この時を経て以来真に混一して同質となつた此のユニオンの、(一七七六年—八三年にもまさる)真の誕生の年月」であつたのであるから、この重大時機におけるかれの献身と、そこにかれが汲みとつた不滅の印象と確信とについて、主としてかれの『自選日記』から、更に二、三附記しておかう。当時かれは、寢室一、テーブル、こわれ椅子一の汚らしい屋根裏の一室に寝おきして、大概はパンをかじり茶をすゝるだけで、一切の余裕を挙げて傷病兵の慰問に費した。一、二この間におけるかれ自身の叙述を読んでみよう。

「ぼくの慰問準備、——各病院を慰問してまはつてゐるうちにぼくは知つたのだが、

医療上の看護や美味の食物、或は慰問金、その他いかなるものにも増してぼくが成功し、力となることが出来たのは、単に自分が躬みづからそこにゐて、平常通りの元氣と人的魅力を放散するといふことに於てであつた。戦時中ぼくは完全な肉体的健康を保つてゐたのだ。ぼくの習慣としては、出来るだけ、事前準備をととのへることにしてゐた。あの二時間から四、五時間にわたる日々の、或は夜々の慰問行に出かける前に、ぼくは先づあらかじめ十分の休息をとつて元氣をつけ、風呂に入り、清潔な衣服に着かへ、しっかり食事をとり、そして出来るかぎり愉快な様子をするににしてゐた。」

かうやって仕度をととのへて出かけて行つて接する場面は、——

「重傷——若い人たち、——兵隊たちは殆んど皆が皆青年だつた、そして一般に考へられてゐるよりも、ずっと／＼アメリカの者が多かつた——十人のうち九人までは此の国に生れた人たちであつた。チャンセラヴィルから後送されて来た人々の中には、オハイオ、インディアナ、それからイリノイの出身兵が多数ゐた。いつものやうに、各種各様の傷が有る。砲兵隊の弾薬庫が破裂した／＼め恐ろしい火傷を負うてゐる者もある。一室には延々と一列に将校ばかり並んでゐる、重傷者も混つて。昨日はいつもより酷かつ

たやうに思はれた。四肢の切断手術が行はれてをって——付添の看護人が繃帯をしてゐる。そこを通るときには、顔を向ける方向を用心しなければならぬのだ。先日もぼくの目撃した事だが、或る紳士、一見好奇心からの訪問者らしかったが、或る病室で足をとめて一瞬軍医たちが探針さくはりを入れてゐる怖ろしい傷口をふりかへって見た。が、かれは顔面蒼白となつて、アツと思ふまに氣を失つて床に倒れてゐた。」

かうした場面の中を、かれは一人々々まごゝろをこめて慰問してゆくのである。その一例、——

「ニューウ・ヨック出身の一兵士、——今日、七月二十二日の午後、ぼくは長い時間ニューウ・ヨック第一五四部隊ジイ中隊オスカ・エフ・ウイルバの傍で過ごした。この兵士は慢性下痢と、その上に重傷で元氣が無かつた。かれはぼくに『新約聖書』を読んでくれと言つた。ぼくは承知して、どこを読まうかと訊いた。かれは言ふ、『どこでも、あなたのよいところを』と。そこでぼくは、四福音書の始めの方の一卷の終りを開いた。そして終末時のクリストと、いよいよ十字架にかかる場面の叙述を読んだ。痛々しく瘦せ衰へた青年は、次の章も読んでもらひたいと言ふ。クリストの復活の簡条を。ぼくはご

くゆっくり読んだ。オスカは氣力がなくなつてゐたから。かれは非常に喜こんでくれたが、両眼には涙が一杯たまつてゐた。かれはぼくに宗教が好きかと尋ねる。ぼく曰く、『どうも好きでないらしいんだよ、きみ、きみのいふやうな意味ではだね。だけどやっぱり、それは同じ事かも知れないんだ。』かれ曰く、『宗教はぼくが一番力にしてゐるんです。』かれは、死について語り、死を恐れないと言つた。ぼく曰く、『おや、オスカ、きみは癒るとは思はないのかね?』かれ曰く、『癒るかも知れませんが、がそれは万一の事です。』かれは自己の症状について平静に語つた。傷は極めて重く、出血多量であつた。それに下痢のためにすっかり体力を失つてゐたので、その時すでにかれは死に瀕してゐるものとぼくは感じた。かれの挙措はいかにも雄々しく、且つ愛情に溢れてゐた。別れようとしてぼくが与へた接吻をかれは四倍にして返してくれた。かれはその母親の宛名を教へてくれた、ニュー・ヨーク州キャタロウガス郡アリガニー郵便局サリ・デイ・ウイルバ夫人。かれとのかうした会見を幾度もぼくはした。が、以上に記した会見後二、三日してかれは遂にはかなくなつたのだ。」

「病院、野營 或は戦場で過したあの三年間に、ぼくは六百回に余る訪問乃至旅行を

した、そして全部概算すると八万人から十万人までの傷病者の間に立ち混って、その人達の精神上、肉体上の危機に、幾分なりと、力になって上げることが出来た。」

そしてその間にかれが得た印象は、いよいよかれのアメリカ及びアメリカのデモクラシーに対する信を深め、且つ堅くする客観的根拠を与へたのであつた。かれは「戦争の真相はつひに書物には載らないだらう」として言つてゐる、——

「他の人達はどうかであつたか、またどうであるか知らないが、ぼくにとつては一番ぼくの心をとらへたもの（また今でも、回想すること心をはひくもの）は南北を含めた両軍の卒伍、或は病院で、或は戦場における戦死者の中にさへも見られるあの一人々々の兵士らの事である。ぼくにとつては、あの両軍に具体化されてゐる南北合せて二、三百万のアメリカの青壮年——しかも特にそのうち三分の一乃至四分の一の人々、戦争の進行中いつか或は傷つき或は病に倒れた人々——の中にあつてわが諸州の人的の底力乃至諸々の美德を実証する諸点は、それにからまる政治的利害を立ち超えた重要性を有つてゐた。（なぜなら、一民族の興廢を決するものは結局、かれがいかに死に面するか、いかに苦痛と病氣にたへるか、といふことに帰するからだ。なぜなら、危急の場合に示

さるゝ情緒の閃き、乃至プルウタアクの描いてあるやうな間接的の特徴や傍白こそ、古代世界といふものに対して、一切の正史が伝へ得ないほどの深い洞察をほくらに与へてくれてゐるからである。」

大柄な体軀を悠々と動かして、頬はつやつやと赤く、白髪房々と垂れ、ネクタイ無しの開き襟で満面に愛嬌をみなぎらせて大路に闊歩し来るかれの姿、老いて而も天真流露あくまでも懇切を極めてはゐるが折にふれてその澄んだ眼中にはキラッと人間以上の——或は以下の——影が映ったと、田舎から出たばかりの若きジョン・パロウズの眼に映じたのも無理もない事であった。かうした生活をワシントンで送るあひだ、かれは二、三十回はよそながら大統領リンカンを見る機会が有った。かれは一八六三年八月十二日の日記にかう記してゐる、——

「ぼくは殆んど毎日のやうに大統領を見る、たまたまぼくの住んでゐるところが丁度大統領の郊外の宿舎から往復の路に当つてゐるためである。暑熱の烈しい間、かれは決して宿舎で寝ることはせず、ワシントン府を北に去る約三哩の健康地、国立軍事施設、兵隊ホームに泊つてゐるのだ。今朝は八時半頃、エル街の近傍、ヴァモント通りを馬に

乗ってかれが出動する姿を見た。かれにはいつも二十乃至三十騎の騎兵の一隊が白刃を抜きつらね、肩上に直立せしめて付き従つてゐる。世間の噂では、この護衛はかれの個人的の意志には反するものであるが、かれは枉げて自分の助言者たちの為すにまかせてゐるのだといふ。この一行は、その制服といひ馬といひ、格別人目を惹くやうなものはない。馬上のリンカン氏は通例かなり大型の、動きの楽な白馬に跨がり、黒の平常服のやや色あせ、埃りのしみたものを着て、固い黒帽子を被り、どこから見ても普通の人と殆んど何ら変はったところはない。……ぼくはエイブラハム・リンカンの渋茶色の顔を頗る明瞭に見るのである、そこには深い皺が幾すぢも刻まれ、その眼には深い悲しみの色をたたへてゐるやうにいつもぼくには思はれる。二人はお互ひ顔見知りになつて会釈を交すやうになつた。しかも心からの親しみをこめた会釈を。大統領は時として、また幌をのけたバルウシ（半幌付き四人乗りの四輪馬車）で往復することもある。騎兵隊はいつでも抜刀して隨身してゐる。…夏の始め頃ぼくは折々大統領と夫人とが、午後も遅くなつてから、バルウシに同乗して市街を散策に出かけるのを見た。リンカン夫人は黒一色の衣裳で、長いクレープの面紗ヴェールをかけてゐた。馬車の行粧は質素を極めたもので、馬

は二頭だけ、それも何ら特別の馬ではない。かれは或る時直ぐぼくのそばを通ったので、ぼくはまともに大統領の顔を見た、馬車が徐行してゆくあひだに。その時かれの視線は、心はよそにあるものの如くであったが、たまたまじつとぼくに眼をそそがれてみた。かれは会釈をしてニコリ笑った。がその笑顔の底深くぼくはありありと見てとったのである、ぼくが前に言ったあの表情を。現存の画家乃至いかなる肖像も未だこの人の顔の、あの深い、しかも微妙で、底の知れない表情をとらへてあるものはない。何かまだそこには、ほかに有るものがある。二、三百年前の二大肖像画家たちの一人が入用なのだ。」

あゝ永遠にアメリカのデモクラシーを象徴すべき二人者の邂逅、互ひに言葉は交はさずとも二人の胸には共に相通ふ心の脈搏があったのだ。リンカンがまだスプリングフィールド在住の頃、かれは共に弁護士事務所を開いてゐたハアンドンが購求して、事務所の机に放つて置いた『草の葉』第二版を家に携へ帰つて読み、後にはこの「大草原の歌」を朗誦して人にも聞かせたと伝へられてゐる。まことにリンカンもホイットマンも共に、アメリカ建国の思想的指導者トマス・ジェファソンの精神的継承者であり、ジェファソンの理想を守らむがためにリンカンはクレイ党と断ち、ホイットマンはジャクスン派を

離れたのである。南部ケンタッキイ山中の丸木小屋に呱呱の声をあげたりリンカンは、やがて西部イリノイの大草原に人となり、その大自然のままなるかれの性格には辺境開拓者の自然との猛闘が深く深く刻印せられて、白聖館ホワイト・ハウスの主人公となって後もその悲劇的印象は不滅の記憶となつてかれの精神生活全体を支配してゐたのである。この人こそホイットマンがその歌に予言し、熱血をささげて呼びかけてをった「草莽崛起の英雄」、統一せるアメリカの象徴 American totality (アメリカの全一性)を身を以て具現する活きたる理想そのものであつたのだ。ホイットマンもリンカンも共に、ジェファソンの掲げた「自由なる社会の諸公理」の深信者であり、その公理のアメリカにおける活現をとほして来るべき世界人類大同の理想への熱烈なる愛慕者、先導者でもあつた。こゝにアメリカ建国の理想は政治的にはリンカン大統領の公生涯に代表せらるると同時に、「歌はれて残る」永久の「生の記念」としてホイットマンの『草の葉』がわれらに残しとどめられたのである。

戦後ホイットマンはそのままワシントンにとどまつてニュー・ヨークへは帰らなかつた。一八六五年、かれは内務省に職を得て働いてゐたが、かれが『草の葉』の著作者な

るを知った内務相ハアランは有無を言はず免職してしまった。これは『草の葉』初版出版以来かれが常に受けて来た世間の誤解と圧迫との顯著な一例であつて、エマソンが折角かれにもっと一般世人の考へ方にも適当な考慮を払ふやうにと忠告してくれたにも拘はらず、これをかれが例の意地張りで押し通して来た当然の結果でもあつた。(かれは「アダムの子ら」や「キャラマス」の諸篇で、性の問題を大胆卒直に取扱つてゐる。

それは『古事記』の神代歌謡の若干に通ずるやうのものである。) かれには固よりかれの信ずるところ牢乎として動かすべからざるものが有つたのであるから、敢へて氣にもかけなかつたが、かれの友人ウイリアム・ダグラス・オウコンノアは「善良な白髪詩人」(ホイットマンは幼少の頃は漆黒の髪であつたさうだが、早くから白髪が混り、やがて真白になつてゐた。)の一文を草して敢然かれの弁護に奮ひ立つた。他の友人らもかれのために奔走してくれたので、かれは間もなく、今度は最高検察庁の事務職員の仕事を得て、爾後八年間、一八七三年一月中風の発作に襲はれて倒れるまで其の職に在つた。この間かれの名はウイリアム・マイクル・ロゼッティの手で編集され、一八六八年にイギリスで発刊された『ワルト・ホイットマン詩選』を通じて、やうやく英本国及び

歐大陸諸国の文界、詩壇を衝動し始めてゐたが、流石強情のかれも病氣には勝てないので、かれは数年間を支ふべき貯蓄をたづさへたまふ、半身不随の身をニュー・ジャージー州カムデン市の、弟ジョージ・ホイットマン大佐方に運んで行つた。実にかれが五十四歳の春である。それでも、かれの強靱な体格は、よくこの大患を凌いで、一八七九年にはコロラドへ、翌八〇年にはカナダへと、長旅をこゝろみるまでに恢復した。そのうち、一八八二年フィラデルフィアのリーズ・ウォルシ社からかれの散文集『自選日記及び文集』と並べて出した『草の葉』の売行が良かったので、その上りから同じカムデンのミックル街三二八番地に小さな家を一八八四年三月買取つて移り住み、ここが一八九二年三月二十六日七十三歳で永眠するまで満八年間の宿となつた。一八八三年には、カナダのリチャード・モオリス・バック博士が、『草の葉』を「デモクラシーのバイブル」と讃へてホイットマンの最初の詳伝を書き、一八八八年から一八九二年かれの没するまでハウレス・トラウベルは毎日かれを訪れ、出版者との面倒な交渉等を親切に無報酬でかれのために代行し、日々のかれの座談を丹念に記録して備忘とした。(これは後に公刊されてゐる。)この二人はいづれも、ホイットマンの遺言で、かれの死後その

遺著及び遺稿の管理者と指定された。

今キヤムデンを訪れる者は、ホイットマンが生前自からブレイクの構図によって設計したかれの墳墓に詣でることが出来る。しかしそこには、丁度昇天後のクリストの墳墓のごとく、ホイットマンその人は居ないのである。永遠のホイットマンは『草の葉』の言葉を通して不滅の「かれそのもの」を宣言してゐる。眼ある者は見よ、耳ある者は聞け、敢へて隠すところなく、赤裸々のホイットマンはその一つ一つの詩篇をとほしてぼくらの前に立ち、ぼくらの耳に親しく呼びかけてゐるのである。また実に、一々のイギリス人を「キング・シェイクスピヤの臣民」と呼び得る意味において、一々のアメリカ人を「カメラアド・ホイットマンの分身」と称し得るであらう。現にぼくらが街上において、日々親しく接してゐる若いアメリカの兵士たちは、みづから意識するにせよしないにせよ、皆一々ホイットマンその人の分身と見てよい。『草の葉』をひもとき味ひ、そしてかれらを観察せよ。有るがまゝの人としてのアメリカ人をかれは最も大胆卒直に告白宣言したのである。ぼくらもまた有るがまゝの人として卒直にかれらに対し、その若き人たち一々に対してホイットマンが斯くも満腹の熱血をそそいで愛の言葉を呼びか

けたことを想起し、またその人たちの一々のためにリンカンがその悲壯雄大な生命をなげうち献げたものであったことを追憶して、真に砕かれたる心をもってかの人たちに親しみ、新日本の再興のために一切の教訓を吸収しようではないか！

(三) 『草の葉』について

ホイットマンは一八七二年『大鳥のつばさもかろく』の序文の中に、『草の葉』初版の成立を回顧してこんなことを言っている、——

「もうなが年の昔だが、ぼくが自分の歌の計画を練り始め、そしてその計画をとつくりかへしおつくりかへしよつとけて、ぼくの心のなかでそれを変形し変形して、幾多の年月（二十八歳から三十五歳に至る）を経たのだが、その間多くのこゝろみ^{こゝろみ}をなし、どれほど書いてみたり破ってみたりしたかわからんが、そのそもその始めに一つの深い目的が他の一切の目的の基盤として横たはってゐた。またその後つねにその計画及びその計画の実践の基盤として横たはってゐるのである——そしてそれは宗教的目的なの

だ。……勿論在り来りの方法で表現しようといふのではなく、……新しい方法で、そして人間性の最も広い基底と含蓄とを目指し、且つ海と陸とのさはやかなの風とそのしらべ、をあはせて。」

すなはち、かれの詩人としての天命の自覚は「ゆりかごのはてなくゆるゝゆらぎよりに歌はれてゐるやうに、既にその少年時にあったのだが、それがかれの時代の一切の影響をかれの内心に吸収しつゝ、この新世界に今や嵐のごとき勢ひをもつて生成しつゝある新時代に対し、その独自の表現を与へなければならぬことを痛感して、「ブツブツグツ／＼と煮立ちかけてゐた」ものが、エマスの言葉に触発されて遂に一時に「沸騰」するに至り、一切の旧形式をかなぐりすてて、「ぼくにはその不思議が了解できないのだが、ぼくはいつも自分を二つのもの——わが^{たま}霊と自分——として意識する、そしてそれは男女を問はず万人に共通なことを考へる」とかれが書いた、そのかれの「詩魂」にみちびかれつつ、「一切の靈魂には、それ独自の言葉があるのだ」と叫んで、「人間の最も広い基底と含蓄とを目ざし、且つ海と陸とのさはやかなの風とそのしらべをあはせて」かれの新たな詩に生みの苦しみをなめたのが、かれの二十八歳から三十五歳に

至る八年間であつた。實にかれが『草の葉』の「胚種」として提示した数多のノート・ブックの最初のもの一八四七年に属し、「簡單明瞭なれ。——神秘的になるな」の一句で始まつてゐるのであつた。そこに書きしるされた言葉はかれが従来発表した如何なる散文乃至韻文ともその質を異にした、かれの詩魂の独白、かれの靈そのものの託宣、「かれそのもの」の「生理機構の全体」からおのづとひゞきいづるリズムをさながらにしるしとどむる詩的表現、——押韻にたよらず、定型律を借らず、長短錯雜、大わたの波のゆらぎの或は小さく或は大きく連続不斷におしよする無限行進のそれのごとき語群の集團、一切の裝飾を撤したるクエイカ宗徒の集会所のそれにも似たる簡素朴訥の片言隻語とその累積、歌のしらべになりもならずも、ただ有るがままなるわがおもひをおもふがままに言ひいづるをさなごの無技巧の技巧、自然のリズム、——「多くを書き多くを捨て」「幾多のこころみをつくす」、苦心慘怛して所謂「詩的なる」表現の一切を抹殺しはてたるのちのあらがね、——得て言ふべきなき赤裸々の「われそのもの」の歌、いま見るごとき『草の葉』のそよぎとなつてゐた。それは世のすべての『自由詩』の母胎ともなり、現代アメリカ詩の主流を代表すべきヴァチュル・リンゼイ、カアル・サンド

バアグの出生をも約束したものである。

かれの究極の目的は「唯美的」なるものにあるのではなくして「宗教的」なるものにあった。かれは一八七六年『草の葉』第六版の序の自註のうちにかう言つてゐる、――

「人が最も偉大なのは戦争の勝利者としてでもなく、発明家もしくは探検家としてでもなく、また科学とか、その他の知的もしくは芸術的の資格においてでも、或はまた何か素晴らしい慈善の模範としてゞさへもない。最高のデモクラチックな見方からすれば、人間が最も勝れたるものとせらるべきは唯その人が生れつゝいたまゝに或は普通の百姓、船頭、職工、事務員、労働者、或は御者としての日常の実生活を立派に生きる点にあるのだ――この立場を中心の基底乃至踏台としてその上に立ち、またそこから出発して、その立場に属する諸々の務めを、市民とし、子とし、夫とし、父とし、また雇人として果しつゝ、同時に自己の體質風格を維持し、開展し、他の領域に自己を放射しつゝ上昇してゆくのである――そして特に、(一切のうち最も偉大、たとへどんなにえらい天才にもまさり、いかなる方面の豪傑にもすぐれてゐるのは)かれが充分に良心、靈性、神性を実現し、これをよく耕し、これを自己の一切の言行に体现して一生を貫き、最後まで

で断じてこれを枉げないことにある——これこそホオマアの、或はシェイクスピアの未だ達し得なかつた高さまで翔けりのぼるのである——一切の詩やバイブルよりも広大である——すなわち、大自然そのものと等しくなり、その真只中に立つのである、きみ、自身、きみ、そのものが、靈も肉も。(万物は奉仕し、助力するが、万物の中心に、一切を吸収しつつ、またきみの目的のために一切にその唯一の意味と生命とを与へつつ、万物の主として、永劫の法則の下に、きみ、自身、が立ってゐる。——この有るがまゝなるわれそのものの、またきみそのものの法則の歌を、宇宙不易の法則に合せて歌ふといふことが、あの『草の葉』の主要意図なのである。)

すなはち、その手法において一切の Tricks (手先の技巧) をすいた Simplicity (無技巧) に随ふと同じく、その取材においても、一切の伝説、神話、珍説、奇談、英雄と佳人を過去の詩と共に葬り去って、たゞ有るがまゝの One's Self (われそのもの) Yourself (きみ自身) を永久の驚異として歌ふのである。その個人と個人とを結ぶ友愛、その友愛の上に成るデモクラシー、そのデモクラシーの理想の具現者としてのアメリカ、そのアメリカの生々無息なる現代的歴史的開展、その開展への没入に見出さるる同感同

証の忘我の大歓喜、これこそ『軍鼓のひびき』を Pivotal to the rest entire (余のすべての中軸) とする『草の葉』全篇の主題であつて、ホイットマンの宗教がそこに存する。まことにステイヴンソンがホイットマンの中心思想を正しく指摘してゐるやうに

「正しく理解すれば、凡有る物のうち最も柔かな物——相なつかしみ、共に傷む心——に拠つてこそ社会の車輪は恰かも完全な軸に載つたやうに安々とまた揺ぎ無く廻転するのである。」そして、

「人がその戦友に寄する熱き愛——友を友に結ぶ引力、幸福な結婚をした夫婦の愛、子と親をつなぐ羈紐、町と町と、国と国とが相惹く力。」

こそホイットマンの宗教であり、『草の葉』の生ひ出づる大地であつた。かれは『十一月の枝』の「詩五千」の中にかう言つてゐる、——

「ぼくは自分として、心からなる感謝をして置きたいのだ、ただに過去の偉大な傑作に対してのみでなく、過去現在一切の詩人に対して、また一切の詩的表現に対して——それは実に全体として人類進歩の支配的精神要素なのだから。この進歩、及び進化の見地から見て、宗教的並びに審美的要素——即ちいかなるものにもまさつた、最も重要な

要素——は、他の一切の手段及び影響を全部合せたものよりも、更に一層多く詩歌に負ふところが有る、とぼくには思はれる。極めて深い意味において、宗教即人類の詩歌なのである。」

また「詩歌としての聖書」^{バイブル}を論じて、かれは言ふ、——

「一切の言語に翻訳されて、それは如何にこの千種万様の世界を統一し來ったことか——今日、文明諸国のうた、われわれの追憶の中にそれが織りこまれ、つながれ、また浸透されてゐない者が誰があるか？それは単にその表紙と裏表紙の間にはさまれてゐるものをほくらに提供するばかりではない、いや、それはそれが提供してくれる一番僅かなものに過ぎないのだ。この書にしるさるる幾千行の言葉のうち、一行として、一語として人間の深い感情に繁くもまとはれてゐないものはないのである。幾代も幾代もの父と子、母と娘、ほくら自身の祖先の、それはほくらの背景と不可分につながつてゐて、その背景にこそ、夢のやうだが、われわれの今日といふものがすべて基ついてゐる——ほくらの先祖、ほくらの過去。……不思議だが、事実なのだ、聖書が世界の各国民と時代と逆説とに二、三の偉大なる思想を共通の地盤として与へ、つねに万人の希望の夢、天

下一家四海兄弟の理想を掲げてかれらを一つにつなぐことに主要の力となったといふ事は、——また長い間の培育、こゝろみと失敗を経てこの新世界に、現代の団結と政治とに結果し来った——この人類の進展が悉く一卷の古き詩篇に巻き収められ帰着せしめられるといふ事も。そしてこの詩篇こそ他の如何なるものにもまして幾千年の文化と歴史の中軸となつてをり、——またこれ無しには、このわれわれのアメリカも、その国家形態と諸原理とを含めて、到底今日存在するを得なかつたであらう。……眞の詩人なら、決して聖書バイブルを排斥することはしないだらう。偶像破壊がたとへ現在の形の聖書バイブルの各巻を一方に向つて極度に破壊し去るやうな時が来ても、この書は別の形で生残り、その神聖にして本原的な詩的構造を通して、従来と少しも変わらず、或は今日までより以上にその支配力を及ぼすであらう。ぼくにとっては、この詩的構造こそ、この作品の活きた、明確な、根本原理であつて、そこから他の一切が生れてゐるのだ。さて、連綿たる相承、最も古くして且つ最も新しいアジア的表現と性格、それが今日に至るまで、空にかゞやきいづる虹のやうにつらなりつらなつて、少しも変わらずわれわれの手につたはつてゐる。さうだ、この十九世紀のアメリカにまで、それは詩歌の脈々として尽きざる源泉となつ

てゐるのだ。」

この一切人間の行作の完成としての詩的表現——永久の生の記念をその愛する郷国アメリカのために、また愛する同胞アメリカのデモクラシーのために与へよう、それが天命として詩人として詩人たることを本分とするおのが務めであり、また最大の願ひでもある。——これがホイットマンの一生を導びいた「信」であり、その「信」の結実が実にわが『草の葉』であつたのである。かれは叫んでゐる。——

「實際、来るべき百年間、合衆国の津々浦々、北も南も、ミシシッピの流域も、また大西、太平洋の沿岸にも、是非とも培ひ育てなければならぬ最大の一事は、各個人が、男であれ女であれ、またどこにゐようと、アメリカ全体といふ觀念及び事実と、また国旗、星条旗の意味するところと、熱烈に一つに融け合ふといふことである。ぼくらはこの国家団結の確信を一つの信仰として東西南北、一切の民衆の血液と精神とに吸収せしめ、かれの実生活に、また生えぬきの文学及び芸術として溢れ出でしめなければならん。ぼくらは一切を生み出だす根本思想として、かう信じなければならん、人類一切の過去の継承者たるアメリカはまたその一切未来の運命を托されてゐるのだ、と。」

このアメリカの、——世界的使命を帯びて立ち上ったアメリカの、団結せるデモクラシイの「信仰」を具體的なる「われそのもの」のうちに歌はうとする国民詩人の自覚が、『草の葉』の背後を貫いて脈々として波うってゐることをわれらは忘れてならぬのである。まさしくそれは、ソウロウが評したやうに「アメリカの陣營に高鳴りわたるラツパのひびき」であつて、かのジェファスン起草に成る『アメリカ独立宣言書』の基本觀念は、ここにその絶類の芸術的表現を与へられ、エマスンが宣言したアメリカの思想的独立は、ここに否定すべからざる鮮やかさを以て世界の前に実証されたのである。

もう一項、米ソの「冷い戦争」の現実を前にして、ホイットマンのロシア人に与へた一書簡に触れておかう。かれは一八八一年十二月二日附で在独の一ロシア人に対し、『草の葉』の露語訳の承諾を表明するに添へて次のやうに言つてゐる、——

『きみたちロシア人とほくらアメリカ人！兩國の国土は遠く離れ、一見極めて相似るところが無い——社会上、政治上、全くその状況が違つてゐるし、過去百年間をとつてみても各々その精神上、物質上の發達の方法を異にしてゐる、——だが、或る点においては、しかも最も大規模な特徴において、兩國は実に酷似してゐるのだ。人種的要素と

言語の種類の雑多なること、しかもあらゆる危険を冒しても断乎としてこれを共通の一体に融合統一せずにはやまぬ決意を持つてゐること、——両国とも各々歴史上、神聖使命を負はされてをるといふ永久不変の觀念、全国民を挙つて熱烈な、男らしい友情を以て相結ばれてをること、その比を他国に見ないこと、——国土辺疆の老大無際限なること、——幾多の事物において未だ渾沌未分の状を脱せず、永久的の固定を見てゐないが、しかもあらゆる方面において無限に一層偉大なる将来への準備であると認められてゐること、——両民族とも各々世界に対して独立、且つ指導的地位を維持し、持続し、また必要とあらばこれを戦ひ守るべき決意あること、——各々その偉大なる社会の内奥に不滅の志氣が永遠の理想を目指して、熾烈に不可思議に、底知れぬ深淵のごとく渦巻いてゐること、——これらの諸点はたしかにきみらロシア人とぼくたちアメリカ人とが共通に所有してゐる特徴なのだ。

ぼくの夢寐にも忘れぬ願ひは、詩歌及び詩人が国境を超えて相結び、地上の一切の国をあらゆる条約や外交の及ばぬほどに緊密に結びつけることに在るのだから、——またぼくの本のすべてのものの背後に横はる目的は、さうした朋友相信するのまことを、

先づ個人と個人との間に、終には地上一切の国民と国民との間に、うちたつるに在るのだから、——ぼくの声が偉大なるロシア諸民族の耳に入り、その情緒に接触する機会を得るといふことは何と愉快な事だらう。

その偉大なるロシア諸民族に対し、いまここから、(きみをロシア及びロシア人の代表として呼びかけて、もしよかったら、この手紙を、きみの本の序文として印刷する権利をきみに送りつつ、)ぼくは懐かしき挨拶を遙かなるみ空に送る、この岸边から、アメリカの名において。」

七十年の昔において、かくも適確に世界二分の形勢の基礎的条件を分析し、指摘し得たことは、実にかれの芸術的直観の謬まらぬことを証する。かれみづからの心奥に渦巻く永遠の理想への愛慕の情は、よく他国民の心奥の秘密をも感応通交せしめたのである。このときロシアそのものにも、このホイットマンの声に必ずべき一個のたましひが存した。かれの二歳の弟なるフィヨドル・ドストイェフスキイその人である。両者は共に、世界の諸国民は各々全人類の福祉のために果すべき独自の使命を負ふといふ信仰に生きてゐた。両者は共に、各々その郷国の歴史に深くこの信仰の源泉を汲みとつてゐた。一

はロシアの農民を最高の精神的諸特性のみなもととして信ずる古来の信仰に生き、他はアメリカの民衆こそ新天新地の創造者、人類の自由と進展との究極の擁護者たる天の委託を負へるものとの、無数のアメリカ人の昔ながらの確信の把持者であつた。共に、人類大同の未来世界における平等と友愛の理想をみづからの郷土、みづからの同胞の上において、万国にむかつて証せむことを夢みたのである。両者は共に、宇宙のたましひの、いづくし、みなることを体感し、深信することにおいて、大いなるナザレのイエスの足跡を踏む者であつた。ああ今の世にして、この両者をして各々その郷国によみがへらしめたるならば！と思ふものは、たゞ著者のみの嘆きにはとどまるまい。せめて両者の言葉を、その永久の生の記念を、われらみづからの内奥の希求に、しばしもやまず、ひどきあはしめようではないか！

(四) ステイヴンソンのホイットマン評

イギリスの近代文界にスコットの正統の継承者として推されたロバート・ルイス・ス

ティヴンスンは、その若き日の魂の遍歴の記録として『人物と書物の親しい研究』を残してゐる。その中には、ヴィクトル・ユウゴオ、ロバート・バアンズ、ヘンリ・ソロウ、フランソワ・ヴィヨン、吉田寅二郎、ジョン・ノックス等と並べてワルト・ホイットマンの研究を取めてある。かれ自身、ををしい、潔ぎよい、明るい、童心そのものの持主であつたスティヴンスンは、「年は老いたれどわれは幼なご」と歌つたホイットマンを正しく評価し、多くを学んだ一人である。全篇を紹介する余裕も無いから、わづかにその結論の部分をとつて、読者の参考に資し、且つぼくの言葉の第三者的傍証としよう。

「ホイットマンは熱烈なアメリカ主義者であつたから、南北戦争は彼の魂たましひにとつて非常な苦悩の時期となつた。……そして此の戦争の勝敗の決が彼にとつて重大であつたばかりではなく、彼の精神は此の戦争が示した壮烈な事例のために浄められ高められ、又その酸鼻を極めた光景を目撃して彼はその内心に痛酷の印象を刻んだのであつた。それは一箇の劇場、それは一箇の道場、それは狂ほしいまでに烈しい宗教的リヴァイヴァルの一時期にも比すべきものであつた。彼はリンカンが日々その仕事に通ふのを見守つてゐた、彼は前線へ前線へと移動して行く若き兵士らを研究し、又彼らと親密まじに交はつ

た。就中彼は各病院を遍歴して、或は聖書バイブルを読んでやったり、清潔な衣服、林檎、煙草等を配ってやったりして、何処までも親切に患者達の面倒を見た、実に一箇敬虔なる和顔愛語の実践者であった。

彼は自らみづか口と言ふところを身にも実行する。彼は文学としてまだ充分洗練の余地があると思はれる表現で、屢々みづか自ら讚美したあのキリスト者の博愛、あの寛容、あの他人のために奉仕する愉快な喜びを衷心から感ずるのである。そして恐らくは、彼の凡有あらゆる著作のうち、最高の作品、最も人間味に溢れて読者をして同感に堪へざらしむるものは、『あの汚とどれてよれよれになった小分冊、その一つ一つが一、二枚の紙から出来てゐて、ポケットに入れて持ち歩くに便するため小さく畳んで、ピンで留とめてある、』それに彼が此の戦争中或は負傷兵の枕辺に在って、或は大きな事件の興奮の渦に巻かれつつ、走り書がきして書き留めた覚書の中に有るのではなからうか。

すべての重要な諸項に関する彼の見解を可成り巧みに要約しつつ、しかも彼の精神を或る程度まで表現し得てゐると思はれる箇処が『草の葉』の序文中に二箇処有る。其の

一つは、——

『此れが君のやるべき事だ、他を愛せよ、太陽を、また動物をも。蔑め富を。乞ふ者には遍く与へよ。愚者と狂者との味方になれ。君の収入をも労力をも他人に献げよ、悪虐者を憎め。神について議論するな。民衆に対してはどんな無理をも忍びどんな欠点をも寛容せよ。既知未知を問はず如何なる物にも膝を屈する勿れ、如何なる人にも、また如何なる多数の人間にも。逞ましい無学の人達と隔てなく親しめ、青年とも、また大勢の子を持った母親達とも。此の草の葉を君の一生の一切の年、一切の季節に野外で読め、君が学校や教科書や又どんな本からでも学んだ事をもう一度検討せよ、そして棄てよ。まへ、苟も自身の魂たましひに矛盾するものはどんなものでも！』

更にもう一つの簡処は、——

『最大なる詩人は其の深慮からこれだけの事は知ってゐる。従容己が生命を賭し且つこれを喪つた青年は、実に自己にとって有意義な生涯を送つた者である。此れに反し、瓦全を喜んで富裕安楽に天寿を保つてゐる老人は、恐らく自己にとって全く無意義な生涯を送つた者である、といふこと。それから、人生の達人とは、真に滅びない物を選び取ることを知り、肉体と靈魂とを平等に愛し、遠き物の必ず近き物に随伴し来り、我が

為す善惡の諸業は悉く我を跳とび越えて進み我が行く手に我を待つて対決するの日有ることを悟つてをる人、自己の精神に於いて、何時如何なる危急の場合に遭遇しても、早まった事をせず、また死を避けることもしない人だ、といふこと。』

此れら教語の中にはキリスト者の精神が多分に盛られてゐる、実に愕くほどキリスト者のものが有るのだ。如何なる読者でもホイットマン自身の教ふる処を忘れず、『苟くも自己の魂たましひに矛盾するものを惜しみなく棄てる』人は、最初読むのに、少し我慢しさへすれば、心を引ひきし緊め、心を明るくし、心を淨きよくするものが充分に備つてゐて、其の忍耐を酬むかいてくれるだらう。……『草の葉』の如きは実に健全な書であつて、其の崇高に未だ達せざる部分は、単に滑稽であるに過ぎないのである。』

二 ホイットマンの詩の訳

(一) プロオドウェイ・ページェント

1

西の海越えて、こゝに日本ニッポンより、

礼儀正しく、兩刀たばさむ色浅黒き使節たち、

無蓋馬車に悠々と、無帽のまゝ、怯まず臆せず、

けふ、マンハッタンを乗り打って行く。

自由の子らよ、我が見るものを人も見るや、我は知らず、

日本の地位高き使節達の行列につらなって、

後を固め、上に翔り、めぐりを囲み、また列伍に加はって進み行くもの、

我が見るものを、自由の子らよ、君らに歌って聞かせよう。

百万の人波の、マンハッタンの舗装路に、潮とみなぎり溢るゝとき、

殷々たる大砲の、血高鳴らす轟音に、我が心よびさますとき、

筒口まろき大砲の、胸躍らする煙と香に、使節の万歳叫ぶとき、

火を吐く砲音われを目醒まし、天雲淡く立ちこめて我がまちを覆ふとき、

華やかに、無数の帆柱亭々と、波戸場に森なし旗飾るとき、

船と船の、きらゝかに装ひて、船じるし檣頭高くひるがへすとき、

吹き流し長く垂れ、立並ぶ家々の窓より窓へ花飾り引き渡すとき、

広き大路も行き来の人と立たずむ人とに満ち満ちて、雑踏その極に達するとき、

つらなる家並の正面に鈴成りの人とふ人の目のことごとく幾十万ひと時に一点に集ると

き、

島よりの賓客達の進むとき、きらびやかなる行列の動き進みて見ゆるとき、

招きの声の喚ばふとき、幾千年を待ち待ちし其の応答のひびくとき、

われまた立ちて答へつゝ、舗装路におりたちて、山なす人に混りつつ、もろともに眺め入る。

2

うつくしきかな、マンハッタン！

アメリカのはらからよ、我らのもとに、さらば遂に「東洋」が来たのだ。

我らのもとに、我がまちに、

石と鉄との壮麗の大建築の向き合うて並び立つ、その中を歩むべく、
けふぞ我が地球裏面の人々が来たのだ。

一切の文化の母、

諸々の言葉の水原ミナモト、詩歌の祖先、太古の民ら、

血汐たぎり、思深く、瞑想に沈み、激情に湧き、

香料の香にむせて、ゆるやかなの衣つけて、

日に焼けし面もて、烈しきこころ輝く目もて、

ブラアマの民が来たのだ。

見よ、我が歌を！ 斯くの如きものすべて、又更に多くのものが、我らのもとに閃き来るのだ、

神々しき万華鏡の旋々転々、我らが前をめぐりゆくとき。

げに、使節たちのみならず、遙かなる島よりの色浅黒き日本人のみならず、

肢体しなやかに寡黙なる印度人も現るゝ、アジャ大陸そのものが現るゝ、過去も、死者も。

逸たる驚異と神秘の伝説の暁闇も、

探るべからざる奥秘、一切を孕める悠遠不思議の根源も、

北方も、蒸熱の南方も、東方アッシリヤまたヘブライも、太古文明民族の祖族宗族こと

ごとく、宏壯無比の廃墟の市も、変りて止まぬ今の世も、是ら皆、なほ挙げきれぬ千事万物、此の華やかワカの行列コトに現るゝ。

地理、世界、が現るゝ。

大海原、島の数々、ポリネシヤ、かなたの岸辺、

けふよりは、君らが——自由の子らよ、君らが西の黄金コウガンの岸より直ちに向き合ふかなたの岸辺、

その岸辺なる国々とそこに住む無数の人々、いま不思議にもここに現はる。

市民群集イナトの市立つ広場、御仏ミホトかされる寺院、精舎、仏僧、婆羅門、及び喇嘛、
官員、農夫、商人、工匠、及び漁夫、

唄ふ乙女、舞ふ少女、禪定の人、深宮の君、

孔夫子を始めとし、大詩人、英雄豪傑、武人、四姓、賤民に至るまで、

隊列つくり、四方より、アルタイの山々より、

チベットより、蜿蜒流るる支那大陸の四大河より、

南方の半島より、半大陸の島々より、マレイシヤより、

是らのものと是らに属する一切万物つらなり群がり、いま我が前に現はれ出で、我が目に映る。

我もまた彼らの目に映じ、収められ、親しき心に抱かれて、

遂に我は此の如く彼らをすべて歌ひあぐ、彼らのために、また自由の子らよ！ 君らのために。

我もまた声あげて、此のベイジエントの列に加はる、

歌人われは声高く、ベイジエントを越えて高らかに歌ふ。

我が西の海に浮かべる世界を歌ふ、

かなたなる多くの島々、御空の星と数知れぬその島々を我はも歌ふ。

いまだ曾つて有らざりし大帝国の幻マボロシに見ゆる姿を我はも歌ふ。

覇者アメリカを我はも歌ふ、更に伸びゆく覇権を歌ふ。

海に浮べる島々に、やがて花咲き出づべき百千モモチの町を、心に描きて我はも歌ふ。

我は歌ふ、群島の間をめぐる我が帆船を、また汽船を、

風にひるがへる我が国旗を、

交易ひらけ、太古の眠りやうやく醒め、生れかはり甦る種族らを、

生活と作業と再び興り——その目的は知る由無きも——必然に一新せられ、今日より始めて世界の囲む、古きアジヤを。

3

そして君ら、世界の自由民！

君らは真中に、均衡をよく保ち、劫末までも斯くてあらなむ、

けふ、一方よりアジヤの貴賓、君らに來り、

あす、他方よりイギリス女王、その世嗣を君らに送り越す如く。

記号シムンは今や逆転し、円は今や完く描かる、

円環遍くめぐり伝はり、巡歴了りぬ、

箱の蓋は微かに開かれしのみなるに、芳香馥郁、早くも箱より漲りそゞぐ。

年若き自由の子らよ！ 齢高きアジャに、一切の母に、

思遣り深くあれ、今も、また常に。血気にはやる自由の子らよ、君らは一切だ。

垂れよ傲岸の君らの頭を、いま島々を越え君らのもとに音信オトシ送れる永く離れし母のみ前に、

年若き自由の子らよ、今日のみは、垂れよ低く、傲岸の君らの頭を。

子らは西に斯くも永く、斯くも広く、さまよひ来にしか、さすらひ来にしか？

逸たる悠久の時の流れは斯くも永く西の方へと突き進み進み来にしか？ エデンの園より。

百千年の時の歩みはたゆみなく西へ西へと、君らを求め、解明を求めて遷り来にしか？ さりとは知られず。

その流れ、その歩み、徒ムならざりき、ことごとく今完成す。今こそ逆に君らに向ひ西よ

り東へ、
その流れ、その歩み、いま又東へ進み来らむ、逆らふことなく、自由の子らよ、君らの
為に。

(昭和十六年訳・昭和二十四年『興風』一月号所載)

(二) 大統領リンカン追悼歌

(1) ライラック今を名残りと戸口の庭に咲きし時

1

ライラック今を名残りと戸口の庭に咲きし時、
大いなる星西の夜空にまだ宵ながら傾きし時、

我は嘆きぬ、また更に嘆くべし永久に、春甦り来る毎に。

永久とこしへに甦り来る春よ、常に汝はわれにもたらさむ此の三位一体——
時じくも花匂ふライラック、西空に傾く星、

わが恋ふる人の追憶おもひで。

2

おゝ光まばゆく落ちし西の星よ！

おゝ夜の闇よ——おゝ憂はしき、悲しき夜よ！

おゝ消え失せし大いなる星——おゝその星を隠す黒雲！

おゝ我を抑へ働かしめぬ酷むごき雙手もろてよ——おゝ術すべも術すべなきわが靈たまよ！

おゝわが靈たまを捉へ放たぬ無情の雲霧。

3

白塗の柵近き古き農家、その戸なる前庭に

直々と立つ一叢のライラック、ハート形なす葉も濃緑に、

先の尖れる花許多嬾々と伸び、わが好む香よりも強く、

葉とふ葉の一つごと見れども飽かぬ——此の庭の一叢ゆ、

ほのかなる紫の花つけて、ハート形なす濃緑の葉も添へて、

われは折りぬ花咲く一枝。

4

人も来ぬ山奥の水沢に、

つゝましく隠るゝ鳥の音も妙に歌をぞ歌ふ。

たゞ一羽つぐみ鳥、

世を避けて独り籠らふ世捨鳥、

友も無く歌をぞ歌ふ。

喉を裂き血を吐く其の歌、
死を吐き払ふ生命の其の歌。(うべ我は知る、愛しき兄弟、若し汝に歌無くば生命絶えむと。)

5

春 闌の国越えて、町縫うて、
或は小径、古き林、灰色の壤え土ゆ此処かしこ昨日まで菫咲きにし中抜けて、
小径を挟む野また野の草、草また草の原分けて、
黄金の麦の穂、その一粒も悉く黒き畑土、その土の中なる穀ゆ生ひ出でし中過ぎて、
白く赤く園に咲く林檎の花の中過ぎて、
最後の奥つ城に埋むべく亡き骸収め、
夜も昼も旅行くよ棺一つ。

6

野道を通り街を過ぎ、

日と言はず夜と言はず、国蔽ふ大いなる黒雲に包まれて、

立て列ね巻き収めたる旗の波、黒き喪の装ひしたる町々に送られて、

国挙りこぞ哀しみのヴェエルつけたる女をみななし立ち列ぶ州々の中過ぎて、

うね／＼と曲りて長き人の列、夜空を焦す松明たいまつに送られて、

数知れぬ提灯に照らされて、物言はぬ顔の海、帽脱ぎし頭の山に囲まれて、

待つ驛に柩車きゆうしゃ着けば出迎ふ人の悲痛の顔々、

夜を徹し響く挽歌、千万ちよろつの声集まりて蔽かに強く轟き、

その歌の悲しみの声悉く此の棺をめぐりて注ぐ、

かすかなる灯明の照らす寺々、窓ふるはせて響くオルガン、——これらのものに取り

巻かれ君来る、

葬りはらむの鐘の音断えず高鳴りて、

いざ此処に、徐行し過ぎゆく靈柩よ、

君に捧げむ、この一枝ひとえだのライラック。

(君のみならず、一人のみのためならず、

すべての柩ひつぎに捧げむと我はもたらず、花咲ける緑の枝を。

朝のごと爽かに、斯く我は汝ながために歌歌はむ、

おゝ肅しめやかに聖なる死！

あまねく薔薇の花束を、

おゝ死よ、我は汝なに蔽はむ、薔薇と早咲きの百合の花とを、

されど今は就中先づ咲き初むるライラック、

惜まず多く我は折る、叢立むらつ木々ゆ多きはに折る、

腕一杯にかゝへ来て我は注そそぐ汝ながために、おゝ死よ、汝なれと汝なの柩ひつぎとに洩れも無く。)

おゝ久堅の空めぐる西の星よ、

今われ知りぬ、一と月の前われ歩みつゝ仰ぎ見し汝が心、

透きとほる夜の闇を、物言はず歩みつゝ、

汝を仰ぎ見て、夜毎々々何事か我に語らむと身を傾けて寄りしと思ひし、

さながら我に寄るごとくみ空ゆ低く汝は傾きて、(すべてのほかの星々の眺むる中を、)

我ら共に携はり厳しき夜を徘徊ひし、(何事か知らねども眠れぬ夜半を、)

夜も更けて、西空の涯見さくれば汝が光悲しみに充ちたりし、

透きとほる冷たき闇ぬち唯一人丘の上に風受けてわが登り立ち、

立ちながら目じろがず汝の傾きて夜の闇のあなたにと隠らふを眺めあし、

わが霊は満たされず悩みに沈み、悲しくも汝が星の天の道めぐり果て、

闇ぬちに落ち、消え失せし、其の心。

9

歌ひつゞけよ、かの水沢に、

おゝつゝましく優しき歌ひ手、われは聞く汝が調、われは聞く汝が高き呼び声、

われは聞く、今すぐに我行かむ、汝が心われは知る。
されど待て暫し、我をとどむる明き星有り、
わが別れ行く夜なる星は我を捉へ、我を放たず。

10

おゝ如何に我は歌ふべき、彼処なる我がいとしまし亡き人のため？
今は亡きあの大きいなる優しき靈に、献ぐる我が歌いかに飾らむ？
わが恋ふる人のみ墓に、如何ならむ香をか焚かむ？

東より西より吹き来る海の風々、

東の海ゆ吹き来る風、西の海ゆ吹き来る風、遂に茫々たる大陸の原にて出で会ふ、

此の風と、我が歌ふ歌の息吹きと、

諸向けて香とし焚かむ、わが恋ふる人のみ墓に。

おゝ其の部屋の四つの壁に何をか掛けむ？

その壁に掛くる絵には何をか描かむ、

わが思ふ人の葬りの家を飾るべく？

闌たけなはの春と、畑地と、家屋とを描ける額、

入日刺す四月の夕べ、仄ほのかなる光含みて立ち登る薄墨の煙けむ、

燦爛と天あめつち照らし徐々しじゅうと沈みゆく陽ひの、み空を遠く焼きたゞらかす黄金こがねの輝き、

足に踏むはかくはしき若草、木立豊かに浅緑さみどりの葉も茂り、

遙かに光り流るゝ河の、水面みづには此処かしこ風に立つ波、

岸边なちに並ぶ山々はみ空かぎりて幾重にも畳み重なり、濃く又淡く、

近くには大いなる町、屋や並なみも滋しく、そばだつ煙突えんとつ林のごとく、

世の営みの様々さまざま尽し、百千の工場こうばゆ我家もうちに帰る工匠たくみらの数も写して。

見よ、肉体と靈魂と——此の国土、

尖塔許多そより立つ我が故里のマンハッタン、輝やき急ぐ湖と船と、

変り多く広き国土、南も北も光を浴びて、オハイオの岸、きらめくミズウリ、
またいや遠く広がる野原、草に覆はれ黍に埋もれて。

見よ、類なき陽静かにも高々と照らせるを、

そと触るゝ風動く紫の朝ぼらけ紅染めて、

射しそむる無量の慈光、

天地ひたしていそゞく光、隠るゝ物なくい照らす真昼、

心地よく暮れゆく夕べ、有りがたき夜と星々、

わが町々の空にかどやき、人をも国をも包みて余さず。

歌ひつげ、歌ひつげ、灰鳶色の鳥よ汝れ、

水沢ゆ、世離れし奥がゆ歌へ、草深き藪の茂みゆ汝が歌注げ、

小暗き木陰、松林の蔭ゆ果ても無く。

歌ひつげ愛しき兄弟、音も妙に歌へ鋭く、細き汝が歌、

人の心さながらに歌ふ其の歌、哀しみの極みの調。

おゝ碍るものなく、流るゝごとく、思ひを籠めて！

おゝ怪しくも、調やぶりて我が靈に呼びかくる——おゝ奇しき歌ひ手！

汝が歌をのみ我は聞く——されどなほ星有りて我を引く、（やがてそも消え失せむ、）

されどなほライラック、強きその香に我を捉へ、我を放たず。

14

さて真昼中われ坐して眺めぬし時、

やがて陽も傾きし春の野辺、田人ら麦刈りいそしみて、

わが国つちの心なく拵こり連なり、湖と森と許多抱きて、

現し世のものとも見えす美しき姿のうちに、(嵐吼え雨しとど狂ひし後に、)

足早く暮れゆく午後の空高く、子らと女らの声々響き、

東に西に流るゝ海潮、渡る船々の影も見えて、

豊かなる夏近く、田畑にいそしむ人影繁く、

数限りなき人の家々、おのも／＼の日々の営み、炊ぎに其のほか細々の業に暇なく、

通りには人また車波織り成して間なく往きかひ、町々は囲まれて——すはや、その時

忽ちに、

それらすべてに落ちかゝり、それらすべてに混こりて、われをも他をも共に包みて、

湧きぬ雲、湧き出でぬ長き黒雲、棚引き覆ひて、

斯くてわれ知りぬ、死と、死の想ひと、死の聖なる知識とを。

その時、死の知識をわが側に歩ましめ、

死の想ひを他の側にひしと寄らしめ、

我は真中に友連れのごと、友らと手と手取りかはすごと、携はり、

のがれ出でぬ黙せる夜に、隠し受け入るゝ夜の闇に、

闇ぬちを水際に下りぬ、水沢に沿ふ小径辿りて

敵そかに黒々と立つ杉の木群、亡き人の影かと静まる松の木立に。

その時ぞ人には隠れて会はぬかの歌ひ手の我を迎へぬ、

わが知れる灰鶯色のかの鳥ぞ我ら三人の友を迎へぬ、

しかして歌ひぬ死の歌を、またわが恋ふるかの人に献ぐる歌を。

世離れし深き奥がゆ、

香はしき杉の木群ゆ、亡き人の影のごと静もれる松の木立ゆ、

かの鳥の歌は響きぬ。

あゝ其の歌の妙なる調われをしてわれを忘れしめぬ、

闇ぬちに手を取れるごとわが友とわれ携はりたゞずみし時、

しかして我が心の響鳴りいでぬ、かの鳥の歌と調合はせて。

来よ愛らかに懐かしき死よ、

高まり静まり世界をめぐりて、飽くまでも冷やかに来寄りおとなひ、
昼も、夜も、人みなに、洩れもなく、
夙き遅き違ひはあれど微妙なる死よ。

讚ふべきかな不可測の此の宇宙、

生命溢れ歓喜満つる、不思議なるもの尽くるなく知識際無し、

また愛、甘き愛有り——されど讚めよ！ 讚めよ！ 讚めよ！

冷やかに掻きいだく死の、あやまたず纏ふ腕有り。

時知らず音も無く歩み寄る暗黒の母、

汝がために心より悦びの迎へ歌曾つて歌ひし人無きか？

さらば我こそ其をば歌はむ汝がために、我こそは汝をば讚へむ有りと有る物にいや増し

我こそは汝に歌を献げむ、まこと汝の来るべき運命の時は躊躇はず夙く来よと。

寄り来よ強き救ひ主、

已むなき運命来つる時、汝が手彼らを取りし時、我は悦びて亡き人歌はむ、

おゝ死と、平等の大愛にゆらぎてやまぬ汝が海に行方知れず流れ入り、

汝が上も無き幸ひの満つる潮に浴する人を。

我は汝に寄せむ悦びの小夜曲、

ダンス躍らむ汝がために、汝を祝ひ、家をも飾り催さむ酒ほがひ汝がために、

また広き山河のたゝずまひ、見はるかす大空も汝に適はし、

また生きとし生ける物、野や畑に生ふる草木、深沈と更くる夜の涯知らぬ闇も適はし。

数知らぬ星屑のきらめける音無き夜半、

海のとおり、囁く波の我が聞き知れる声もかすれて、

霊は汝に、おゝ涯知らぬ闇黒の死よ、汝に向きて、
体は嬉しく汝にひしと寄りすがる。

森の木の梢を越えて我は汝に歌をし送る、

百重千重高まり沈む波を越え、五百重万重畳みなす田畑越え、また曠漠の野を越えて、
熱鬧のすべての町々、絡繹の往還と人に埋もる埠頭を越えて、

我は送る此の歌を勇み悦び、悦び勇みて汝にこそ送れ、おゝ死と汝にこそ。

15

わが霊の響に合せ、

高く強く歌ひつゞけぬ灰鶯色のかの鳥は、

すゞしく緩き歌声揚げて夜の闇に溢るゝばかり。

影暗き松杉の中に声高く、

冷々と湿れる空氣、水沢の香りの中に其の音すゞしく、
しかして我はわが友と携はり其の夜の闇にたゞずみて。

わが眼中に籠められし眼力は閉されず、
パノラマのごと幻の長くつゞきて。

しかして見ぬ側目して数知れぬ兵の群、

我は見ぬ、音も無き夢のごと、幾百の軍旗、

度重ね硝煙の中くより、彈雨に裂かるゝ其のさまを、

煙ぬち彼方此方捧げ持ち運ばれて、引裂かれ血に染みて、

遂には桿に千切れて残る布も少く、(しかもすべて音無きまぼろし、)

其の桿も悉く千々にひしがれ打ち砕かれて。

我は見ぬ、戦ひに斃れし骸、幾万と数知れず、

若人の白き骸骨、我はそを見ぬ、

我は見ぬ、たゝかひのにはにたふれしつはものゝかばねの山々、其の数つくして、

しかも吾は見つ、此の戦ひに斃れし人ら我らが思ふごとくには非ざるを、

彼らは眠れりいと安らかに、彼らは露も悩むこと無し、

生ける者こそ残りては悩め、悩みしは母、

悩みしは妻、子、また心悲しめるつはものゝ友、

残りたる軍隊こそ悩みたりしか。

16

まほろし
幻の数々を過ぎ、夜を過ぎて、

わが道連れの友の手放ち、そを過ぎて、

隠れ棲む鳥の歌過ぎ、わが靈の調合する歌をも過ぎて、

勝ち誇る歌、死を吐き払ふ生命の其の歌、しかも其の声変りてやまず、

低く嘆かひ、しかもさやかに、高まり沈みて夜の闇に溢るゝ歌声

哀しげに沈みてかそけく、禍事の有るよと知らせ、しかもまた悦びに躍りて高く、
地を覆ひ、大空の限り満して、

闇ぬち奥がゆ我が聞きし其の強き歌声、

それをも過ぎて、いざさらばライラック、ハート形なす葉の有る花よ、

我は汝を其処に、戸口の庭に、花咲けるまゝ残して行かむ、春ごとに返り咲くべく。

我は汝に献ぐる歌をこゝにとどめむ、

西に照る汝が姿見納めむ、西に向き、汝と心かよはせて、

おゝ闇に 銀の面もてかゞやく友よ。

されど吾は保ちなむ、其の夜ゆ得来し物のことごとく、

灰鳶色の鳥の歌、世にも妙なる其の鳥の歌、

其の歌に調合せてわが霊に弔なし成り出でし歌、

哀しみの極みの色をたゞへつゝ沈みゆきにし明き星、

わが手取り、鳥の呼び声に寄りゆきし友、

我を真中に添ひしわが友、それらの記憶永久とほに保たむ、心ゆもわが慕ひにし亡き人のため、

わが生きの目を尽し、国尽し、またと無き優しきみ霊、賢こきみ霊——懐かしきその

人のため此こをば保たむ、

ライラックと星と鳥と、わが霊たまの歌に織りまぜて、

かの香はしき松の木立こだち、幽暗の杉の木群こむららに。

(2) おゝ船長！ わが船長！

おゝ船長！ わが船長！ 恐ろしい僕らの旅は終った、

船は凡有あらゆる嵐に耐へた、僕らの求めた望は遂げた、

港は近い、ベルも聞こえる、人々は皆欲呼してゐる、

ゆるがぬ大船、敵いふしくも雄々しき船の進むを眺めて、——

だがおゝ心！ 心よ！ 心！

おゝくれなるに流るゝ血汐、

わが船長はデッキの上に

倒れてる死んで冷たくなって。

おゝ船長！ わが船長！ 起き上って、ベルを聞き給へ。

起き給へ——君のために旗もゆらぎ——君のために喇叭も響く、

君のために花束も、又リボンを付けた環飾りも——君のために岸壁がんべきも黒山の人なのだ、君のために彼らは叫ぶ、ゆらく人波、争って顔々を向けながら。

さあ船長！ お父さん！

お頭つむを腕に支へませう！

何かの夢だ、デッキの上に

君が倒れて死んでゐるのは。

わが船長は答へない、その唇は蒼ざめて動かない、

父上は僕の腕を感じない、脈搏も意志もはや無い、

船は着いた無事安泰に、航海は今や全く果てた、

恐ろしい旅から勝利の船は思ふ所を貫き果てゝ入はいつて来たのだ、

おゝ岸壁よ歓呼を揚げよ、おゝベルよ鳴りひびけ！

だが僕は悄々と歩むのだ、

死んで冷たくわが船長の

倒れてるデッキの上を。

(3) 此の土は嘗てあの人であった（この項、夜久正雄訳）

此の土は嘗てあの人であった。

——清く、直く、正しく、決然たる、

かれの注意深い手によって

史上如何なる時代、如何なる国土にも嘗てなき、最も愚劣な罪惡から
わが州々の結合が守りぬかれたのである。

(三) 秋の小川

さらば、わが詩魂！

さらば、わが詩魂！

わが二無き友よ、わが恋人よ、御機嫌よう！

僕はもう行くのだ、何処へと知らんが、

どんな身の上となるか、二度と再び君と会へるか、それも知らずに、

だからわが詩魂よ、さらば！

これが名残りだ——しばしの回顧を許してよ、

わが胸の時計の刻みや遅く、いやかすかに、

退場、日没、そして間も無く心臓の鼓動も止むのだ。

僕らは永く暮らして来た、共に楽しみ、共に愛して、

嬉しかった！——今や別離——わが詩魂よ、さらば！

だがまあ、さう急がんでもいゝだらう、

なるほど僕らは永く暮らした、共に眠り、共に岩間を泌み通り、真実一つに融け合う
た、

だから死ぬなら一緒に死なう、(さうだ、いつまでも一つでゐよう、)

何処かへ行くなら一緒に行かう、どんな身の上にならうとも、

ひよっとしたら、もっと豊かに浮き／＼暮らし、物も学ぼう、

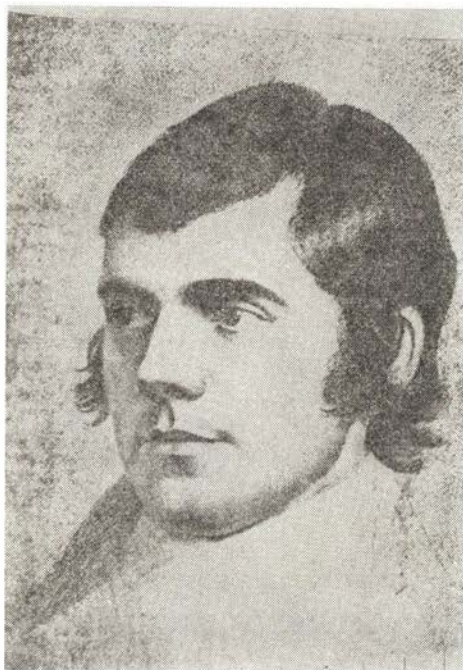
ひよっとしたら、今ほんたうに真ことの歌に会はして呉れるのが君自身なのかも知れ
んのだ、(誰が知らう?)

ひよっとしたら、此の小さい肉魂をほんたうに解きほぐし、土に返すのも君なのかも
知れんのだ

——だからさあ此れを最後に、

さらば、いざ——千代かけて！ わが詩魂！

第三章
アメリカ詩の
一源流



画家スカーヴィングの描いたロバート・バー
ンズ (1759—1796)

アメリカ詩の—源流——スコットランドの国民詩人ロバート・バーンズ

バーンズがスコットランドの国民詩人たる地位は明らかであり揺がぬものである。それは、全世界に亘って、苟くもスコットランド人の集団的に居住する所には必ずバーンズ・クラブの組織せられある事実を以ても明白であらう、イギリス人を「キング・シェイクスピヤの臣下」と称し得るとすれば、スコットランド人は等しくバーンズをその民族魂の全的表現としてその痛ましき苦闘の生涯と詩的表現に憧憬熱愛の至情を捧げて止まないのである。

しかもバーンズは、スコットランドの郷土詩人たるにとどまらず、その詩作の範はワーズワースを喚び起して英詩壇ローマン主義運動の—源泉ともなり、遠く大西洋の波濤を越えてロングフェロー、ホイッテイヤ、ホイットマンの代表的アメリカ詩人群の「靈魂の系図」の祖先として永久の足跡を新大陸に印しアメリカ文明の世界的横流のうちにその生の記念を人類的遺産として生成発展せしめて止まないものである。

「歌はれて残る歌」こそ人類生活至上の遺産であり、その精神的創造綜合最勝の文化財であるとするホイットマンの説に同意するとすれば、バーンズこそ正に、また特に、「歌はれて残る歌」を残した詩人の世界的典型であったと言はなければならぬ。

ブレークについては山宮允氏の精彩有る研究労作を我らは有するのであるが、バーンズについては之に比せらるべき日本人としての体験に密着した著作の公にせられてゐることを聞かぬ。日本英学界の一恨事とせねばならぬ。敢て拙訳をこゝろみて後賢の奮起を促さむとする所以である。

ロバート ブルース バノックバーンへ進軍す

ワラスと共に 血を流し

ブルースのもと 歴戦の

つわものよ スコッツよ、

いざ 血汐しむ 死の床に！

さらずば 勝たむ！

今こそ その日、今ぞ 時。

見よ、先陣は 惨として、

しや、物々し エドワドの

大軍いまや 進みくる！

鉄鎖と 奴隸と！

敵に背見する 卑怯者、

裏切者は どこにをる？

敵の奴隸に 甘んずる

腰抜け共は どこにをる？

さあ 逃げよ！

大君のため、国のため

自由のつるぎ 握りしめ、
生くるも死ぬも 独立の

自由の民を 願ふ人よ！

進め われと！

唐げの 悩み苦しみ！

捕はれの 子らの身思へ！

二つなき 我らがいのち

なげうつも よし！

子らは 自由に！

奢る平家を 打ち倒せ！

倒るゝ敵は 皆共に

傲る平家ぞ！ 斬る太刀は

独立守る 自由劍！

成すか 死か！

スコットランドは所謂ジャコバイト党の本拠であり、元来スコットランド王系であったスチュアート王朝に終始一貫の忠誠を献げた彼等の血涙史は、「歌書よりも軍書に悲し」き我が吉野朝の哀史にも比せらるべきものがある。バーンズにも此うした国民的感情を唱うた数篇の悲歌が有る。そのうちの一篇を左に――

正しき君のおん為に

正しき君の おん為に

うるはし祖国 あとにして

正しき君の 故にこそ

異国の山も 我は見し、

異国の山も 見しわれぞ、我妹。

人事の限り 為しはてゝ

遂に遂げ得ぬ わが願。

さらば！ わが君、わが祖国！

海の波こえ 我はゆく、

海の波こえ ゆく我ぞ、我妹。

異国の岸に 我君は

馬のかしらを 立て直し

手綱かいくり、とこしへに

さらば別れと、宣り給ふ。

さらば別れぞ、とこしへに！ 我妹。

いくさより つはもの帰り

海よりは 船乗かへる。

されどわは 恋ほしき君ゆ

手離れて またと相見じ

手離れて またと見ぬ我ぞ、我妹。

日は暮れて 夜さりきたり、

人皆は 眠りにつけど

はるかにも 君をしぬびて

よもすがら 泣きてぞあかす、

よもすがら 泣きあかす我ぞ、我妹。

心の限りを尽してなほその志を遂げ得ぬ悲痛は、必然に弱き者への同情、虐げられし者への共感としてその鬱屈せる熱烈の情を吐露せずにはをられぬ。こゝに早くも黒人奴隷の哀情を歌うてバーンズはリンカンに先驅するのである。

奴隸の嘆き

なつかしきセネガルの

故郷の地に我を仇は捕へ、

送りこしぬ このヴァージニヤ、

ジニヤ、おゝ！

うるはしき故国より 引きさかれて、

また見むすべなし。

あゝ！わがこゝろ重し、おもし、おゝ！

うるはしき故国より 引きさかれて、

また見むすべなし。

あゝ！わがこゝろおもし、重し、おゝ！

あのよき国は 恐ろしき雪も霜も知らず。

似ざりけり、このヴァージニヤ、

ジニヤ、おゝ！

あしこには常に川水流れ、

あしこには常に花咲きおふる。

あゝ！ わが心おもし、重し、おゝ！

あしこには常に川水流れ、

あしこには常に花咲き匂ふ。

あゝ！ わがこゝろ重し、おもし、おゝ！

むごき鞭怖るゝ限り、

重き荷も捨てゝは置けず。

こゝはいづく？ ヴァージニヤ、

ジニヤ、おゝ！

慕はしく恋しき友を

偲びてぞ我はよゝと泣く。

あゝ！わがこゝろ重し、おもし、おゝ！

慕はしく恋しき友を

偲びてぞわれはよゝと泣く。

あゝ！わが心おもし、重し、おゝ！

その心情はおのづから溢れて、アメリカ独立の雄「ワシントン將軍の生誕日を祝ふ歌」のうちにも、カレドニヤの山河に曾ては溢れし「自由の魂」の衰へを嘆いて、満眼の涙を押へ得ぬのである。しかもなほ彼は叫ぶ――

何が何でも人は人

真面目にかせいで 貧乏だとして

うつむく奴は 臆病者よ、

どうせ浮ばぬ――捨てゝ置け。

おいらは恥じぬ、貧乏だとして！

何が何でも、何が何でも！

おいらの苦勞を 人は知らねど、

くらは金は金貨の 押し印で、

人こそ金よ、何が何でも。

雜穀食らうて 水のんで

木綿^{もめん}布子を 着ようとまよよ、

馬鹿に絹着せ、悪党にや酒を！

何が何でも人は人！

何が何でも 何が何でも！

馬鹿者共の 虚^{こげ}仮嚇し！

真面目の人は 貧乏だとして

人のかしらぢや、何が何でも！

殿様といふ あいつを御覧！

そっくりかへって 目玉をむいて

とりまき連中、ちやほやすれど、

あいつやっばり うつけ者！

何が何でも、何が何でも、

リボンに勲章 胸につっても！

独立自尊の おいらの目には、

びた一文の価値も無い！

国王様のお声一つで

男爵、伯爵、公爵、勝手。

真面目な者は 独立自尊で、

そんなものには 目もくれぬ。

何が何でも、何が何でも、

いかに偉さうに 威張つてみても、

真の智慧者に、恥知る人に、

まさる位は 又と無い！

では神かけて 祈らうぢやないか、

何が何でも さうなるやうに！

智慧と徳とが この世に栄え、

何が何でも 勝抜くやうに！

何が何でも、何が何でも、

何が何でも 未来は斯うよ、

人と人とが あまねく世界に

みなはらからと 睦びて生きむ！

如何にバーンズの歌がスコットランドのみならず、すべての国の人々に親しまれ、そ

の胸奥の熱血を湧き立たせるものであるか、についての一叙述をユウイング夫人の小篇『わたくしたちと世の中』の感激深き場面から取って見よう。それは荒くれた船乗らの卑しむ「学問」に憬おぼがれ、乏しきに堪へ重きを荷ふことを辞せぬ碧眼のスコットランド少年アリスタに対し、船長が同じスコットランド人を特に目をかけて愛するからとひがんだ水夫頭が意地悪く、多勢の人前で恥をかゝせて慰さまうと考へて、この口数の少い羞はづかしがりの少年に歌を歌って「みんなの興を添へろ」といふのである。その場面——

「私はアリスタが可哀さうでした。デニスもきつと気の毒に思ったに違ひありません。しきりに彼をはげまさうとしてみましたもの。『ね、ゴッド・セイヴ・ザ・クウインをやれよ。僕がバイオリンでうまく調子を合してやるから』とデニスは勧めたが、アリスタはかぶりをふりました。デニスは又、口を添へて言ひました。『スコットランドの曲も一つや二つは知ってるよ』と。そして、指で一、二曲ピン／＼と掻きならし始めました。

やがてアリスタは彼を押しとどめて、『あそこはリイルの国だらう？』

『やう』とデニスが言ふ。

『もう一寸速く弾けよ。僕がスコッツ、フア・ヘエをやってみるから』

デニス は直ぐに調子を速めたので、アリスは一步進み出ました。少年は、うじ／＼したり羞かしいからと口に出して言ったりはしませんでした。甲板の上にあぐらをかいて坐つてゐる私の眼が丁度彼の膝と水平の位置にあつたので、その膝がブル／＼震へてゐるのが能く見えました。可哀さうに、アリスが咽喉から歌の一声を出すまでには、デニスが二、三度歌ひ出しを繰返して弾かなければなりませんでした。けれども一旦スコッツと立派に歌ひ始めた後は、もうたじろぎませんでした。水夫頭は、またもその意地悪のやまが外れたのです。アリスはとてもデニスのやうには歌へませんでした。けれども、その声は強い男らしい声で、その響には人の血を躍らせずにはゐない力が有りました。両手をひしと握りしめ、ラ行の音をぶこつなまでにはっきりと響かせて

ワラスと共に 血を流し、

ブルースのもと 歴戦の

つわものよ、スコッツよ。

いざ血汐しむ。死の床に！

さらずば、勝たむ！

と歌うた時に、喝采が起りましたが、依然として彼の脚は震へがとまりませんでした。彼はたゞ海面をじっと見据ゑたまふで、顔は益々蒼白となってゆくばかりでした。彼が

裏切者には 誰がなる？

臆病者と 死ぬは誰？

奴隸となつて 甘んずる

腰拔どもは 何処にをる？

さあ背を見せて、逃げ走れ！

と歌つて、満腔の血を私の心臓に漲りあふれさせた時には。

『ちえすと！』とデニスはせきこんで叫びました。『おい、今一度そこんところを歌へよ。』

僕らも一緒に歌ふから!』と。そこで私達は一同声を揃へて歌ひました。けれども、丁度アリスタとデニスが機関銃の連発するが如く最後の一句のラ行音を響かせてゐた時に、アリスタは正に背を向けて、急に口をつぐんでしまったのでした。船長さんが、知らぬ間に其の場に来てをられたのです。

『さあ、もっとやれ!』と船長さんは、手を振つて私達をもう一度元の席に帰らせました。

この時までには、アリスタの独唱が私達の合唱に変わつてゐました。この歌がサクソン人を敵としてスコット人を振ひ立たすためのものだといふことは、大部分綺麗さっぱり忘れ果て、その一層深い祖国愛の熱情がひたすらに私達一同の心をとらへてゐたのでした。イギリス人も、スコットランド人も、エリンの子らも、皆諸共に声を合せて、のども裂けよと歌ひました。サンボアのバイオリンも之に合せて。そして私は信じます、この歌の心を私達は誰も皆、心ゆくばかりに味ひましたと。けれどたゞ、私は疑ひます。

スコットランドの 君のため、

国のためにと 力こめ

振ふは降魔の 自由劔！

生くるも死ぬも 独立の

民たらむ者、いざつゞけ！

といふ文句を正確に知ってるて、之を正確に歌った者は、アリストと船長さんの外に一人でもあったかといふことを。」

(昭和二十二年『興風』十月号所載)

第四章

航海文学と西部文学

航海文学と西部文学

アングロサクソン民族は先づ第一に海洋民族である。海洋民族の特性は、日本民族の伝統で云へばスサノヲノ命の御性格が、その代表的表現である。アングロサクソン民族は元来ゲルマン民族であり農民であったが、後ゲルマン民族と分れてその農民たる根本性格の基礎の上に更に独自の風格を築き上げたのである。即ち、彼等は、北海の荒浪の上の生活——いはゆるヴィキングの生活——からして彼等の特性を鍛へあげた。此の民族的な根本的性格は不変である。

北海の荒浪を乗り切つてイギリスに渡つた彼等は、英本国に定着した後、更に大西洋を横断してアメリカ大陸に発展して行つた。此はイギリスのルネッサンスと云はれてゐるエリザベス時代であつて、国民的緊張の時代であり、外にはスペインと角逐してその海上のヘゲモニーを握るに至つた時代である。そしてまた、チャールズ・キングスレイの有名な小説『ウエストウワード・ハウ』に表現されてゐるウエストウワード・ムーヴ

メントの時代でもあった。かうして、西へ、西へ、といふ掛け声に従ってアメリカ大陸に取りついた彼等は、東部の沿岸から進発して、東部から中部へ、中部から更に西部へと開拓発展して行ったのである。未だかつて斧も入らざる洪漠たる原始林を開拓し、熱砂を踏み、氷河を越え、土人の襲撃をうけながら、西へ、西へ、と進展したのである。所謂フロンテア・スピリット西部開拓精神が、今もなほ重んぜられなつかしがられてゐるのも、この「西への運動」のうちに斃れていった幾多無名の民族的英雄の血と汗と、恋愛と労働との不滅の記憶に彩られた彼らの民族的性格から理解できる。

暴風の海上生活に於ては、何時いかなる変化が起るか予想しえない、「あるゝか」と見ればなぎゆく海原の波」の上の生活であつて、不可測の天然に常に対して居るから、——殊に航海術の幼稚な時代であつたから——これと全力をあげて戦ふことにより、不撓不屈の意志と、現実的精神と、運命に対する随順の信とを鍛錬されたのである。イギリス文学の中には航海文学ナビゲーターズ・リタラチャともいふべきものがあつて、大航海者・大探検家の苦闘の浩瀚な記録が残つてゐるのも、この民族性の証左である。ハクルートやパーチャスの記録した幾多の世界航海記を読み、また「現代ならびに前時代の

誇りうる第一人者、一七七四年二月十四日、太平洋ハワイの土人のために殺さる、時に享年五十一歳」といふ墓碑銘にその悲劇的生涯を暗示するクック大佐の『発見の航海』、キヤプテン・スコットの南極大陸探検の記録等をよめば、この間の消息にふれうるであらう。彼等大航海者として盛名を歴史にとどめた人々が、安住にたへがたい衝迫にうながされて、未開の天地に突入し、慘怛たる生涯を終へてゆくあとを辿ると、彼等の民族の本能的性格の一端にふれるやうに感じられる。祖先の民族移動を神話と童話の世界に夢見つゝ、大和島根に安住して年久しく、引込みじあんな、老人じみてしまったわれ／＼の性格に対して、彼等のなまなましい民族としての開拓的本能的の強さと若さとに心うたれるのである。

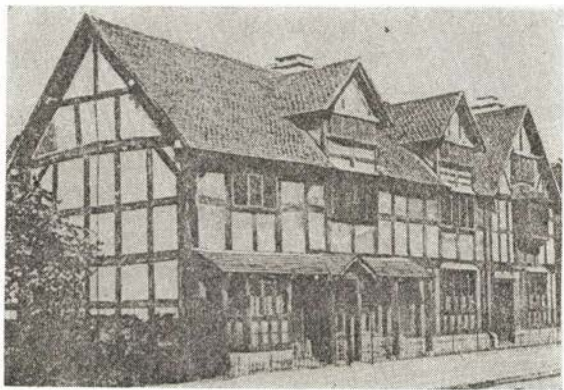
また、自然科学の発達もこの海上生活と原始的大陸開拓の生活とから大きな刺戟を受けて生れたのである。海上生活は自然に支配されるから自然をあるがまゝに、精微に見極めて判断しなければ自分が危い、目標のない大海に乗り出すには星を研究しなければならぬ、自然科学の生きた知識がそこに必要となる。かうして自然科学の発達が促された。

アメリカの西部文学もまたこの西へ、西へといふ民族本能から発したものの一つで、荒々しい自然を舞台にする原始的の生活に対する彼らの本能的なあこがれがそこに見られる。ブレット・ハートの『ボーカー平からの追放者』とか、チャルス・M・ラッセルの『犬喰ひ男』ドッグ・イーターなどを読んでみるとその一斑が知られる。この西部文学と前述の航海文学とをつらねて、こゝにわれわれはアングロサクソン民族の根本的性格の一角にドシンと衝き当たつたやうな気持がする。(『興風』編輯部編記)

(昭和二十二年『興風』六・七月合併号所載)

第五章

シエークスピア研究序説



1564年4月英国ウオリック州エイヴォン河畔ストラトフォードの此の家に沙翁は生れたといふ。

一 英訳バイブルとシェークスピア

ヘブライ及びギリシャの原典にも立ち超えて神靈の現しき表現と仰ぎ誇称せらるゝ英訳バイブルと「英語国民は等しく皆シェークスピア王の臣民なり」と讃嘆帰依せらるゝシェークスピアとは、遍く英語国民の老若男女に伝誦親愛せられて、その日常の平話を莊嚴し生命化して、英語国民全体の精神的性格の護持養育者となつてゐる。

ヘブライの神話とその予言者文学とがあらゆる迫害の下に其の民族の団結と信仰の純一とを護らむとする苦悩に充てる歴史的体験と有漏の穢身の永劫の悲泣の慘澹たる記録であるやうに、シェークスピアの諸戯曲は中世封建の騎士の世の豪華と残虐と、至純の情と悪鬼の心と、不測の運と不滅の信との表裏交錯出沒展転のうちより、近代国民主義誕生の斉吹喇叭の号音を千軍万馬の劍戟鉄蹄の轟、血戦乱闘の関声を超えて高らかに誇らかに吹き鳴らすのである。

不朽の表現の背後には一の大なる民族的綜合体験が秘められてゐる。それは民族の創

造的綜合精神の結果であると同時に、その民族的史的綜合體驗の不滅の表現の故に、永くその民族の史的開展に随伴して遠くその民族の性格を鎔造し、その歴史の針路を不可測に導くのである。英訳バイブルは英語國民に世界統治の「選ばれたる民」の國民的信念を与へ、シェークスピアは善悪凡聖を共に没する無常無涯底の人生開展とそれを統ぶる祖国至上の絶対歸依感を賦与するのである。

二 無常人生と至上祖国

此の世は輝ける戯れか。

人おのく己れを偽る。

「眞実のごと隠すこと無からむ」と

人は他に向つて言へど、

そは弥深く己れを隠さむ為なるを。

あゝ、おぞまし、汝が夢醒めず！

此の世は狭き筏イカダの如きか、

狂へる波に浮かびたゞよふ。

『手をたづさはらむ、嵐すさぶに』と

人は他に向つて言へど、

手を執れば即ち突入れぬ波底深く。

あゝ、おぞまし、汝ナが夢醒めず！

あゝ、おぞまし、汝ナが夢醒めず！

これ英語国民の、無常の人生、虚仮なる世間の痛感の告白である。よろづのこと、たはごと、そらごとまことあることなし。たゞ仏のみぞ是れ真。愚悪無常の痛感に即ち開くる不壞の一心、金剛の至誠心である。」

めぐり来る明日アスまた明日、

ひと日／＼と過ぎゆくいのち

碌々いやはての日に。

過ぎし日のことごとくたゞ照し来ぬ。

空しくも塵に帰らむ道の長手を。

消えよ、消えよ、はかなき燭火トモシビ！

人の世はたゞ歩みゆく影、

片時カタトキを舞台に躍れどやがて声無し。

そは白痴者シレモノの語れる説話ハナシ

をらべども、たけべども

遂に意味無し。(マクベス、五幕五場)

あらゆる栄華、権勢、利養の個人的欲望の促迫に狂はされて、天地容れざる逆罪を犯せし涯は、あゝ、何ぞ虚しき！ 此の塵と碎けて跡なきいのち！

此の世の徒アゲなる耀トクきよ、厭はしきかな！

わが心あらたに目醒めし思ひす。

あゝ権門に媚ぶる人らの果敢なき嘆よ！

心つくして我らが求むる

かの権勢の人の一笑とその一顰と、

そこに受くる我らが苦悶と憂懼の烈しき！

そは戦ひも恋も及ばず。

しかも落つるや落つること魔王の如く、

遂に希望を永久トコシナヘに絶つ。(ヘンリー八世、三幕二場)

それ故に「権勢を求むるな、ゆめ。その罪を犯してこそ大天使も落ちしなれ」と、己
我を究極の原理たらしむることを戒めて

己れを常に後とせよ。我を憎む

かの人々をいつくしめ。

欺かぬ真心に動かぬもの何かある。

常におだしきやはらぎを忘るゝな、

妬嫉の人の口ふさぐべく。

正しかれ、恐るゝな。汝が真心に

尽すはたゞ国の為、

神の為、道の為なれ。(ヘンリー八世、三幕二場)

と訓へらるゝ。しかも、それは祖国への無限の思慕、祖国伝統への無上の帰依に支へられてこそ始めて自然ソネンとなるのである。

このイギリスは未だ曾て

驕れる夷に屈せしこと無く

また、ゆめ屈せじ、いつの世までも。

来れ、世界の四方ヨキの国々、戈カッとりて。

物見せむ。イギリスにして

たゞ自づからを裏切らずば、

何者ぞ、我らを辱かしめ得る！

(デヨン王、五幕七場)

連綿たる王の御座、この島帝国、

莊嚴の此の土、マルスの宮居、

天上のエデンをうつす此の樂土。

自然の女神の堅めし砦

病ひも軍も犯すこと無し。

樂しむ此の民、此の小世界、

白波かこむ此の真玉、

海原四方に垣とめぐり

堀と守りて、醜国の

窺竄を容さず。

あゝ恵まれし此の郷、此の土、

此の国、此のイギリス！（リチャード二世、二幕一場）

スペインの「無敵艦隊」をイギリス海峡に迎へ撃つて、世界制覇の第一声を高らかに揚げし Merrie England の奔騰する若きいのちの縦横無碍の表現である。それは中世以來持ち伝へし一切の芸術的伝統、思想的遺産が、近代文明の黎明としての文芸復興の華と開いて、旋転奔騰する民族生命の躍動のうちに創造的綜合化せられし最勝の表現、不滅の記念である。

三 シエークスピア、ゲーテ、ホイットマン

カーライルは『英雄崇拜論』のうちにシエークスピアを評して

「此の偉大なる靈魂が千差万別の人と物と——フオールスタフの如き、オセロの如き、ヂュリエトの如き、コリオラナスの如き——を悉く摂取して洩らさず、之を如実に剩す処なく我らに表現して示し、仁愛、節義、以て万人を等しく同胞とし親しむ状は真

に観る人をして雄大崇高の感に耐へざらしむるものがある。Novum Organum 其他
ペイコンに見出さるゝ一切の知性は全く第二流のものに属するのであって、シェーク
スピアと比すれば如何にも卑しく、物質的で、貧弱である。現代の人々の間には、嚴
密に言うて、同格の者は殆んど見出し難い。たゞゲーテ一人のみ、シェークスピアの
時代以後に於いて、余をして之を想起せしめる」

と云うてゐる。シェークスピア以後の第一人とカーライルが仰いだゲーテは、その二十
一歳の当時、友人とのシェークスピア共同研究の席上、青年の熱情を傾けて斯う叫んだ

「僕はまだシェークスピアについて余り考へてゐない。ほんの拾ひ読みをし、特に優
れた箇所を味ふといふだけしか僕にはまだ出来ないでゐる。しかし、僕が読んだ第一
頁は僕を生涯彼のものとした。彼の劇詩一篇を読み終へた時、僕は生れながらの盲人
が忽然眼の明を与へられたものゝやうであった。その時、僕は自分の生が限りなく広
がったことを歴々と見た。シミ／＼と感じた。総てのもの、今や皆新であつて、身に
覚えのない強烈の光に僕の眼は痛んだ。しかし、少しづつ／＼物が見えるやうになり、

そして僕の蓄容性のお蔭で、僕の獲た物をいつまでもハッキリ感じてゐる。僕は古典劇を断然放棄することに些かも躊躇しなかつた。……シエークスピアの劇詩は稀有の真玉の数知れず収められし美しき手箱であつて、そこには目に見えぬ絲筋に載つて世界の歴史が僕らの眼前を通つて行く。僕は叫ぶ、自然、自然！ シエークスピアの人物ほどに自然のもの何があるか！ と。彼はプロメテウスの如く其の人物を一点々々一画々々作り成して行つた。たゞそれが尨大なる大きさのものであるだけだ。それだから僕らには真実の人間とは思はれないわけだ。また彼はその人物すべてに彼の魂の息吹きを与へて活かした。人物のすべてが彼の魂を表現してゐるのであつて、僕らはその人物の相関を見てとるのである。……さてまだ序論も述べてはゐないが、結論を述べるとすれば、古来の思想家が此の世について言うたことが其のまゝシエークスピアにも当てはまるのである。それは、我らが呼んで悪となすものも実はそれは実人生の半面であつて、善と等しく此の世に必然に具足し、全体にとって已むを得ざる一部分となつてゐること、恰かも四時温和なる楽土をあらしめむが為には熱帯は燃え、ラブランドは凍えざるを得ないのと同理である。彼は我らを導いて全世界を経歴せしむ

る。然るに我らは、魂も弱く体験も浅く、見慣れぬ虫の飛ぶを見ては、一々に叫ぶのである——あな恐、食はれて了ふ、と。諸君、奮起せよ！ 警鐘をつき鳴らせ、所謂オ上品の楽園に泰平の眠を貪る聖人君子の夢破るべく！ 彼らはその退屈の薄暗がり、に半生半死、感情のみ興奮して、骨には髓が抜けてゐるのだ。疲れて眠る程にもあらず、さればとて立って働く気力も無く、彼らはたゞに暗い生を恋と歌とにまぎらせて、あくびして過すのだ！」

アメリカの真の一体化を実現した南北戦争の大動乱に生みなされたアメリカの第一詩人ホイットマンは、シェークスピアを含めて東西のあらゆる古代叙事詩を荒磯のほとりに碎くる波の大自然の調べに合せて繰返し／＼朗誦してそのいのちを養ひ、思ひをはげましたのであったが、「アメリカに於ける今日の詩歌」を特に「シェークスピアと将来」と副題して論ずるうち、

「この我が三十八州は今日、過去の先蹤の生める子として、若くはあれど、尚極めて古き国の継承者として、立ってをる。イギリス列島の封建制は、シェークスピア——及び彼の正統の後継者ウォルタ・スコット並びにアルフレド・テニスン——に代表せ

られて、そのあらゆる残虐と迷信と邪惡にも不拘、得も言はれぬ美しき雄々しき脈々たる血統と詩歌と風俗とを有してゐた。その過誤さへも心を魅する。実に歐洲に於けるあの封建制のみが、丁度アメリカ南部諸州の奴隸制と同じく、最も丈高き、最も氣高き人格の数々を産出し得るものゝやうにさへ思はれる。——他には見られぬ力と献身と愛と——不屈の勇、寛仁、志氣、万物の骨髓は彼処にのみ生みなさるゝものかのやうにさへ思はるゝ。こゝである、シエークスピア及び上述の諸家が、アメリカに對して不可計量の貴き貢獻を致すのは。……愛憎違順の暴風駛雨を描写し表現する者としては、シエークスピアは、極めて高い地位にあるとはいへ、なほ之に匹敵する者は幾人もあり、且つ古ギリシアの最勝の劇詩人ら（例へばエスキロス）は更に之に立ちまさつてさへもをる。しかし、中世歐洲の大名小名達、その人心の奧秘に最も近く触るゝ傲岸の風采（優越感！優越感！恐らくは一切の感情に増して——恋よりもなほ——一層人心に近く触るゝもの——合衆国の我らにも亦、何者にも換へ難きもの）を打破するに當つては、彼は天下唯一人であつて、彼が斯くも世人を遍く魅する所以も怪しむに足らぬ。……一切は此の新世界アメリカの進展に貢獻する。乱風も、逆風も、

逆潮も。繰返し／＼暴風に揉まれ怒濤に漂はされ、或は吹き戻され或は水漬かりとなりながら、船は結局その志す方へとたじろがず進み行くのである。シェークスピアは恐らく他の何者にも増して其の貢献する所過去に於いて最も多くあり、今日に於いても尚然りと言ひ得るであらう。」

これらドイツ及びアメリカの最高の伝統を表徴する人々の言葉に東洋の我らと陰陽の關係に於いて相補足すべき西洋文化圏諸国に於けるシェークスピアの精神的地位が如何なるものなるかをほど察知し得るであらう。

四 シェークスピアと現代

をのこやも空しかるべき万代に語りつぐべき名は立たずして、と憶良の悲嘆口吟した其の「万代に語りつぐべき」言葉こそ、個人にとつても民族にとつても、永久不滅の生命の確証である。古典とは実に斯くの如きものである。それは民族生命の圧縮的表現であり、民族史的動乱の一切の悲痛と歓喜と、憂苦と奮迅とを含蓄して之を永久化すると共に、後代億々の子孫をして其の民族の史的生命の最高源泉に不尽のインスピレーション

ンを汲ましむることによって、民族生活を常に若き生命に呼び醒まし、至上の性格を護持養育し行くのである。現代に対する古典の意味をそこに認めしめられる。

英語国民にとってシェークスピア、ドイツにとってのゲーテ、我らにとっての『ふることぶみ』である。今こそそれら古典の生命威力の呼び目醒ましめられ、試さるべき時である。我らはシェークスピアと英訳バイブルのそれにも尚立ち超えたる清亮雅醇、豪宕壮大、深沈痛酷の言葉の調べを我らが国民生活の上に響き合はしめねばならない。その時こそ始めて我らは、我らが崇めまつる御祖の神達と共に、その名、そのいのちを永劫の祖国のいのちと共ならしむることを得るのである。靈魂不滅とは此の謂ひに外ならぬ。いざ、戦へ！ 祖国防護のためかひに限りある身をうちくだきてこそ、「万代に語りつぐべき名」は立つであらう。

「今一度、突き破りし突撃路に、友らよ、今一度！」

さもなくば埋づめよや、敵の此の壁を、わがはらからのかばねもて！

つゝしみ黙し居、へりくだらむは

おだしき御代の人のふるまひ。

戦闘喇叭ひと度鳴れば、
倣へ、雄獅子の猛きふるまひ！」（ヘンリー五世、三幕一場）

（昭和十六年『新指導者』八月号所載）

第六章

ロバート・ブラウニングと
サー・ウォルター・スコットの詩の訳



書斎におけるスコット。暖炉の上には沙翁の胸像が飾られてある。

海上より故国をおもふ

ロバート・ブラウニング

いつかしく、いつかしく

セーント・ビンセント岬は

西きたに消えゆきぬ。

沈む日は、たゞ赤々と

ひと色に、血汐のごとく

ケーヂス湾にい照りそゞぎぬ。

火と燃ゆる海の中に

青ずみて、たゞに向ひて

トラハルガーは横はり居ぬ。

ひがし北、ゆふ闇の

いと濃きかなた、ほのくくと
ジブローターは高く峙えぬ。
こゝぞ、又こゝぞ、
イングランドの、われを
助けたりしは。

「あゝ、いかに我は
イングランドに

報い得べきか？」――

かくこそ言はめ！

人みなは、この宵の

われのごとくに、

ジョーヴの星の

もだしつゝ、かのアフリカの

空高くのぼりゆくとき、

天地の神にむかひて

たゞへごと、いのりごと

まをさむ人は。

(昭和十三年『学生生活』十二月号所載)

『最後の遊吟詩人の歌』より

サー・ウォルター・スコット

(一)

いやしくも息ある人の、

たましひの死に果てよ、

「こゝぞ我が古里の国なる」と、

われとわが心に曾つて

告げざりし人ありや?

外づくにをさすらひしのち、

ふるさとに歩みをかへし、

胸ぬちに高まる思ひ

燃えざりし人ありや？

もし有らば、その人を

行きてよく見よ。

その人の位はたかく、家栄え、

天下の富はたもつとも、

ミンストレルの心より歌ひあげたる

まごころの歌はひどかじ、

かゝる人には。

位あり、勢大きく、よし富めりとも

たゞに己れのほか知らぬ

醜のやっこぞ、

うつそみの生けるあひだは

うつくしき清き名立たず、

身もともに死にて消ぬれば

惜しまれず、崇められず、歌はれず、

生まれし元のちりひぢに

帰らむのみぞ、空しくも。

(11)

おゝ、カレドニア！ あめ地の

なしのまに／＼いつかしく、

歌びとをはぐゝむに適はしきかな！

草むら赤く、木立茂る国、

山高く、水速き国、

わが御祖みおやらの、なつかしき国！

誰かわれを此の岩山の

たゞみなす国に結べる

子たるきづなを

遂に解き得む人ありや！

よく知れる山々谷々

つばらかにながめつゝ

今と昔をしぬびあはずに、

この山こそは、この川こそは、

一切をうしなひしわれに

たゞ一つ残されし友なりしかな！

悲しみのそこひにありて、

いよゝ、この山よ、川よ、

恋ほしくもわれに迫り来。

よろ／＼と弱き我が

歩みみちびく人は無くとも、

われは尚さすらはむ、ヤロウの岸辺を。

衰へしわが頬は、よし凍るとも、

エトリクの流れ吹きおろす

風をわれは身にしめむ。

よしやわれ人に知られず

たゞ一人、この世の息の絶ゆるとも、

チービオットの岩根まき

われは寝ねなむ、息は絶ゆとも。

(昭和十四年『学生生活』一月号所載)

第七章

コールリツヂの教訓

コールリッヂの教訓

イギリスの詩人コールリッヂは、その青春時代、フランス革命の嵐に心打たれフランスの熱烈なる崇拜者となった一人であった。二十四歳の彼は、その長詩『宗教的瞑想録』のうちにフランスを呼んで――

懐しきかな、人類の救主、

神のいとし児、

罪知らぬ平和の王者、

汝れをこそ護らむ為に！

と叫んだのであった。彼は、「わが同胞は血汐を注ぎ、身を砕きつつあるに」われのみ独り夢見つつ此の生を送らむやと「自由」の宣傳を徹底せしむべく、政治批判の為の雑誌発行を計画して、自らその読者を集むる為に、単身ブリストルよりセフィールドに徒歩行脚を試みた。

以下は、コールリッヂ、四十六歳の著述——之も少数の読者を辛くも集めて定期刊行的に発表した政治評論であるが

——『友』の一節である、——

愛国者の目的は、国を同じくする同胞をして、叡智を具へし動物の当に享くべき幸を、事情の許す限りに享受し、また固より、その天に受けし資性を完成せしむるに存する。

愛国者は、国を同じくする同胞にしてあらゆる人類の受用して可なるべき、また当然受用すべき物を受用せざる者一人も有らしめざらむが為に、また或る十分に多数の人々をして、万人の等しく受用することは不必要でもあり不可能でもあるが、しかも猶万人の益となり誉となる諸々の徳を成就するを得しめ、また励ましむる為に、粉骨するであらう。愛国者は知るのである、祖国愛そのものが実にわれらのあらゆる愛情と美德との至美なる連鎖の必要欠くべからざる一環なることを。そして憤ろしき侮蔑を以て顔を反けるのである、彼をして世界主義こそ国民精神にも優して有りがたきものぞ、全人類こそ一族にも優して尊き愛の対象ぞと信ぜしめむとする偽りの哲学乃至謬れる宗教から。偽りの哲学、謬れる宗教は言ふ、プラトーンは、ルッテルは、ニュウトンは、また之等

の人々と比肩すべき人々は皆、市場に於いて人と成りし者にあらず、議会に於いて人となりし者にあらず、実に世界に於いて人と成り、且つあらゆる時代のあらゆる人類の所有なりと。誠に然り！ さりながら、之等少数の巨人等は、果して何処に、また何人の間に生れしや？ 人間の愛情に結ばれし団体の裡より——人の権力と利益とが紛乱すること無く共同の土に栄え、単なる音声に依って傳はる震動の明かに段落句切られ、しかも一貫の美を失はず、悉く集まって一つの思、同じき感激を表現するが如くなる此の国家より。一兵卒すらもなほ、われとわが胸に敵の銃剣を集め刺し、以て戦友の為に突撃路を開かむとする此の国家より。しかも「各員その義務を果さむことを期待する」その祖国の命のまにまに、習慣の為に慣れたるにあらず、恐らくその初陣に當って、向う見ずにあらず、絶望にあらず、人生を懐しきものたらしむるその諸々の幸福と、またそれらを享受するに恥ぢざる者と自らをなすその諸徳を鋭く感ずるが故にこそ死をも冒す！ 王室が神聖なる「自由」の光明と慕はれ敬はれ、賤の男も鍬とりてなほ同じき真心に「君が代」歌ひ、「ブリトンはやめゆめ奴隷たらざるべし」と口誦み、或はまた己が庭の醜草を、わが懐しき故郷のしるしの土ぞと一本余さず抜かて止まざる此の国家よ

り！ 光の陰に依って限らるる如く、寧ろ光が更に烈しき内なる光に限らるる如くに、明かに限られればれし此の団体の裡よりこそ、此の団体の裡よりのみ、全人類の規矩たるべき言葉を残し、その愛以て万国を収むべく、その声以て万代を動かすべき人傑は出現するのである！

○

コールリッチは、イギリスに呼びかけたのである、——

されど、ああ、

懐しきブリテン—

わが祖国！

汝が名にまして

われに懐しく、

また尊きものはあらざらむ。

わが子、わがはらから、

わが友、わが夫、わが父！

われは畏む、

あらゆる自然の愛の絆を。

しかも汝が

岩畳みなす岸の辺の

限りのうちに

それらは包まる。

と。この「あらゆる自然の愛の絆」、それがわれらを人生につなぐものであり、また実にコールリッジ——人類の救主フランスの狂信者たりしコールリッジをその祖国イギリスにつないだものであったのである。

○
ああ果知らぬ闇ぬちを相慕ひ共に生き行く無限の哀憐、無限の愛執、その極み無き錯綜を一つにつなぎ、統ぶる生命。没入せしめよ、個我の思を。つながらしめよ、個我のいのちを。疑ふなかれ信ぜよ、日本を。日本の民を。自然のままなる愛にまかせて。

松陰先生『講孟劄記』一節——

学ノ善悪ヲ論ゼバ、正学ヲ崇ンデ曲学ヲ排スルハ固ヨリ也。然ドモ今茲ニ一人アリ。真ニ志ヲ立テ己ヲ益シ人ニ益セントノ心ナレドモ、偶々正学ヲ知ラズ、曲学ヲ主トスル者アラバ、豈一概ニコレヲ非トスルコトヲ得ンヤ。又其学ブ所正学ニ似タレドモ、其志却テ名ノ為ニシ利ノ為ニスル者ナラバ、亦豈一概ニコレヲ是トスルヲ得ンヤ。然レバ学ヲ言ハ志ヲ主トス。其曲ト正トニ至テハ第二義ニ落ルナリ。是孟子古楽俗楽ノ説ナリ。今ヤ文教興隆、正学世ニ明ナリ。士孔孟ノ言ニ非レバロニ称セズ、三尺ノ童子モ管晏ヲ言フコトヲ恥ヅ。

吾諸君ト此世ニ生レ、正学ニ従事スルコトヲ得ル、実ニ大幸ト云ベシ。然レドモ志ヲ立ツル事真ナラザレバ、名ハ正学ナレドモ曲学ニモ劣ルベシ。事旧リタレドモ、子トシテハ孝ニ死シ、臣トシテハ忠ニ死シ、仰イデハ、皇国ノ大恩ニ報ジ、俯シテハ一身ノ職分ヲ尽サント、日夜ニ志ヲ励マシテ学ヲ勤メバ、其正学タルニ負カズト云ベシ。孟子嘗テ云ク、五穀モ熟セザレバ萁稗ニ如カズト。思ハザルベケンヤ。抑志サヘ真ナレバ曲学ニテモ一概ニ非トスベカラズトハ雖モ、世ニ志アリテ曲学ニ陥ル者アラバ、吾手ヲ把ツテ

正学ノ途ニ進ント欲スルハ固ナリ。是ヲ以テ又孟子楽ヲ論ズル言外ノ旨ヲ領スベシ。

同じく松陰先生書牘のうち——

得_レ士最良策併不_レ如_下使_三士得_三于吾_一之為_レ愈

己を成して人自から降参する様にせねば行ぬなり此節愚議如_レ右一変候松洞は画をつとめ且読書を努め玄瑞読書作文つとむべし人を結ぶも吾より意ありては遂に長久せず只来者不_レ拒去者不_レ追にあり僕一病漸快候へども学業兎角荒廃残念々々兎角非力故榮太すら既に輕視して去る況や其他をや只自力を強くして人自ら来る如くすべし伝之助も時々来候へ共心服と否と不_レ知偶余に心服するもの再三輩あれど皆々力なきものに御座候力あるものの余に服したるためしなし

○

明治天皇御製

述 懐

おのが身はかへりみずしてともすれば人のうへのみいふ世なりけり

をりにふれて

天をうらみ人をとがむることもあらずわがあやまちを思ひかへさば

をりにふれて

わが心われとをりをりかへりみよしらずしらずも迷ふことあり

○

「自然なる愛情の絆」が真ならば、その人は正しき道に向つて歩みつつありと信じてよいと信ずる。人にして「自然なる愛情の絆」の無い人があらうか、ただその真ならむことを日夜にかへりみこひのみ祈りまつらねばならぬのである。それが人の心である。

「われらは友に近づく時、友の心の真なることを飽くまでも信じよう。友の根基の覆し得ざる広さを飽くまでも信じよう。」エマーソンの言葉である。「また友が自分のものである喜びはただ、われならぬものがわれなるにある。吐逆を催さしむ、日月光を失ふ、余が男らしき励ましを求めし処に、少くとも男らしき抗ひを求めし処に、苟合の雑炊を見出しては。友の鸚鵡返しとならむより寧ろその横腹の刺となるべし」とふエマーソンの言葉を潔しと味ふのである。「ああはらからよ、知らずや、われら今かく別るるは再び更に高き立場に相見むことの為に過ぎぬを。そして愈々自己を固く把持するが故に益

益互ひに友のものとならむが為に過ぎぬを。」（昭和六年二月十四日夜）

（昭和十八年刊自著『米英研究』より）

第八章

イギリスの古道と

サー・ウォルター・スコット



1771年8月15日サー・ウォルター・スコットが
生れたスコットランドの首都エディンバラの家

サンダスンの『政治学』とスコットの『ウッドストック』

後藤二郎氏がウイリアム・サンダスンの『政治学』のうち「国家主義」の一章を其中核思想として選訳せらるるに際し、此の世界大戦下に於ける其の翻訳事業の意義と米英思想の史的開展の一面に就いて一言を費すことは、已み難き内心の要求である。

サンダスンの『政治学』は其の「国家主義」の序詩にも明かなる如く、既に現代イギリスに其の影を没してしまつてゐるイギリス古道の精神を現代イギリス国民の魂に喚び醒さむとする志の下に執筆せられたものであつて、同氏は此のイギリス古道精神の喪失せられたる現状のままにては、イギリスの国家的独立も到底世界列強の圧力下に維持し得ぬことであらうと断じ、些かでも此の健全なる人間生活の伝統を形態上だけにでも保存しをる国民は、全く此の伝統を喪失し尽したるアメリカ合衆国の如きと一切の交渉を持續してはならぬと主張するのである。

現時の世界大戦下に於けるイギリスは、此のサンダスンの主張とは全然反対の方向に国を挙つて突進せざるを得ぬ状態に置かれ、斯くてイギリスは其の心ある思想家の悲泣

の叫にも不拘、アメリカ合衆国の民主々義とソヴェト聯邦の共產主義とに身動きもならぬやうに抱きすくめられて、一路人類破滅の道を驀進しつつある。即ちサンダスの叙述は直ちにとって現米英の誤れる思想的立脚点の批判となるのである。イギリス古道の精神をとって、之に反逆して国家崩壊の必至の思想的因果をたどらむとする現米英の姿を照破せむとする、これがサンダスの一文の現戦時下に於ける国訳の意義であると言ひ得よう。

更に注意すべきことは、此のイギリス古道こそナチス・ドイツの指導者が仰いでゲルマン族の最も純粹高貴なる民族伝統の典型なりと讃嘆しつつある所のものに外ならぬことである。この事は、例へばナチスの農業政策の指導者ダレエの『血と土』を読む者の等しく氣附かしめらるる所であり、又ドイツの教育改革原理のうちにイギリスのパブリック・スクールの精神が攝取實現せられつつある事実の如きに顧みれば、極めて明瞭なる所である。

即ち、日本も、ナチス・ドイツも、等しく此の健全なる人間生活の伝統を喪失し自らの古道に反逆せる米英の非人道を討滅せむが為めに戦ひつつあるものであることを氣附

かねばならぬのであって、此の米英の思想的開展の経緯を究めずして、単に米英を個人主義、自由主義、功利主義とのみ解し、「米英的なるもの」の名の下に米英の一切を一括的に葬り去らむとするのは、却つて米英の古道的真背景に氣附かず、米英の総反攻氣勢の前に心の動揺を隠し切れずにをるやうの不覺を取る原因ともなるのである。

イギリス古道に反逆せる現米英の思想的素質の源流の一端を「慕古の志氣」に燃えたりしイギリス詩人ウォルター・スコットの言葉に検しよう。クロムウエルの「大反逆」時代を描いたスコットの小説『ウッドストック』の中に、王領の土地没収の為に派遣せられた三人の委員の性格と思想を分析して次の如く言うてゐる。

「デイスボロウは肥えた、牡牛の如く逞しい頸の男で鈍重な野卑な面構へをして居た。……別に片輪ではないのであって、四肢五躰を一つ一つ取って見れば何れも満足なのであるが、それが銘々別々の相矛盾した原理に則とつて働いてをるやうに思はれたのである。……一口に言へば、デイスボロウ大佐の手足は寧ろ聯邦議会のい、がみ、合ふ代議士連に似てをって、確乎として緊密な王政の下に良く秩序立てられた四民代表の結合が各自その処を得つつ皆同一元首の命令に服従する有様とは似ても似つかぬもので

あつた。

第二の委員ハリソン將軍は、たけ高い瘠せた中年の男で……微賤の出で、牛殺しの父祖の業を継いだにも不拘、外見は粗野でもデイスボロウとは違って野卑ではなかつた。軀幹長大堅確、その風采に荒々しい軍人的性格が現はれて、人に恐れられることは有つても容易に軽蔑や嘲弄の的とはされさうもなかつた。整はぬ所の有る顔も鷲鼻と漆黒の眼のお蔭で幾分見直され自説を滔々と他に説いて聞かす時その眼のうちに時として閃く怪しき光は、自ら独り之を黙想する時長い黒い睫毛の下に眠るが如く思はるることも屢々であつて、これが為に彼の容貌は何処となく人を打つ凄さがあり、高貴にさへも見えたのである。彼は第五王国党と呼ばれる一派の頭領の一人で、当時一般の民心を支配した狂言の更に一步を越えて擅に『黙示録』を自己流に解し、救主再臨と千年楽世の現前近しと信じ、此の世界史必然の開展を自ら予見する力を啓示せられ有るものとして此の新政即ち所謂第五王国の実現に選ばれたる民となり其の一切の榮譽を現世にまれ来世にまれ悉く受くべき宿命有りと信じてゐたのである。

此の狂熱精神が一種の精神異状の発作のやうに働いてハリソンの心を直接に支配し

て居ない時には、彼は世事に鋭く決して損をする男でなく、又戦争も巧みであった。転んでも唯は起きない人間だから、第五王国の実現を見て自分が栄光の位置に上るまでの間は大將軍クロムウエルの覇権確立の爲め一臂の力を喜んで添へてゐたわけである。彼は元、牛殺しを業として屠殺場の血腥い光景には慣れて平氣であつた故であらうか或は彼生来の無情冷酷に由るものであらうか、それとも又彼の把持して居た狂信の結果、己れに敵する者は神意に仇せむとする者であるから何の情容赦も要らぬものだと思ひ込んで居たのであつたであらうか、いづれとも其の真因は断じ難いが、乍併万口的一致する所は、戦勝の後や城市陥落の後に於いてクロムウエル麾下の將軍中ハリスン程に残虐、無慈悲を極めた者は無いといふ一事である。彼は遁竄の者を飽く迄も追跡捕殺することを常に聖書の本文の勝手な引用で強調し、又時には自首して降服せる者を迄殺戮することさへ敢へてした。それで斯うした残虐行為の数々の憶ひ出が彼の良心に流石とがむる時もある、彼が好んで幻想の世界に描き出した栄光の夢を苦いものにしたとも言はれてゐる。

後に残つたブレットソンは、他の兩人とは容姿全く異つて……顔は細く鋭く、額に

は年齢以上の皺が寄って、口辺には絶えず冷嘲の色が浮んで、……その政治理論は夙くよりハリントン一派の『無可有郷』に倣れてイギリスのやうな広い国土に純民政共和国を樹立しようといふ夢のやうな空想を抱いて居た。これは真に浅墓な考へで、身分にも習慣にも教育にも道德にも無限の差違が有り、私財の貧富に天地の隔りが有り、そして又全人口の大多数が大都市及び工業地方の下層階級から成立つてゐて、本来の意味に於ける共和国の市民が必ず遂行せねばならぬ国家政策決定指導の分担に到底堪へない種類の者であるといふ現実の国状を全然無視してゐるのである。だから、それが実験された時、そんな形態の政府は一刻も安定し得る望が無いことが明白となつたのだ。……けれども、ブレットスンに共和主義の殉教者となつて生命を捨てることは勿論そのために些少でも重大な損失を招くことも甘んずる意志が有ると思つたら大間違ひで、成る程彼は真面目に共和主義を奉じてをり、それが全く実行不可能であることが判つた後も少しも変らぬ事は、元來政治理論家なる者は丁度中世の錬金術士が自己の蒸溜器が爆発しても其の信条を曲げなかつたと同様に、自己の理論が実験に不成功であつても決して其の確信を捨てようとはしない者だからである。しかしブレット

スンはクロムウエルでも誰でも現実勢力の把持者なら一義に及ばず之に服従するのであった。彼は実行上に於いては常に現実に権力者に追従して遅れざらむことを願ふ外に他意なく政府形態の如何は些かも問ふ処でなかった、と云ふのは理論上ハリントンの理想国家に達しない限り一切の政府形態はどれもこれも不完不備なることに於いて扱ふ所殆んど無きものと彼は考へてゐたからである。(Sir Walter Scott: "Woodstock, or the Cavalier," 第十一章)

斯ういふ無原理の野卑なる俗物と、幻覚に基づく狂信に支配さるる冷酷なる軍人と、巧弁懦弱の輕薄理論家とが、国家の正統なる王政の教化伝統より遊離し之に反逆して、結局各自の個人的利害打算を究極の行動原理とする「民政」の仮装原理の下に寄り集まつたのであって、スコットは之を概括して「王と其の閣僚、議會と其の領袖、イングランド及びスコットランドの各聯合王国が相互に何たる不可思議の誤謬過失の数々を犯したればとて遂に斯くも危険なる思想と偏頗なる人物とをブリテンの国運の決定者中に生起せしむるに至ったかは、見るも驚愕怪訝に堪へない所であった」と叙述し嗟嘆してゐる。現在の米英、特に米国は最も純粹に此の「国王殺戮」の「大反逆」の血腥き不祥伝

統の承継相統者であることを我らは忘れてならぬのである。此の人道廃欠の不祥伝統を其の根幹に於いて払拭襖祓して「人の世の正しき道」を世界歴史の上に復興護持成就養育すべきことこそ今次世界大戦の文化的、思想的、重大意義であることを実証すべき一の客観的材料ともなるのがウイリアム・サンダソンの『政治学』の一書なのである。

(昭和十七年『原理日本』十一月号所載)

第九章

キプリングの小説二篇について

キプリングの小説二篇について

Ⅱイギリス国民性の一面Ⅱ

故河村幹雄博士は其の『日米不戦論』のうちに「新英学の一任務：美点の摂取」を説いてリンカンとリーの事蹟を叙せられた後「見習ふ価値のあるものは未だ他にもありませんが今度は方面を換へて文人の中から参考になる人物を挙げて見ませう」とて次の如く言はれた――

「茲に一九二三年に英吉利のマクミランから出た書物があります。非常によく売れた本でありまして、私は此の広告を見るとすぐ註文を發したのでありますが、私の註文が向ふに行つて向ふから送り出す迄に、もう之が三版になった。一九二三年十一月に初めて出たのに、十二月と一月にもう新版が出て居る。而も十二月には二回印刷して居る。即ち都合四版になって居る。それ程売れたのです。著者は英国文壇の第一人者であるアール・キプリング、書名は、"Land and Sea Tales for Scouts and Guides"」

此のスカウトと云ふのはボーイスカウトのことを云ふのであります。ガイドと云ふのはガールズガイドと云つて、男児のボーイスカウトに対して女子の一つの団体であります。がそれを指して居るのであります。『海山物語』と云ふのは之を我國語に適切に言ひ換へたならば『武勇伝』であります。『男女少年の為にする武勇伝』とも云ふべき書物であります。文壇の第一人者が少年の為に武勇伝を書いて呉れたと云ふ此の事実を私は感嘆するのである。どうか我國文壇の人にも、鑑として欲しいと思ふのは此点であります。又一方には少年少女の間に尚武の精神を鼓吹せむとする此種の読物が英国に於て盛に歓迎され斯くも多数の版を重ねつつあるといふ事実から英人の武勇を尚ぶ精神が如何に旺盛であるかといふ事を観取して参考にしたと思ふのであります」(『河村幹雄博士遺稿』九一二頁)

今ここに其の梗概を略叙して之に分析を加へようとする二小話は何れも右の河村博士の推奨せられしキプリングの著書に収載せられしものであるが、筆者は之をイギリス国民性の一表現——文壇の第一人者が自から筆を取つて其の国民の後継者たるべき少年少女のために国民的理想の一面を活叙せるもの——として、英語国民に対立する日本語を

話す日本人としての観点より些か検討論評を加へようとするのである。

その第一は右の書の第六話『ストーキー』であつて之はイギリスの或る寄宿学校に於ける一挿話であつて、キプリングは自から「遺憾ながら或る程度まで事実に基づいたもの」と言ひ、「此の話から学ばるべき唯一の教訓は、諸君が偶々進退兩難の窮境に陥込んだ時、夢中になつて前後の思慮も無く妄動するよりも、沈着冷静に事を処理したなら、その方が都合好く其の窮地を脱るべき見込が有らうと云ふ事である」と註釈を加へて居る一種の悪童実記、餓鬼大将物語である。キプリングには別に此の小話の主人公「ストーキー」を中心とした長篇『ストーキーと其の一党』の著が有るのであつて、之については三浦閔造氏が其の『大日本は神国也』の著の中に『マキアベリズムとダルウキニズムの英国』を論じて「英国は、民主主義にマキアベリズムを結合させて、侵略的軍国主義に変貌し、またダルウキニズムを応用して、対内的にも言語同断なる搾取を事とした。プロテスタントの召命は何処へやらその浅間しさは全く獸的で、特権階級の榮華は羅馬のそれを凌駕するに至つた」と言ひ、此の時代に於いて「キプリングの小説は英国国策精神」なりと断じて次の如く言はるる——

「当時の英国人は『人間は印度の獵犬と等しき社会的動物也』というた。当時英国の小説家キプリングが、進化論の理論を筋にして書いた小説『ストーキー・アンド・カムパニー』は、全英国を揺り動かした。小説には二人組の少年と三人組の少年が大喧嘩を始めて、二人組の方が無残にも血みどろになる。負けた方が悪いといふので罰を与へられる。その子の母親が口惜しがって、駆けつけ訴ふるのを、教師と坊さんが、散々に擲りつけ、為めに母親は聲になる。この小説は熱狂的に愛読され、十九世紀に於ける英国の外交は全く此の小説の精神によって行はれた。この小説を除いて十九世紀の英国史は考へられない」(三浦閔造『大日本は神国也』一七〇頁)

此の長篇小説の未発表の一挿話、而も其の筆始めの一篇であったとキプリングが言うてをるのが今ここに取上げようとする一小話なのである。

主人公の「ストーキー」は綽名であつて、Stalky即ち行動計画が「巧妙で慎密で狡猾なる」ことを意味する学生通用語なのである。此の主人公は一に此の「ストーキー」たむむことを唯一の念願として日頃から苦心慘怛してをるのである。

扱て同窓にド・ウイトレーと云ふ、これも一方の餓鬼大将がをって、此の少年が附近

の農家の人の為に懲罰を受けたのを怨みとし、その仲間を語らって其の農家の牛を山に追ひ上げて仕返しをしてやらうと云ふので「ストーカー」一派へも渡りをつけたが、「ストーカー」を始め、マクタック及び、「ビートル」の三人組は之を肯んじない。あんな奴らと行動を共にしたら結局ひどい目に遭ふのが落ちになる、と見究めを附けてゐるのである。乍併愈々其日になって三人組は篠突く豪雨の中を平気でド・ワイトレー一党の牛盗人の状況偵察に出掛けて行く。「俺達ならうまくやるんだが彼奴らはまるで雀狩りにでも行くやうな気で居やあがる。俺はまだ牛盗人はしたことは無えが、どうせやるなら『ストーカー』にやらかすに限るんだ」と主人公は言ふ。そこへ丁度、牛を盗み出して来たド・ワイトレーが来かかつて一緒に来いと勧めるが「君はきつと引つつかまれるぞ。パースンズやオリンの奴などを引張り込んで居ちゃ仕くぢること請合だ。君はきつと引つつかまれるから見てをれ！」と叫んで取合はぬ。手下の二人が牛盗人は面白いから行かうと言っても断乎と挑ねつけて言ふ「何も羨んで言ふのぢやない。俺から見れば、あんな事ぢや『ストーカー』が足らねえのさ」と。そして自分の言ふ事を聞かぬ二人を蹴り飛ばす。がそれで二人は何とも言はぬのである。そしてド・ワイトレー一党の

後を追跡しつつ、彼らが見張りを配置してをらぬことを指摘して「林檎を盗むにだつて見張りは立てて置かなきや嘘だ」と言ひ、山の小道を行くにも「そんなに首を高く挙げると俺達までも引捕まるぞ。馬鹿野郎、首を引込めて籬の蔭にひそんで行け。苟しくもやりかかつてる間は『ストーキー』にやらんといふ法は無いぞ」と教へる。さうしてをるうち「ストーキー」の案に違はずド・ワイトレーの一派は牛を山へ追ひ上げたかと思ふ途端に農家の男達の伏勢の為に悉く捕虜となつて近所の物置小屋の中に幽閉されてしまふのである。ところが此の物置小屋の一室が「ストーキー」一派が曾つて人目をしゝんで禁制の煙草を呑んだ所でよくその状況に通じてゐるので、愈々これを見届けた「ストーキー」一派がド・ワイトレー一派を詭計を用ゐて救出しにかかる。「三年間彼らは頑固で無慈悲な農村の人々と断えず小競り合ひを続けて来てをるので既に戦術の初歩は充分に心得て居た。戦略に至つては之を大将の『ストーキー』事コークランの指揮に俟たねばならなかつたが、もっともボンクラとされてゐた『ビートル』でさへ、匍ひ進む時は頭上に枯草を被ることを忘れては居なかつた。急がず騒がず、クスクス笑ひはおろか、キュウとも声は立てなかつた。そんなことをすれば必ず痛い目を見ることを彼らは

骨身に浸みて覚えて居るのだった」とキプリングは叙述してゐる。「ストーキー」一派はド・ヴィトレー一党の幽閉された小屋に斯うして忍び入っては見るが、見張番が居てどうにもならぬ。引上げようとて小屋の外にをる牛の群に当惑し、隠し持った石弓でひそかに之を射れば、牛群は凶らずも大混乱を始め、見張番の男も銃を下したまま牛群の取鎮めに夢中になる。其の隙を見て、これ天与の好機とばかりに「ストーキー」は「ピートル、貴様這入って行って、あの馬鹿野郎共を助け出してやれ、早く！」と叫び、遂にド・ヴィトレー一党を無言の裡に逃がしてやる。マクタークが「俺達も逃げた方がよかないか」と不安気に言へば、コークランは「何故さ？俺達は大丈夫だ。俺達は何にもしなかったのだから」と答へて動じない。そして農家の人々がその主人を擁して物置小屋へ入って行くのを見届けて却って之を外から鍵をかけて閉ぢ込めてしまふ。

さんざん農家の人々を焦らした挙句、丁度そこへ何も知らずに通りかかったやうな振をして素知らぬ顔で出してやる。そのお礼にといふので農家の主人は「ストーキー」以下の三人を我家に連れて行って大御馳走をする。「運動をしたので腹は空いてゐた。空腹は良き作法の母である。そこで彼らは農家の主婦の真底からの感服の的となった」と

云ふわけで、此の農家から遅刻証明の手紙を獲得して意気揚々と引揚げて来る。寄宿舎に帰れば門限を過ぎてをるが、証明書が物を言つて先生からは何のお咎めも蒙らぬ。そこで室へ帰つて来れば、ド・ヴィトレーを始め皆が驚愕と讚嘆とを以て彼らを迎へ彼らに一部始終の話をせよと迫る。すると彼らは「俺達こそ真に『ストーカー』だった」と繰返し、マクタークはコークランに「君こそは実にストーカーだったなあ！」と讚辞を呈すれば、コークランは「さうだ。此のストーカー様を良く拝んで置け。さうすればきっと面白い目を見せてやるぞ」と豪語し、「さうださうだ。ストーカー様とは良い名だなあ。ストーカー様は底の知れないストーカーだぞ。実にお偉いお方様なんだ。おいド・ヴィトレー、貴様は馬鹿だな。大馬鹿の三太郎だな」と相手の旗頭を恥しめる。流石にド・ヴィトレーも返す言葉無く「そんならそれで何もさうしつこく言はんでもよからう」となだめれば、尚更笠にかかつて、「いや言ふよ言ふともさ。貴様は実に糞垂れの馬鹿野郎だ。それが解つてゐるか？まあよく考へて見るがいい。予習の時にも、寢床に這入つても。もうよしと言ふまでは半時間ごとに思ひ出して呉れ給へよ。ガンミ！何たる貴様は間抜けの鈍助なのだ！それに引きかへ此のストオキーの叔父さんは」と部屋の

ストーブを掻き廻す火掻き棒を手にとってマントルピースをハタと打ちながら「お偉いお方様!」「ヒヤヒヤ」とビートルとマクタークが相槌を打てば、更に畳みかけて「ド・ウイトレー、此のストーキー様は偉いだらう? 本當の事を正直に言へ! 此の嘘つきの頓痴気め!」と迫れば、ド・ウイトレーも今は助くる味方も無く悄然と「うん——さうだらう」と肯へば「だらうぢや無い。さうなのか?」ときめつける。「さうだ」と答へれば「偉いか?」と重ねて駄目を押す。「偉い偉いから、あの後の話を聞かせて呉れんか?」となだめれば「赤んべーだ。百万円貰っても」と飽く迄も相手の鼻を打ちひしいで、グーの音も出ないまでにやりこめるといふのが此の小話の結末である。

これは何処にも有る餓鬼大将の物語と一笑に附し去らるべきではない。それは実にイギリス国民性の深刻なる一面の表現である。その徹底的なる自我昂揚追求欲——何者も我と両立するを容さぬ勝他優越感への一向追進——と之を裏付ける千鍊万鍛の現実感覚——事実探究の上に築く冷鉄の如き打算、機に臨み変に應ずる百出の狡智、目的完遂の為にする削骨刻肉の苦修難行——これこそ世界に我の外に優者は有らじ、勝者は有らしめじと意志し其の為に一切を献げて他を知らぬイギリス人の根本性格の端的なる自己告

白に外ならぬ。

次の一小話に移らう。これはキプリングの生地印度の物語で幾多英文学の上に記憶せらるべき彼の長篇短篇の生ひ出でし故土の産み成したイギリス人の魂の一断片である。

これが祖国の「スカウツとガイヅのために」キプリングが贈った『海と山の物語』に収めらるる一聯の創作説話の最後に掲げられ、その総括的結論『イギリスの学校』に於ける祖国愛高唱の序曲を成していることに殊に注目せらるべきであつて、キプリングが次代のイギリス人に対して如何なる精神を鼓吹し、如何なる教訓を遺さむとしたかを如実に提示するものとも言ひ得るであらう。此の意味に於いて此の小話「其の父の子」の主人公アダム・ストリ克蘭ドこそ少年の姿に描かるる理想的イギリス人の性格と断定して誤りは無いと信ずる。先づ其の梗概を略叙しよう――

アダムは印度に永く駐在して其の敏腕を自他共に許す地方警視、六十人の印度人巡査を王者の如く統率するイギリス人ストリ克蘭ド・サヒブの一人息子で、まだ学齡前の腕白盛りである。生れてから漸く人の前に抱いて出られるやうになるや否や、父のスト

リクランドは部下の印度人らを集めて『謁見式』を挙行し、此の東西も分らぬ幼児の前に六十人の印度人巡査は六十振のサーベルを鏘然と高鳴らしつつ土下座して拜伏した。そして幼児の手が印度人巡査の一人イマム・ヂン老のサーベルの柄に触るるや、彼らは一斉に立上って同音に絶叫したので、幼児も遂に絶叫して運び去られた。後にイマム・ヂンの曰く「あれは恐くて泣いたのぢやないよ。御立腹なすつたのだ——あんなにまだお小さいに。偉く強いお頭様になんなさるに違ひはないぜ」と。此の子が印度人の乳母に生まれつつ成長するにつれ、一切の印度の自然的並びに社会的環境に同化して印度人の心性の表裏に通曉しつつ逞ましい意欲の溢るる自然児として、母に其のイギリス人としての将来を危ぶまるるまでになる。然し父親は「捨てて置け。今に大きくなれば、そんな事は一切忘れて了ふのだ。さもなくとも夢の中にも出て来る位のものだらう」と言ふ。「大丈夫でせうかね？」と尚も半信半疑の母親に「勿論だ。俺は七つで本国へ帰されたが、ハロー学校ですっかり印度の垢は拭き取られたのだ。パブリク・スクールでは充分イギリス的でないものは何事でも奨励しないのだよ」と言つて聞かす。(此処にキプリングの結論『イギリスの学校』への伏線が有る。) 母親は又之を聞いて愛児と遠く

海を隔てての別離の悲しき日の来るを思うて身震ひをする。斯うした親の心持にはおかまひなく、アダムは相変らず印度人の奇蹟譚を聞いたり馬と遊んだりして日を暮らしてゐる。其の或日のこと、乳母が泣きながら飛んで帰ってアダム・バーバが野馬に生きたまま喰はれて了ひさうだと訴へる。父が息せき切つて馳けつけて見ると、アダムは悠然と馬共の脚の中に陣取つて「近くへ来ると馬が蹴るよ。ジューマに言つて頂戴、僕は御飯がすんだから一人で居たいのだから」と談判を開始する。父親は無理に命じて馬の脚の間から出て来させるが人を騒がせた罰としてアダムは鞭で打たれることとなる。母は流石に視るに忍びず其場を外すが、印度人の乳母は傍に見てゐる。アダムは「僕は此処で打たれるの？」と聞く。「あの女の前で？お父さん、僕は男です——打たれるのは恐くはありません。ただ僕のイザットです——男の名誉をどうします？」と反問するが父親はただ嗤ふのみ、遂に体刑が乳母の眼前で加へられて了ふ。アダムは父に向つて平然と「僕は小さいし、お父様は大きいのだ。けれども僕があゝの馬達の中に這入つたままだったら打たれはしなかつたんだ。お父様は恐くて馬の中へは這入れないんだもの」と言放つ。そして一目散に戸外に飛び出して行つて、途中で抱き止めた者に対して、身を慄は

せ、抑へる手を嚙まうと身をもだえつつ「放して！放して！井戸へ行くんだ。僕は打たれた。女の前で打たれたんだ。放してよう！」と絶叫する。アダム少年は男の面目を女の前で蹂躪された不名誉を激憤し自から井戸に身を投じて死なうとしたのである。かねて斯くあるべしと予想した老印度巡查イマム・ヂンは早くも井戸の口の周りに身を伏せて之を救ふ計を廻らしてゐたのである。イマム・ヂンの述懐に曰く「坊ちゃんが打たれたといふことを聞いた時私は直ぐに知ったのです。印度の馬の中に這入って坐るやうのお子さんなら決してお父様には謝るやうの氣遣ひは無いと。ひょっとしたら自殺して死んでしまはれるかも知れないと。そこで私は此処に伏さって居たのです」とこのアダム少年の一徹の氣概には、パンジャブ地方に名を轟かし一切の強盜殺人犯人等から恐怖されてをる流石のストリクランド鬼警視も頭が上らない。「乳母ばあやが行くまでは僕は家へ這入らないよ。乳母やは僕が打たれるのを見たんだもの。僕が乳母やを返らすのぢやないよ。みんなお父様のせいなんだ。僕はもう乳母やの言ふことは聞かない。乳母やが呉れるものは食べない。乳母やと一緒に寝ないんだよ。乳母やを返らしてよ」といふアダムの言葉を抑へることが出来ず、遂に別の乳母を雇ふこととなる。この新雇の乳母

に對するアダムの初対面の挨拶は「僕のすることが悪かったら、僕をお父様のところへ連れといで。お前が僕を打つなら僕はお前を殺してしまふぞ。僕は乳母やに遊んで貰ひたくはないんだ。行って御飯お食べ」といふのであった。これで一旦この事件は落着いたやうであつたが、その夏の休暇に山へ避暑に行く時に、途中でストリクランドの印度人従者が主人を嘘言で欺くのをアダムは始終何も彼も承知してをりながら父に告げようとならない。ストリクランドが鬼警視の名に掛けて空騒ぎに騒ぎペンジャブ全地方の警官達の前に其の面目をつぶして了ふのを待つて始めて其の真を暴露して父母を啞然たらしめる。そして父親が「お前は大層悪い事をしたのだよ。けれどもお前はさう思つてしたのではなかつたのだらう」と言へば「いいえ、僕はちゃんとさう思つてしたのです。お父様、あの前の乳母やの居る前で僕が打たれた時僕の名誉は汚されました。今その恥が雪がれたのです」とアダムは答へて会心の微笑と共に父親の膝に這上つた、といふのが此の小話の結論である。学齡にも達せぬ一幼童にあって、なほ且つその男子たる名誉を心に銘ずること斯くも深く、その恥は自から死を以て雪がむとする。而して此の一徹の感慨の前には天地間何物をも——父の權威をも母の涙をも——存在するを許さぬのであ

る。しかも其事有りてより幾何かの月日を過ごしつつ冷然として其父に対して宿怨を報ずるに至る、その徹底せる目的完遂の爲の自己把握は実に幼童の行為とは思はれぬ程であつて、読む人をして殆んど心奥に一種の寒慄をすら感ぜしむるのである。キプリングは恐らく、此の死を以て貫く「男の意地」をイギリス次代国民の根本性格として要求してをるのであらう。そしてそれは過去及び現在のイギリス国民性の深刻なる根本特徴の一面に外ならぬ。この徹上徹下独立不羈、对者の屈服以外何らの妥協をも容れぬ天性の気概に更に「日没せざる世界帝国」の支配者たる歴史的自負心を加へよ。そこに天上天下唯我独尊の不屈なるイギリス精神の根本特徴が成立する。そして之を前に掲げた小話に示されてをる「徹底的なる自我昂揚追求欲」と「千鍊万鍛の現実感覚」とに照し合はすれば、イギリス国民性の情意的根本骨格を彷彿たらしむることが出来よう。それらの特徴は固より人類各民族、各国民に夫れ夫れの程度に於いて共通してをる特徴ではあるが、然しイギリス人に於いて特に其特徴が歴史的に明白であり、且つ之を一の国民的根本理想として明確なる自意識と誇負とを以て把持伝承せむとしてゐることを注意せねばならぬ。実に「英国文壇の第一人者」キプリングは、現に此の小話集に示されてをる如

く、次代国民に呼びかけて此のイギリス精神の根本性格を忘失せざらむことを飽く迄も要求して居るのである。即ち是等小話のうちに表現せられてゐるものは代表的イギリス人の創造的想像力のうちに理想化せられ純一化せられたるイギリス精神の根本性格、イギリス国民の永久理想の姿に外ならぬことを我らは忘れてはならぬ。

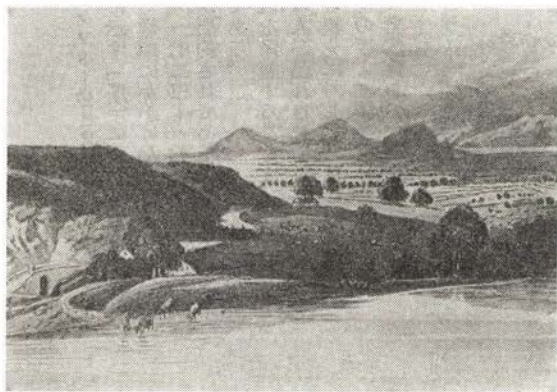
イギリス人に対する限り——これは同時にアメリカ人（イギリス人を其の優勢指導勢力とする）に就いても同じ事を言ひ得るが——屈服か死の外には妥協の余地は断じて有るべからざることを骨に銘じて覚悟してをらねばならぬ。彼らは決して自己の優越に対する何らの挑戦者をも許さない。「ブリトンは、ゆめ、奴隷たるべからず」と信ずる彼らは、世界を我物として取扱ふことに余りにも慣れてをる。それを当然にして且つ自然の事と考へて疑はうとする気持などは毛頭無い。従つて此の自己の世界掌握に対する競争者は、如何なる者も容赦し得ないのである。そこに、スペイン、オランダ、フランス、ドイツに対する五百年を超ゆる血みどろの抗争史が有る。況んや極東の一小島に住む成上りの黄色矮小人種の非礼に対しては之を徹底的に屈服せしむるより外に何の仮借するところがあらうぞ。これが英米人の赤裸々なる、偽はらざる肚皮裏である。之を力の上

に於いて実行し得ずと思へば思ふ程、益々此の黄色矮小人種に対する憎悪と反感は増大するのみである。如何なる鎮静手段を用ゐても彼らは決して其の自己の優越の地位の確認、世界掌握を当然にして自然なりとする根本要求を一分たりとも抛棄しようとする者では無い。彼らは此の小癩なる黄色矮小人種の徹底膺懲を腹の底から決意してをるのである。皇国の興隆は彼らの世界政策を根底より改廃せしめざれば止まぬものである。彼らの世界政策は皇国の興隆と両立し得べからざる基本構造を有するものなのである。我らは深くも此の事実を心に刻して、永久に波瀾狂濤の止まざるべき国際政局に乗り入り漕ぎ進まねばならぬのである。

(昭和十五年『原理日本』二月号所載)

第十章

ウイリアム・
サンダスン著
『経国要略抄』
について



バーズ、スコット、カーライル等の祖国スコットランドの風景。

『経国要略』(ステートクラフト—Statecraft—)の1書の目指すところは、以下に示す「序」に明らかであるが、著者サンダスンが選んで巻頭にかかげたブラックストーン(イギリスの法学者、一七二三—一七八〇)の言葉に、その著作の根本動機が要約されてゐる。ブラックストーンの言葉は次の通りである。

「祖国イギリスの自主自由を保護することは、現にその恵みを受けてをるイギリス人が己れ自身に対し、またこれを守り伝えて来た代々の祖先に対し、またこの人類最勝の特権・至高の遺産をその手より譲り受けむことを要求すべき後世子孫に対し、当然負ふべき責務なのである」と。

一 著者ウィリアム・サンダスンについて

『経国要略』はイギリス人ウィリアム・サンダスン (William Sanderson) 氏の著“Statecraft” (一九二七年、英京ロンドン市、メツイン社刊) の自由訳である。総頁百四十六頁の小冊であるが、イギリスの伝統的政治原理を要約叙説したもので、祖国の命運を念ふ至情に貫かれて居る。著者その人については知るところ殆ど無いが、ロンドンの四法学協会の一員、リンカンズ・イン (Lincoln's Inn) に所属する法学士の一人と推せられる。又この書の内容の一部は、イギリスの有力なる評論誌『十九世紀及び以後 (Nineteenth Century and After)』への寄稿に拠ることが「著者の覚書」に断つてある。そしてイギリスの由緒ある名家、ウィロビー・デ・ブローク (Willoughby de Broke) 卿の理解ある協力の下に是らの研究が成立したことに謝意を表し、この書の最後の一章は元来「ウィロビー卿伝」の一部として起草されたものであったと述べて居る。イギリス王室の永続性の秘密は、その王太子旗に表示せられて居る標語「われ奉仕す

〔Ich dien = I serve〕即ち、国王みづから義勇公に奉ずる「愛国君主(Patriot King)」の理想を実践体现するところに存し、イギリス保守主義の源流もここに発し、これに支へらるるものと解せられる。このイギリス民族不断の活力の源泉たる伝統的保守主義の諸原則を簡明に力強く解くものが此の『経国要略』の諸章である。

〔附記〕 この原書は筆者が昭和十年に日本橋丸善本店の棚で偶然見付けたもので、終戦時北朝鮮に在って戦前の蔵書一切を失った筆者が、昭和三十六年夏、京浜沿線大倉山のお宅に阿部隆一兄をお訪ねした折、「お返しするものがある」として手渡されたのが此の旧蔵であった。阿部博士の篤学の志に救はれて此の一冊だけが奇蹟的に筆者の手に返ったのである。次に訳出した「序」以下、『人生随順』誌上に連載中である。(昭和五十八年七月記)

二 序の訳

「見よ、汝の前にわが置きしは生と福ひと、死と禍ひとなるぞ」

本書の説くところは政治についてである。但し詳論細説はその志すところにあらず、ただイギリス国の拠って立つ動機と政策とを真剣に反省検討するの要あることを切論力

説しようとするにある。本来、政治といふものは、一切の學術技芸を包含してゐるものであつて、これを充分に攻究するためには人間の知力と徳性の極限を尽さねばならぬのであるが、惜しいかな、宗教改革の事あつて以来、人民選挙の力に乗じて世に遍く横行する無智の輩のために筆を執つて生計を立つる御用学者共の売文の料と成り下つてしまつてゐる。その結果、政治はもはや眞の学者の貴重する研究対象ではなくなつた。

御都合主義や因循姑息が慣らはしとなつて、眞の國家の経綸は忘れられ、「政治」といふ言葉は、大方の人には選挙にまつはる低級な広告宣伝や買収汚職以上の何物をも意味しない。近代民主主義のために、本来特殊の治者階級は意識的に廃絶せしめられたので、政治の能力は、社会生活が正に複雑の度を加へて政治の範圍が拡大し、この能力を要すること益々大なるものある今日、却つて次第に衰退の一途を辿つてゐる。

本書が読者の検討を乞はむとするところは、歴史の経験に照らして考察し得る限り、政治の基礎と起原、及びその諸々の目的を究めむことである。

本書は先づ、従来国策を形成し来り、且つ将来もこれを形成しゆくであらう究極の目的を吟味し、次に意識無意識、成文口承の別なく苟くも伝統せる各種の記憶から成り立

つ歴史的経験の記録を検し、第三にこの記憶の光明に照らして人生目的達成の方途を發見せむために、各種の問題を提示しようとするのである。

こうした研究を進めてゆけば、自然、国家経綸の奥義の、今は世に廃れたる条々をも尋ね、古来一切の政治学体系がその抛り処とした各公理をも究むることとならう。健康体の人に医者が必要無きと同じく、文明の盛なるに当っては、その文学にも哲学にも、我らが共同団結して營なむ国家生活の目的や根本原理に関し何らの論述も行なはれて居らぬことは怪しむに足らぬ。上代文化がその比類なき栄えを見ることは、一にかかる第一原理の討究を必要とせざるに基づくのである。と云ふわけは、かかる必要は、この健康が失なはれ、分裂崩壞の意識せらるるに及んで始めて生じ来るものであるからである。健康喪失、分裂崩壞の禍はひは違和、矛盾より生ずる。即ち豊榮昇る文化の興隆と全く両立するを得ぬ凶兆にはかならぬ。文化の盛時に生ける人々は、社会機構の基づく目に見えぬ土台を涼しい顔して忘るるほどの贅沢をする余裕もある。これは、健康体の人なら、己が食物消化の良否を意識しないで居るに等しい。だからして、そのたまたま政治学の領域に筆を進めて居るものを見ても到底、近代民主政治の社会的疾患に根本的の剖

檢を加へる力ありとは思はれない。イギリス文学には、政治学の研究者の助けとなるやうなものは実に寥寥たるものである。といふのは、過去二世紀に亘る著述家も政治家も実に驚き入つたる浅薄皮相の見解に終始し來つて居るからである。これに反し、大陸各國の思想家らは、ピューリタニズムなるものが、文明の道徳及び知識上の本拠を攻略した後、遂に一切の社会原理を根こそぎに廃滅せしめ、今や白色人種の精神性格のみならず、進んでその肉体構造をまで根底から破壊し尽さむとして居る現実に対し、過去二世代の間に愕然と驚き目醒めしめられて居る。その結果、哲学者は事物の根原に眼を注ぐに至り、歐洲大陸全土に貴族主義の思潮澎湃として復活し來つた結果、政治の真意義を探らむとする努力がなされて來た。かうした最初の努力は勿論未だ極めて幼稚なものであつて、ドイツに於いては当らずと雖も遠からざる辺にまで踏み込みながら哲学者はその眞の解明をつかみ得なかつたやうに見える。例へば、彼らは政治の核心的因子としての「人種」を模索しつつ、しかも歴史的の記憶と将来への志向の關係を見逃したために、明晰にその思想を表現することが出来なかつた。願くはイギリス人の思想は、よし例の如く鈍重なりとしても、結局に於いてこのドイツの場合にまさつて一層明澄たり得むこ

とを。

イギリス人の政治哲学のためには、先づおよそいかなる社会の康寧も存続もこれを必須の根本条件とするもろもろの隠されたる原理を探究せねばならぬ。しかもこれら隠された諸原理は西洋の各国が完全にこれを取り失つてしまひ、一としてこれを保ち伝へて居るものは無いのであるから、先づ第一にこれら諸原理が何ものであるかを適確に見出す必要がある。人種の原理は人間の本能と志向の中に含蓄されて居る。だからそれは単に起原をのみ探究しても発見は出来ぬ。起原はそれ自身志向を前提としてこれに依存し、これによって説明を受けるのである。歴史を解く鍵を発見するためには是非ともこの起原と志向と両者を共に探究せねばならない。

私有財産の原理に関しては、メイトランドの研究によって封建制成立の動機は発見せられたものの、これが地方行政に適用された場合に於ける私有財産制の意義はまだ充分に説明されたとは言へない。

組織の原理と経済の原理は容易に見出し得られるが、ただ後者は今日までのところ説述が困難である。ミルナ卿の歿後に発表されたその遺稿に、イギリスの金権者階級が非

愛国的であり、生産勤労者階級の経済的利益に敵対することを率直に述べられていたので、国家経済の探究に当り本書に記載されてあるやうな各種の主張を公然と、偉大なる名声を後ろ楯と仰いで提唱することが始めて可能となった。

以上の諸件を吟味することは即ち吾らが見祖たちのひらき置かれたる道をたどることであつて、漂蕩してとどまる處を知らぬ一時的流行の流砂をたがやすことを放下し、際涯なき人類経験の富を取つて以て吾が有となし、且つこれを活かし用ゐて、以て先人の勝ち得し勝利の数々を更に押し進むことを意味するのである。

(昭和五十三年『人生随順』九十八号所載)

第十一章 『雲上の声』—A VOICE OUT OF

THE SERENE—

(斎藤秀三郎先生英訳・明治天皇御製集)

『雲上の声』（齋藤秀三郎先生英訳・明治天皇御製集）

恩師齋藤秀三郎先生御歿後半百年を記念して今回復刻限定五百部の出版を見た本書は、師が平素より心服渴仰やまざりし明治天皇の崩御にあひ奉り、哀慕追悼の至情を傾け、日頃の潜心研鑽に成る英語力を駆使して、世に伝へられたる御製百三十四首を謹選英訳し、大行天皇の大御霊の大前につつしみかしくみささげまつられたものである。原版の刊行は実に崩御後三ヶ月の大正元年十月のことであった。明治の大御代に生を享けて英語に生涯を献げられた師の、臣子としての赤心の現しき発露にはかならぬのである。

この英訳の形式の上から見た第一の特徴は「韻文訳」であるといふことである。おほよその英訳和歌は英詩作法 (Prosody) によらざる散文式逐語訳 (Metaphrase) の域を脱せぬものであるが、本書の英訳御製は一つ一つが英語の定形詩として金玉のひびきを伝へて居る。ここに採択せられた詩形は英詩の古い伝統に立つものであって、弱強四脚律と弱強三脚律とが交互に詩行を組合せ、四行が一連となつて偶々数行が押韻するとこ

るの所謂「古歌謡調」(Ballad-metre)である。これは中世イギリスの吟遊詩人たちがロビン・フッドの如き俗間の英雄伝説を物語詩として歌った詩形であって、例へば「真説ロビン・フッド物語」(A True Tale of Robin Hood)の語り出しの一節——

It is a tale of Robin Hood,

Which i to you will tell;

Which, being rightly understood,

I know will please you well.

とある。そしてこの詩形は十八世紀末から十九世紀にかけてのイギリス浪漫派の再興(Romantic Revival)の詩人たちが好んで用ゐた手法でもあった。例へばスコットランドの国民詩人として永く同国人の等しく親愛してやまぬロバート・バーンズが最初の死の予感に接して心から神に祈った一篇「死を予感して献ぐる祈」(A Prayer in the Prospect of Death)の如き——

Thou know'st that Thou hast formed me,

With passions wild and strong,

And list'ning to their witching voice

Has often led me wrong.

或はウィリアム・ワーズワースと並んでイギリス浪漫派の旗頭であつたサミュエル・テイラー・ユウルリッヂの名篇「老水夫の唄」(The Rime of the Ancient Mariner)の有名の一節——

The fair breeze blew, the white foam flew,

The furrow followed free;

We were the first that ever burst

Into that silent sea.

の如きである。また同じこの詩形を使って、シェークスピアに次ぐイギリスの大詩人、「失樂園」(Paradise Lost)の作者ジョン・ミルトンも旧約聖書の「詩篇」(Psalms)第八十一篇を次の如き書出して英訳して居る——

To God our strength sing loud and clear;

Sing loud to God our King;

To Jacob's God, that all may hear,

Loud acclamations ring.

と。以てこの詩形が、力強い簡素なる俗調から発して、イギリス歴世の詩人たちの彫琢を経て典雅莊重の幽趣を加へ、聖歌の英訳にも堪へるものであつて、師がこの詩形を特に選びとつて明治天皇の御製の英訳をこころみられたことは最もそのいはれありと言はねばなるまい。いま「雲上の声」の劈頭の一首——

とこしへに民やすかれといのるなるわが世をまもれ伊勢のおほかみの師の英訳をよめば——

Long may my folk rejoice in peace!

Watch o'er the sacred land,

Thou mighty Goddess of the Shrine

That stands on Ise's strand!

とある。正にシルトンの旧約詩篇の英訳にも匹敵すべき英詩としてのしらべをそこに耳に聞くのである。

更に御製の選択と配列にも深い配慮の跡が見られる。先づ前掲の皇祖神への「としへに民安かれ」の祈を劈頭に、「千よろづの民よ心をあはせつつ」と億兆一心を願はれ、「上つ代の御代のおきてをたがへじ」と千古一貫の皇道を示し給ひ、「誠ひとつ」をかかげて「しきしまの道」の現実をかへりみ、「ほどほどに身を尽す」ただしき「人のつとめ」を諭させ給ひ、「よきをとりあしきをすてて」「とつ国の草木の苗も」おほしたて「とつ国におとらぬくに」たらしめむ批判撰取の大御心を明かさせ給ふのである。かくして第四十八首目――

罪あらば朕を罪せよあまつ神民はわが身の生みし子なれば

といふ現在の「御集」には見当らぬながら、明治時代広く俗間に御製として伝えられ、又さう信ぜられて来た大御心の畏き秘奥の開頭を中心として、「よものうみみなはらから」の御祈も空しく虎狼習ひとなす国際間の荒波に国運を賭す大役に巻込まれてもなほ「国のためあなす仇はくたくとも」いつくしみを忘るなと令し給ひ、「国のためたふれし人」「国のためいたでおひたる人」への万斛の涙と共に自ら筆をふるってその名を録し、その功を「語りつたへ」て不朽ならしめむことを命じ給ふのである。かくして

「いさがある人を教の親にして」皇国の興廢の将来を担ふべき至重至大の次代国民の教育に当らしめむとの深き御軫念の一首を以て結ばれて居る。総数百三十四首、聖徳の神髓をよく伝ふるものと言へよう。師自らはその訳者序 (Preface) に「大海に比すべき御製の只の一滴——ほんの只の一滴」と痛嘆して居るのではあるが。

そしてこの結びの一首を受けて、先帝の「みあとしたひて」自刃せられし乃木大将夫妻の辞世二首の英訳を附録して君臣水魚の証しとして居られるのであるが、それはまた師自身の先帝に対し奉る哀慕渴仰、至誠尽忠の精神の表現であり、この『雲上の声』全巻訳業の根本動機の告白であったと見られるのである。(昭和五十二年四月十四日)

第十二章

「靈魂の系図」について

(カーライルを中心として)



1848年のトマス・カーライル (53歳)

「靈魂の系図」について（カーライルを中心に）

（一）序

維新の功臣・明治新政府の外務卿として、よく極東の小島国日本の名を、世界列強の間に重からしめ、所謂征韓論破れし後は、聖帝の左右に、侍講として奉事し、元田永孚と並んで、その聖徳の玉成に、畢生の忠悃をかたむけた副島種臣（一八二八—一九〇五）は、その「皇帝陛下巡狩中所得詩序」（『蒼海全集』卷六）の中で「人間の原則は再生を以て本と為す。……伊尹と周公と同系、孔子と伯夷と同系。けだし、黄帝の分魂、是れ、伊と為り周と為るなり。帝顓頊の分魂、夷と為り孔と為るなり。……是れ、靈魂の系図なり。姓氏録、高皇靈タカミムスヒの後に載する者は、肉体の系図なり。神皇靈カムヤマトと書する者は、いはゆる、靈魂の系図なり。披いて之れを閲すれば、一目瞭然たり（原漢文）」

と言ひ「臣は、則ち、文王の裔」と、自己の「靈魂の系図」をさへ、はっきりと断言して居る。

「肉体の系図」は、父子相続のものであつて、必ず、時間と空間の制約の下にあるのであるが、「靈魂の系図」は、時空にかかはらず、時代を超え国境を絶し古今東西にわたつて、自在無碍である。ここに、民俗の伝承として「再生」の説話が生まれる。

古くは、聖徳太子（五七四〜六二二）が、救世菩薩の再来と信ぜられ、百濟ペクから来朝した異人日羅も、「敬礼救世觀世音、伝灯東方粟散王」と唱へて、太子を拝し、更に年を経、百濟の使者として来朝した王子阿佐も「敬礼救世觀世音菩薩、妙教流通東方日本国、四十九歳伝灯演説」と言つて、太子を拝したと、藤原兼輔の「聖徳太子伝曆」等に録せられて俗間に永く伝承せられ、遙かに世を隔てた後の親鸞（一一七三〜一二六二）も、この伝説をふまへて、

「救世觀音大菩薩、聖徳皇と示現して、多々のごとくすてずして、阿摩のごとくにそひたまふ」

と、その「正像末和讃」の中に「和国の教主聖徳皇」奉讃十一首を残して居る。これら

は宗教的信仰の告白とも言ひ得るであらう。

しかし、推古天皇十七年、吳国より肥州沿岸に漂着して、そのまま在留し、聖徳太子に奉仕した百濟の僧道欣ら十人の者は、「太子が前世に唐土キョウソ衡山の般若寺に思禪法師として法華經講説の砌、自分らは盧岳の道士として時時参聴した者共である」と称したが、これは正しく「再生」の説話である。

更に、若き聖徳太子に道の師として奉事した高麗の僧慧慈は、帰国後八年、太子の薨去を伝へ聞いて大いに悲しみ、

「日本国に聖人有り、上宮豊聰耳皇子（カミツミヤノトヨトミミノミコ）と曰ふ。：三寶を恭敬し、黎元（オホムタカラ）の厄を救ひたまふ。是れ実に太聖なり。今、太子既に薨ず。我れ、国を異にすと雖も、心は断金に在り。われ独り生けりとも何の益か有らむ。我れ、来年二月五日を以て必ず死せむ。因りて以て上宮太子に浄土に遇ひ奉って、以て共に衆生を化さむ」（原漢文、『日本書紀』卷廿二）

と誓願して、満一年をへだてて、太子薨去の同月同日に没したと伝へられて居る。これは「再生」説話の精神的基盤をなす「靈魂の系図」を物語るものであって、われらは

此処に言はれて居る「国を異にすと雖も、心は断金に在り」といふ慧慈の一句を特に記憶しよう。

中世・鎌倉時代に降って、明治の和歌改革者正岡子規が「人丸ののちの歌よみは誰かあらん征夷大將軍みなもとの実朝」「こころみに君の御歌を吟ずれば堪へずや鬼の泣く声聞こゆ」と歌って、万葉以後の唯一人と、その歌を推称した將軍実朝（一一九二―一二一九）についても、鎌倉幕府の記録『吾妻鏡』の伝ふるところに由れば、建保四年夏、東大寺大仏再建の功勞者・宋人陳和卿が「当將軍家に於いては、權化の再誕なり、恩顔を拜せむが爲めに参上を企つる」旨を申立てて、鎌倉に参着、六月十五日、実朝に對面、三反奉拜、頗ぶる涕泣して、

「和卿申し云く、貴客は、昔、宋朝医王山の長老、時に吾れ其の門弟に列すと云々。此の事、去ぬる建曆元年六月三日丑剋に、將軍家御寢の際に、高僧一人御夢中に入つて、此の趣を告げ奉る。而して御夢想の事、敢へて以て御詞に出されざるの処、六ヶ年及び、忽ち以て和卿が申状に符合。仍つて御信仰の外他事無しと云々」（原変体漢文）といふことになつて、実朝は側近諸人の反對を押切つて、渡宋の志を立て、そのため

の造船を和卿に命じたのであった。

実朝は、勿論「肉体の系図」から言へば、頼朝と政子の子であるが、その歌集『金槐集』の数々の絶唱に示されて居る、悲劇的人生觀に裏付けらるる至純の詩魂は、決して、幕政六百年の創始者・頼朝や、北条氏一族専制のために威を振った尼將軍・政子とは、異なつた「靈魂の系図」に属するものであることは明白であり、実朝の渡宋の企てと、これにまつはる「再生」の説話とは、その一証左と言ふことが出来よう。

十九世紀の西歐にあって「コンコルド (Concord) の哲」エマソン (Emerson) と並んで、「チェルシ (Chelsea) の賢」と称せられ、当時英米の思想界が、その一世を風動せしむる預言者的風格を等しく仰いだ、輝ける大いなる双つの星 トマス・カーライル (Thomas Carlyle) (一七九五〜一八八一) は、その単行本として世に送つた最初の文芸作品・ゲーテの『ウイルヘルム・マイスター』の英訳 (一八二四年刊) に添へたゲーテ論の中に、ゲーテの各作品を紹介批評するうち、その史劇の一つ『ゲッツ・フォン・ベリヒンゲン *Goetz von Berlichingen*』にこゝで、

「ドイツ国そのものにあつて、ゲッツは、現在においてこそ、ただひとり、後嗣ぎも

なく、孤影悄然たるものがあるが、当時にあつては、無数の騎士道劇や封建時代の物語、さては詩的・好古的作品の数々を生みいだす母胎となつたのであつて、たとへそれらは既に早くこの世から消え去り忘れ去られてしまつたとはいへ、当時の世には、随分騒がれもし持てはやされもしたのである。

一方、わがイギリス国においては、ゲッツの影響は、恐らく更に一層顕著なるものがあつて、それが今日にまで及んで居る。サー・ウォルター・スコット、(Sir Walter Scott)の文学方面における最初の事業は『ゲッツ・フォン・ベルリヒンゲン *Götz von Berlichingen*』の英訳であつたのであり、もし仮りに、天才といふものが、知識教育同様に伝達可能のものであつたとすれば、ゲーテのこの作品こそ、スコットの名作 *Marmion* や *Lady of the Lake* の如き史詩、及び、これに続く幾多の歴史小説一切の創作の、生みの親とも呼ぶことが出来るであらう。

まことに、最適の地に落ちた一粒の種子であつた！ それは、他のどの樹木にも立ちまさつて、確固として麗はしく、とまでは行かずとも、一層だけ高く、また幅広く生ひ立つたのである。そして現在もなほ、年ごとに、全世界の諸国民が、ひとしくこぞつて、

その果実を收穫しつつあるのである」

と言つて、ゲーテのゲッツにさかのぼる、スコットの諸篇の「spiritual genealogies（精神的系譜）」を指摘して居る。事実、スコットは、ドイツ国に渡つて親しくゲーテを往訪したい志願を抱いて居たが、たまたま、ゲーテの死によつて、その願ひは果されずに終つたのである。まことに「国を異にすと雖も、心は断金に在り」といふ慧慈法師の詞を想ひ起さずには居られない。

以下、副島種臣の「靈魂の系図」と、トマス・カーライルの spiritual genealogies と、両語の意味するところに導かれて、西欧諸国の思想交流を、カーライルを中心として、少しく検索し、それら諸家の、明治以来わが国における受容の在り方と、その受容を可能ならしめた我が民族の伝統的思想的性格とに触れつつ、世界史上「日本の世紀」と呼ばるる現在及び未来において、確立せる「世界文化単位」としての我が国の果すべき、人道的使命を考へて見ようとするのである。

(I) ゲーテ (Goethe) とカーライル (Carlyle)

スコットの、文学者としての出発が、ゲーテの『ゲッツ・フォン・ベルリヒンゲン Götz von Berlichingen』の英訳（一七九九刊）であつたやうに、カーライルもまた、思想家としての第一歩を、ゲーテの『ウイルヘルム・マイスター Wilhelm Meister』の英訳から出発した。この両著の間、約二十五年のへだたりがあるが、カーライルの出生が一七九五年であるから、スコットが二十八歳にしてゲーテの詩的・戯曲的活動の流れに棹さしたに對して、カーライルは二十九歳にしてその思想的・哲學的精神に生涯の指針を仰いだのである。

ゲーテとカーライルと、両者の關係を最も端的に示して居るのは、一八二四年から一八三一年に至る約八年間に両者の間に交換された四十通ほどの往復書翰であつて、それらは、チャールス・エリオット・ノートン (Charles Eliot Norton) の編集した『ゲーテとカーライルの文通 (Correspondence between Goethe and Carlyle)』（一八八七年刊）に見ることが出来る。その最初のものは、カーライルがゲーテ宛にロンドンから發した、

一八二四年六月二四日附のものであって、この時、カーライルは二十九歳の青年であり、ゲーテは既に七十五歳の老境に達して居た。

この書簡は、同年エヂンバラから三冊物として発行された『ウイルヘルム・マイスターの修業時代 *Wilhelm Meisters Lehrjahre*』の英訳本に添へて、訳者のカーライルが原著者のゲーテに送ったものであるが、その中でカーライルは言つて居る――

「高著の此の不完全な写しなどは、とても御一読の榮に浴し得るものとは存じませぬが、私が渴仰してやまぬ知性と心情との持主で居られる貴下の御生涯と、私の生涯の幾らかの部分とが、かかはりを持ったと考へますだけでも、うれしいのでございます。四年前、私の生れ故郷のスコットランドの山の中で、高著ファウストを読んで、いつかは親しくお目にかかり、胸中万斛の苦惱と、千^ち千湧く疑惑憂悶の思ひとを、あたかも父の御前におけるがごとく、願はくは、貴下の御前に告白吐露し得む日のあれかしと、ひそかに私は空想いたしました。それほどに隈もなく、わが胸の底ひの思ひを悟り知り尽して居らるるかに思はれ、又それほど美しく、それらの思ひを表現し尽す力を持つて居られました。はじめて高著に接して以来、私の文学聖徒名簿からは、幾多の聖徒名が消

されて行きましたが、貴下のお名前のみは、なほそこに、その輝やきをいや増して居るのでございます」

と。これに対し、ゲーテは、感謝の返書を送り、同時に、カーライルの妻ジェーン・ウエルシ (Jane Welsh) に頸飾りの贈物をした。この老文豪の心の籠った応答に対し、若きカーライル夫妻が、いかに感激したかは、容易に想像し得られるところであって、約八年の後、ゲーテの没後、一八三三年八月二六日、エマソンが、遙るばる大西洋を越えて、カーライル夫妻をケレイゲンバトック (Craigenputtock) に訪れた時にも、ウエルシ夫人は、このゲーテの最初の贈物を頸にかけて、「これが来た時は、躍り上るばかりに嬉しかったが、その後も、いろいろのものを沢山贈って頂いた」とエマソンに語ったことが、エマソンの当日の日記に記されて居る。

そして、一八二七年四月一五日、エチンバラからの、カーライルの第二信には――

「私にとって、貴下のお手紙と御贈物とは、実に、まだ直接お会ひしたことは無けれども、そのお声は遠く海を越えて、私が絶望の深淵にのたうちまはって居た時に温かい忠言と助力とをお与へ下さった、そのお声の主の、有りがたいお形見なのでございます。

と申しますわけは、もし私が、黒闇から救はれて、些かでも光明に浴する身となつたと致しますれば、又もし私が、自分自身と自分の責務と、並びに自分の進路とについて、些かたりとも知るところありと致しますれば、それは正に、他のいかなる事情によるよりも、数ある貴下の御著作を研鑽致しましたお蔭なのでございます。貴下こそ、他の如何なる人にもまして、当然、私が、師匠を仰ぐ弟子の思ひを以て、否、たましひの父を慕うてやまぬ子の心を以て、いつもいつも感謝し尊敬せねばならぬ善知識におはしますのです。これは決して、何の役にも立たぬお世辞ではなく、眞実、心からなる眞事（マコト）でございます」

と極言し、ゲーテを「(たましひの父) spiritual Father」とまで呼んで居る。実に、カールライルは、その精神的自伝『(仕立て直された仕立屋) Sartor Resartus』の中で「(永続なる肯定) Everlasting Yes」の光明世界への転回に当り、その「たましひの父」ゲーテの開導に触れて、ここに彼の生涯を貫く思想的基盤が形成せられたことは、疑ひを容れない。

そして、この交情は、ゲーテが一八三二年この世を去るに至るまで、些かも変ること

はなかつた。ゲーテ死没の前年、一八三一年の六月一〇日にスコットランドの旧居クレイゲンパトックからのカーライルの書信には、ゲーテ八十二歳の誕辰を祝して、十五人の同志——その中には、ワーズワース、サウズイ、プロクター等の詩人、文人の名も見られる——連署して、賀詞を呈したことが記されて居る——

「……この私共の静かな、人跡無き処に在っては、現実の世は余りにも目にふれず、従つて、それだけ記憶と空想とが旺盛に働いて、ワイマールは遠く隔たることなく、近く且つ親しく、いはば心のふるさとでございます。日ごと日ごと私はそこに愛情こめし祈りをささげずには居れません。日ごと日ごと私は、この生ける誰にもまして深い御恩ある、そして一つ心に生くる御方をおもひ、且つ最もしばしば口に出して言はずには居られません。と申しますわけは、このよき人にこそ私は、擾乱混沌の今の世にもなほ、敬ひ尊ぶ心は可能であり、まこと、共に凡夫として生くる人間に対して、いと高きもの眞実なる表象として、これを敬ひ尊ぶことが可能であるといふ、この何にもまして貴き知識と経験とを負ふて居るのだといふことを、私は忘れむとしても決して忘れ得ないからでございます。疑惑の闇の中にさまよひ惑へる幾多の人の心に、そのやうないのち

を与ふる光明を、貴下は、従来も運びこまれましたし、また将来もなほ運びこまれるで
 ありませう。そして遂に、幾世代の人人がことごとく、いたづらに模索し否定すること
 なく、再び信じ且つ知るを得しことを、貴下に、当然、感謝するに至るでせう。ここに
 こそ、真実、全く争ひ難き正統の宗主権が存するのであって、この主権にまつらふこと
 が私共の唯一無二の自由なのでございます。……あのロンドンの都に、ささやかながら、
 一の親独義団とも称すべき詩人の集りが形成せられつつあり、貴下がその中心となつて
 居られます。その集団の最初の公共的行動が、近く迫る貴下の誕辰を期して、ワイマー
 ルの地に顕現する筈でございます。……かかる企てが私共の間において可能となつたと
 いふ、ただそれだけの事さへも、数年前には、思ひもよらぬ不思議な事であつたでせう。
 そして、これは、貴下が予てより『世界文学』と名付けて来られたものが、さほど遠く
 ないかも知れない、といふことの多くの証拠の一つとなりませう。……」

これに対して、ゲーテは(十五人のイギリスの友らに)『Den Fünfzehn Engli-
 schen Freunden』と題する、次の詩を贈った——

「詩人の語る言葉は、

故国の国内にあつてこそ

まことに且つ速く働けども、

彼は知らず、遙かなる国にては

働くや否やを。

ブリトンよ！ 君らはよくぞ擱んだ！

『心は鋭く！ 行ひは控え目に。』

弛まず努めよ、急ぐことなく』

かくて君らはその証しされむを欲するのだ」

“Worte die der Dichter spricht,

Treu in heimischen Bezirken,

Wirken gleich, doch weis er nicht

Ob sie in die Ferne wirken.

Britten ! habt sie aufgefasst !

“Thätigen Sinn ! das Thun gezügelt ;

Stetig Streben, ohne Hast,

Und so wollt Ihr es besiegelt.”

この詩は、一八三一年八月一九日にワイマールから發送されたが、同じ八月一三日のロンドンからのカーライルの書信には――

「私たちの最後の二通の手紙は、ロッテルダム辺りで、互ひに行違つたに違ひありません。……私共のことを想ひ起して下さつて、深謝申しあげます。未だ曾つて、これほど嬉しく、書信を手にしたことはありません。お手紙は、和やかな夏の夕暮に、到着いたしました。そして、それ自身、まさに夏の宵のごとく、和やかで清らかで、やさしい日の光と、すでに永遠の曙のかがやきが、照りとほつて居りました！ 限りなき感謝を、私は貴下に負うて居ります。と申しますわけは、貴下によつてこそ、私は、同胞としての人間にとって、どれほどの価値が人間に在るものかを、学び得たからでございます。

また、いはゆる『(公開の秘密) open secret』は、よしや大多数の者の眼には見えませんが、眼ある者には、依然、公開されて居るといふことを、学び得たからでございます。……スコットランドの荒野に帰りましたら、またお便り申しあげます。それまでのところ、私と吾妹とが貴下を思ひ、貴下を愛して居るものと覚し召し下さい。特にあの二十八日のお誕生日には、愛する心の感じ得る限りの熱き祈りをささげて居りますものと、覚し召し下さいませ。」

と、終始一貫、変ること無き感謝と愛敬の限りを告白して居る。まことに「国を異にすと雖も、心は断金に在り」と言ふべき、美しきたましひの結び、交はりと言はねばなるまい。

(三) マツチーニとカーライル

イタリアが、統一し独立した近代国家となったのは、極めて新しいことであつて、それは、わが明治維新に先立つこと僅かに八年の事であつた。それまでの国情について、黒田正利氏は、その『イタリア研究』(昭和十八年刊)に収められてある「われ祖国を求

む——イタリア愛国文学に現れたる愛国精神——」の一章の中に、次のごとく叙述して居る——

「世界に文化の道を通じたローマ、中世紀暗黒時代に信仰と希望と慈悲の光を以って世界を照らしたイタリア、そして『文化の母』と敬慕されて世界の新文化を育くんで来た文芸復興のイタリアが、何うであらう、国家としては、地方的コムーネに分散割拠し、外蛮の侵入に震盪され、イスパニアの支配権の前に膝を屈したばかりか、イタリアは、国民的良心さへも売ったことがあった。アウストリアの苛酷なる答の下に喘ぎ、フランスの命令に従ったばかりか、イタリア人に何等関係の無い戦争のために国民の聖血を徒らに捨てなくてはならなかった。……かつてメッテルニヒがイタリアを評して『イタリアとは地理的名称に過ぎない』と放言したことは、今日のイタリアに取っては、無論、不合理極まる失言である。しかし、当時よくこれを反撥し得た事実と人物と良心があったであらうか。クローチェ氏が『イタリア史は実に一八六〇年、即ち、イタリア国家独立の年を以って始まる』と言つてゐるのも、半面の真理を表はしてゐる。充足せる国家的行動は、イタリアの再起——リソルジメント——からであるといふべきであらう」

と。このイタリアの再起——リソルジメント——の中心、近代イタリアの統一と独立の政治的運動に挺身すると共に、その精神的指導者となった者が、ジオセッペ・マツチーニ（一八〇五—一八七二）である。彼は、十六歳の少年として、その生地ゼノヴァの街において、ピエモンテの蜂起に敗れたイタリアの亡命者の姿に接し「自己の魂に愕然と直面」して「祖国の自由のために考へ、またそのために戦はねばならぬ」と決意し、愛国的秘密結社カルボナリ党の一員となってより、その全身心の精力を、祖国イタリアの統一と独立の一途に献げつくした。彼は、その代表的著作「人間の義務について」の第一章「イタリア労働者に告ぐ」の冒頭に——

「私は、諸君の義務について語りたい。われらの知れる限りのうち最も聖なるもの、即ち、神・人類・祖国・家庭等について、私は、己が心の命ずるままに、諸君に語りたいと思ふ。私は愛を以て諸君に語らうと思ふから、諸君も愛を以て私の言葉を聞いてもらひたい。私の言葉は、私の永年の苦悩と観察と研究とから鍛へ成された確信に発するものであり、私は、生ある限り、ここで諸君に示す義務を、力の限り果す決意である。私は間違ふかも知れぬが、それは心から出たことではなく、私は自分を欺くことはあつ

でも、諸君を欺くことは出来ない。だから、諸君は私の言ふことを友人として聞いてほしいのである」

と、語りかけて居る。この「確信」を、彼は、わが二十一回猛士のそれにも比すべき決死の勇を以て、叫び且つ実行して変ることがなかった。一八三〇年、反乱罪の廉かたを以て捕はれ、翌年、外国追放を選んでフランスに渡り「青年イタリア」党を組織したが、一年後にはフランス政府から国外退去の命を受けてスウイスに移り、或はピエモンテに蜂起を策して敗れ、或はスウイスよりイタリアへの遠征を企てて成らず、広く「青年エウロパ」党を起して、各国共和制同志と結んで策動したが、一八三六年、遂にスウイスからも追放せられ、翌年ロンドンに到着、爾来イギリスに身を寄すること十余年、この間にカーライルとの親交も成立し、一九四三年には『トマス・カーライルの全著作の真髓と傾向について』及び『カーライルのフランス革命史について』の二篇の論文を草して、カーライルの長所短所を忌憚なく論評した。この第一論の中で、彼はカーライルを評して――

「彼（カーライル）は、憂ひに満ち、沈重である。即ち、彼は早くより、現代世界を

喰ひ荒す禍悪の根源に触れ、その文筆生活の最初より、声を極め、勇敢に、これを告発した。……彼の全著作を通じ、その論ずる主題の何たるを問はず、彼は、社会問題の諸相の何れかに触れて居る。芸術は、彼にとって一の手段たるに過ぎず、その文筆家としての天職において、彼は、人民保護の使徒たる役目を果して居るのであって、この点においてこそ、われわれは、彼を判断しなければならぬ。……カーライル氏の物の見方と私自身のそれとの間には、種々の差違があることは、予め断つて置かねばならぬが、これをあげつらふに当って、先づ最初に、彼の有する、争ふべからざる長所を認めずには置かれないのである。即ち、その長所たるや、現代にあって、極めて稀れであると共に、また極めて重要なものであり、しかも、彼において、それらは、彼と異なる旗の下に立つ人々さへも尊敬と讃嘆をささげずには居られない程に卓越したものであって、まして、私自身の如く、大体において同一の側に立ち、単に採るべき手段と路筋との選択についてのみ意見を異にするに過ぎぬ者は、同情と感謝を禁じ得ないものなのである」

と言って、カーライルの長所の第一として「(まじら) sincerity」を挙げるのである。「(彼が書く言葉は、単に頭で考へて居るばかりでなく、心に実感して居るのであ

る) What he writes, he not only thinks, but feels] 「彼は、自己を欺くことはあるかもしれぬが、われわれを欺くことは有り得ない) He may deceive himself—he cannot deceive us] 「彼の動機は、共にこの世に生くる人間としての同胞愛、深く且つ積極的の義務感なのであって、彼はこれをこそ、この世に生くる人間の使命であると信じて居る) “His motive is the love of his fellow-men, a deep and active feeling of duty, for he believes this to be the mission of man upon earth」——これらの言葉は、マッチーニが、その人生觀の根本において、カーライルと共感共鳴の立場にあることの告白であつて、その(まごころ——やむにやまれぬ人間の至情) sincerity を挙げてカーライルを評するところ、カーライルが詩人バーンズを評するに、先づシンセリティを第一に挙げ「(彼は、他人からの又聞きをもととせず、自ら目に見、身に感じたところを本として書いて居る……彼は、何ら外部からの虚栄心や利己心に動かされてではなく、万感胸に溢れて黙止し得ぬが故にこそ、心のたけを言ひ出づるのである)

He does not write from hearsay, but from sight and experience; he speaks forth what is in him, not from any outward call of vanity or interest, but be-

cause his heart is too full to be silent」 と言つて居ると、全く軌を一にして居る。うべなるかな！ 一八四四年、イギリス政府がアウストリアのために、マッチーニの手簡を開封して、その内容を通報し、政府要人の口よりマッチーニの人格を傷つける誹謗の言の発せらるるや、カーライルは、決然、筆を執つてザ・タイムズ（一八四四年六月一五日）紙上に寄書し、次の如く証言した――

「私は、累年、マッチーニ氏と辱知の間がらであるが、たとへ彼の實際的洞察力と俗務処理能力とに關して私が何と思ふにしても、彼の人格に關しては、彼はまさしく天才と徳行の人であり、天真にして欺くことを知らず、人情に厚く、心高き人であり、實に、殉道の人と稱するに足る、今世稀有の人物の一人であつて、その殉道の人といふ名の意味するところのものを、黙々、日々の生活において、真摯に理解し且つ実行しつつある人之間違ひないことを、私は、すべての人々に対し、飽くまでも自由に、証言することが出来る」

と。まことに「国を異にすと雖も、心は断金に在り」といふ实例の一つを、ここにも示さるる思がする。

かくて、多くの理解者を得たマッチーニは、その失意の晩年を、一八七二年、ピサに客死して八万人の送葬者に送られて、とはの奥都城おくつぎにやすらふに至る前年まで、ロンドンで過した。その間、一八六四年には、イギリスの労働組合及びカール・マルクスら一部の社会主義者と協力して、所謂第一インタナショナルを結成したが、その組織の主動力がマルクスの手握らるるを見て、「彼はドイツ人であつて、ブルドンの如くに尖鋭な、しかし破壊的な精神の所有者であり、飽くまでも我の強い気性で、他人の勢力は我慢がならぬのだ。哲学的真理にも宗教的真理にも深信なく、彼の心には慈愛よりも憎悪がまさって居るのではないかと危ぶまれる。かなしみいつくしむ心より、人を憎みのろふ心がまさって居ることは、たとへその憎しみにその由つて来る根本があるとしても、正しいことではない」と言つて、袂を分かつたことを附記して置かう。

(四) エマソンとカーライル

ゲーテが、八十三歳を以てワイマールに没した翌年、マッチーニのロンドン亡命に先立つこと五年、一八三三年の夏八月、マッチーニより二つ年上の一アメリカ青年が、前

年十二月二十五日、新大陸の東海岸ポストン港を出帆し、遙かに海を渡って欧州を訪れ、イタリア・スウィス・フランスを経てイギリスに入り、スコットランド南部の州都ダムフライスから一六哩も離れて「荒涼たる灌木に蔽はれ四辺寂として誰一人住む者も無い」クライゲンバトックの一つ家に、わざわざ馬車を雇うてカーライルに会ひに来た。二人は、一見十年の知己の如く、一日一夜を心ゆくまでに思のたけを語りつくして袂を分かつた。このアメリカ青年は、誰あらう、これより満四年の後、一八三七年八月三十一日、ハーバード大学のフィ・ベタ・カバ会 (Phi Beta Kappa Society) の席上、「思索する人間、別名、アメリカの学者」"Man Thinking, or the American Scholar" の講演を行なつて、場外に溢れて窓の外から眼を輝やかせてのぞき込み、満堂固唾を呑む聴衆に、魂の底まで震撼した感激を与へ、アメリカの知識人をして、これこそ「アメリカ文学史上未だ比類なき出来事」(James Russell Lowell) と呼び「アメリカの思想的独立宣言」(Oliver Wendell Holmes) と叫びしめたラルフ・ワルド・オ・ヘマソン Ralph Waldo Emerson (一八〇三—一八八二) その人であった。

ヘマソンは、カーライルと初めて会ひ語つたその日の日記に「自分の一生での芽出た

い日」と呼び、カーライル夫妻の印象を「唯一人の話相手の夫人は、仲々教養も深く、愛想のよい人で、真理と平和と信仰が、この夫妻と同居して居て、どれほど彼らを美しくしてゐるか知れない。自分は、彼の顔ほど、心の優しさを現はした顔を見たことがない」と記し、カーライルもまた、この初対面のエマソンの印象を、その訪問の二日後に、自分の母親に宛てた手紙の中で「勿論、私共は、彼を歓迎するよりほかはありませんでした。殊に、彼は彼自身において、本来、私共がこれまでに対面した人々のうち、最も愛すべき人の一人と思はれましたから、尚更でした。——彼は、合衆国ボストンの出身で、名をエマソンと言ひ、そのイギリス、フランス、イタリアの遍歴から、遠路遙々当地までわざわざ私に会ふために脇路をしてくれたのです。……彼は、一晚泊つて翌日まで、私共の家に居て、心のゆくまで自分も語り、また私共の語るのを聞いてくれましたので、彼と別れるのが、本当につらく悲しい思でした」と書き送つて居る。また、ジョン・ウエルシュ夫人も、ずっと後年になつて、この日の記憶を振返つて「私は、あの日の訪問者を決して忘れることはないでせう。沙漠の中に住んで居た遠い昔、まるで、雲の中からこの地上に降りて来たかのやうに、私たちを訪れ、その一日を、私たちにとつ

て、夢に夢見る心地をさせて、さてそれが、たった一日だったことを泣きに泣く、私たちを置いて、去って行ってしまはれたのです」と書いて居る。

かくして始まったエマソンとカーライルの交情は、エマソン三十一歳、カーライル三十九歳の、無名の青年時代より、カーライルが八十五歳、エマソンが七十九歳の寿を保って、中一年をへだてて相ついで没した、盛名赫々たる老年時代まで、毫も変るところなく、継続した。その間、両者の間に交換された、一八三四年から一八七二年に至る三十有九年に亘る百七十三通の往復書簡がチャールズ・エリオット・ノオトン Charles Eliot Norton の手によって『トマス・カーライルとラルフ・ワルドオ・エマソンの往復書簡 *The Correspondence of Thomas Carlyle and Ralph Waldo Emerson*』上下二巻の書に編まれて居る。以下、少しく、その内容をのぞいて見よう。

エマソンは、その最初の欧州旅行から、一八八三年一〇月九日、ニューヨーク上陸、帰米したが、翌一八三四年五月一四日附、カーライルに宛てて、ボストンから、その最初の手紙を送った。その中に曰く——

「恐らく二年前のことであつたと思ふが、どうした名声の風の吹きまはしか、君の名

が、一連の論文の著者として、僕のもとに吹き送られて来た。そして、それらの論文こそ、イギリスの新聞雑誌界に現はれる大量の評論中であって、抜きんじて遙かに当代第一の、独創的且つ深淵なる立言と、僕は夙に見破って居た（また実際、それは極めて容易に出来ることだったのだが）——即ち、これら一連の作品の著者は、学者であると同時に、信仰の人であり、学問的であると共に、敢へて風狂に遊ぶを辞せず、あの、絶望し嘲笑する哲人たちの仲間になら、しかも、敢へて希望を捨てず、誠心誠意、衷情を吐露することを恥ぢぬ人物であることを見破って居た。……だからして、僕は、訪欧の途次、君の家へ行つたのだ、ただ『氣を落すな。君の立言は、よし、地球の果てではあつても、また、最も世に知られぬ無名の人々にはあつても、確かにこれを聞いて居る人があるのだ。それは、必ず生きて働らき、世を動かすものなのだ』と告げるために。わが恩師たちの一人に対する強い敬意に引かれて、僕は、その人を親しくこの目で見、彼が言ふであらうところの、彼のクライゲンバトック Craigenputtock における『環境』に親しく接するために、僕は出かけて行つたのだ」

と。エマソンは、十歳年上であつたカーライルに対して「わが恩師たちの一人」one

of my teachers」と呼び (強、敬意) strong regard を以て兄事して居ることがわかる。

この書簡に対するカーライルの返書は、同じ一八三四年の八月一二日附、ロンドン市チェルシの寓居からの発信となつて居る。その中に曰く――

「二週間ほど前に、僕は、君の有りがたい贈物を、フレイザーから受取りました。嬉しいと言つただけでは、仲々ことばが足りません。それは、遙かに万里の波濤を越えて、新大陸全体の実在を、――そして、僕もまた、その新大陸に、果すべき役割と宿命を有するものだといふことを――はじめて、はつきりと、私のために告げ知らせてくれる、愛情に溢れた知音の声ではありませんか! 『ここかしこに、自分たちを思ひ、自分たちを愛してくれて居る人が居るのだと、思ふことが出来るとき、その時はじめて、味気なき、この現し世も、賑はしき、楽しき花園と化するのだ』ニスデイル Nithsdale の僕らの庵^{いほ}りを訪れてくれたと、僕が想起し得る人々の姿の中で、――それらは、皆、今では、この世のものとも思はれず、或は天国からの妙音を伝へ、或は地獄の業風をもたらす、幽界の使者さながらと思はれますが――恐らくは、君ほどに、疑ひもなく天界から

舞ひ降りて来たもののやうに思はれたものは、一人もないのです。それほどに清らかで、それほどに静かで、それほどに温かい慈愛心に満ち溢れて居ました。しかも、やがて、幽界の使者の当然の姿として、あのやうに、余りにも忽ちに、紺碧の虚空の中に消え失せてしまったのです！ 僕のメモ帳の中の、君の住所氏名を見るたびに、僕は、慕はしく懐かしい思に堪へません。この、無限の宇宙の中であって、そこになほ、君が僕を固守して居てくれるのだと知って、僕が喜ぶかどうか、思っても見て下さい。……君は、トイフェルスドロック *Teufelsdröckh* が有りがたいと、僕に礼を言う。僕こそ、君が、余り大げさ過ぎると思ふが、まごころから、偽りならず、あの著書を認知して下さったことに対し、君にお礼を言はなければならんだ！ 冷遇と愚鈍と反対論のただ中にあって（天晴れ）！ *Euge* と、われらに宣言してくれる声は、有りがたきかな！」

と。カーライル一流の、熱情ほとばしる筆致を以て、知己に対する感激と感謝を綴つて居る。

エマソンが二度目に欧州を訪れ、今度は各地を講演して回り、カーライルとも行を共にしたのが、一八四七年、その翌年を境にして、二人の間の交信は、それまで、少なく

とも年五通か六通、多い時は十数通に上ったものが、それ以後は、一八七〇年度の十通を除き、例年、二三通に減少し、エマソンの三度目の、そして最後の渡欧を見た一八七二年以後は、全く音信が途絶えた。しかし、両者相互の信頼は変わらず、一八五〇年七月一九日のカーライルからの手紙に「まる一年、音沙汰なし……よい折のあり次第、お便りを下さい。そして、この世の中に、まだ、断金の心の友が生きて居ると、知らせて下さい」と言ひ、一八五四年の、同じくカーライルからの書簡にも「随分永い間、音沙汰なしの挙句、やっとまた、君からの一言！……これまで度々言つて来たことが、本来、僕にとって完全に人間的であり、且つ僕の言ふことを全部、充分に理解し、そして、明瞭な同情と直覚を以て、僕に答へてくれる声は、この世に唯一つ、君の声を措いて、ほかには断じて無いのだ、といふことは、今も変わらず、真実であり、将来も変わらず、その通りであるだらう」と書いて居る。

エマソンもまた、その死の直前「その書齋にあって、思想の連絡も、しばしば途切れ、日常見慣れた物にも判断と識別が困難であったが、しかし、たまたま、壁上に掲げありしカーライルの肖像に目がとまった時、にっこりと、愛情溢るる笑みを浮かべて「あれ

こそ、その人だ。私の、無二の人なのだ」と洩らした、と伝へられて居る。

ああ「国を異にすと雖も、心は断金に在り」の一句、よく、この相慕うてやまなかつた二個の魂の関係を、要約し得るものと言へよう。

(五) むすび

『万葉集』巻五に、上代における思想戦の一例として有名なる、山上憶良の「令反感情歌」一首並びに序が載って居る。その歌のはじめに――

「父母乎。美礼婆多布斗斯。妻子美礼婆。米具斯宇都久志。余能奈迦波。加久叙許等合理。母智騰利乃。可良波志母与。由久弊斯良祢婆」(ちちははを見れば尊とし。めこ見れば恵し愛くし。世の中はかくぞことわり。もち鳥のかからはしもよ。行方知らねば)とあるが、この人情の自然に随順するのが、日本古来の国風なのである。同じ『万葉集』巻十八にも、大伴家持の「教諭史生尾張少咋歌」一首並びに短歌四首があつて、その初めにも――

「於保奈牟知。須久奈比古奈野。神代欲里。伊比都芸家良之。父母乎。見波多布刀久。

妻子見波。可奈之久米具之。宇都世美能。余乃許等和利止。可久佐末尔。伊比家流物能乎
(大己貴おほなむち、少彦名すくなひこなの神代より言継げけらし。父母を見れば尊く、妻子見れば愛しくめぐし。うつせみの世のことわりと、かくさまに言ひけるものを)

とあつて、これは、神代の昔よりの我が民族的伝統として、言ひ伝へられて来たことがわかる。憶良も家持も、この伝統的国風をまもり、思想と生活の乱れを正さうとして、筆を執つたのである。

この神ながらなる民族心は、やがて、大陸文化の伝来に対しても、批判的摂取の作用を示して、儒教の数ある經典の中にも『孝経』を「群経の宗」として選択した。即ち、奈良時代、孝謙天皇の天平宝字元年四月四日の詔に――

「古者、治民安国、必以孝理。百行之本、莫先於茲。宜令天下、家藏孝経一本、精勤誦習、倍加教授」(いにしへ、民を治め国を安んずるに、必ず孝を以てをさむ。百行の本、これより先なるは莫し。宜しく天下をして、家ごとに孝経一本を蔵し、精勤誦習、ますます教授を加へしむべし)

と言ひ、また、平安時代、清和天皇の貞観二年一〇月一六日の制にも――

「哲王之訓、以孝為基。夫子之言、窮性尽理。即知、一卷孝経、十八篇章、六籍之根源、百王之模範也」(哲王のをしへは、孝を以て基となす。夫子の言は、性を窮め理を尽す。即ち知る、一卷の孝経、十八篇章は、六籍の根源、百王之模範なることを)

とあって、淳和天皇以後、今日に至るまで、千有余年、わが東宮の御講書は、必ず『孝経』より始むる習はしとなり、以て「天朝の御学風」が、神代以来のわが民族的伝統の上に確固として継承されて居ることを示して居る。

民間にあつても、鎌倉將軍の書を講ずるや、また『孝経』より始むる習はしであつたことが『吾妻鏡』の記事に見られ、江戸時代に及んでも、仕へを辞して一生を「吠畝之一匹夫」として終へた、中江藤樹の如き、永く後世に「近江聖人」の名をとどめたが、その著『翁問答』に「五倫の道、孝行の条目にして、孝は人極の第一義」と説き「畢竟、五経皆孝行のをしへなるを知るべし」と訓へて居る。更に曰く――

「文字を目に見覚ゆる事はならざれども、聖人の本意をよく得心して、わが心の鏡とするを、心にて心を読むと申し候て、真実の読書なり。心の会得なく、只目にて文字を見覚ゆるばかりなるをば、眼にて文字をよむと申して、真実の読書にはあらず。我まな

こにて書物をよむ事ならざれども、聖經賢伝をふかく信仰して、読み覚えたる人に講釈させ、その本意をよく得心して、我心もち身の行ひの鏡とする故、俗学の書物をよみ申すより、一きは勝りたる書物よみにて候へば、賤男賤女も、書物を読まずして読むにて候。今時はやる俗学は、書物を読みて読まざるにて候」

と。かくて「天朝の御学風」は、目に一丁字なき賤の男、賤の女にも「心にて心をよむ」心学として受け行なはれ、ここに「皇朝風俗、忠厚義烈。家家太伯、人人伯夷」(皇朝の風俗、忠厚義烈にして、家家太伯、人人伯夷たり)と、紀維貞が『国基』に説くが如き、国民的風俗が成立し、明治天皇の――

「我カ臣民、克ク忠ニ克ク孝ニ、億兆心ヲ一ニシテ、世々厥ノ美ヲ濟セルハ、此レ我カ国体ノ精華ニシテ、教育ノ淵源、亦実ニ此ニ存ス」

と宣らせらるる『教育勅語』に結晶して、わが国民教育の不易の指針となつたのである。

第二次世界大戦後、東西に引裂かれた西ドイツの首相として十余年、その復興の陣頭に立ったアデナウアー老宰相は、その民間選出の七十名の復興委員の答申に基づき、ド

イツ再建の基本精神として、この明治教育の原典『教育勅語』を採用し、みづから自室の壁上に、これをそのドイツ語訳と共に掲ぐると同時に、全ドイツの学校に掲げしめ、以てドイツ再興教育の源泉たらしめたのであったが、特に「父母ニ孝ニ」と「一旦緩急アレハ、義勇公ニ奉シ」の二句を太文字に印刷して、その意味の重きことを知らしめた。マッチーニは『人間の義務について』の中の「家庭に対する義務」の章に――

「家庭において、愛情は喬木にまつはる蔦の如く、不知不識の間、徐々に、根づよく絶え間なく、諸君のまはりにひろがり、いつも諸君の後からついてくるし、黙って諸君の生活と融け合つてしまふ。諸君と余りに一体化して居るため、諸君はよくこれに氣づかないことがあるが、一旦これを失ふとき、何かわからないが、諸君の生活に親しく、無くてはならぬものが不足して居るやうな氣持で、諸君はイライラして落着かずじうろする。それでも、束の間の快楽や慰安は得られようが、あの湖水の面のやうな静けさや、母の胸に眠る幼児の信頼しきつた眠りの安らかさのやうな、この上ない慰さめは得られない。……母から受けた最初の頬ずりが幼な子に愛を教へ、恋人から受けた最初の清らかな接吻が、男性に人生の希望と信念を教へる。そして、愛と信念とは、向上の

欲求と、一步一步未来に近づく力を造り出す。未来の活きた表徴は幼な子であって、それは我らと未来の時代をつなぐきづなである。家庭は、その繁殖の神秘と共に、女性によつて永遠をさし示す。だから諸君は、家庭を神聖なものとし、生活と不可分離の条件として、飽くまで、無思慮の人たちが起す改変から守って行かねばならないのである。家庭は神慮によるものであって、人間の計らひに基づいては居ない。家庭は生活の要素であり、人類の揺籃であつて、人間の存する限り続くであらう。」

と教へて居る。これは、わが神代の、オホナモチ、スクナヒコナの神のコトダテの、西欧的・近代的解説とも受取れよう。明治天皇の御製に――

家

親も子もしたしみかはし家の内のにぎはへるこそよはたのしけれ

楽

千万の民と共にもたのしむにます楽はあらじとぞおもふ

と拝誦せらるるが「国」を「家」となす我が国体の、天壤無窮の根源の存するところを思はしめられる。

この、人情の自然に随順する、日本民族の伝統的性格は、今日においても、その根底において、堅持せられて毫も変ることはない。明治以来、西欧の文物の洪水の如き奔流の中にあつて、その取捨選択の対象をあやまつことなく、明治・大正・昭和の三代に亘る、我が英学界在野の巨星、斎藤秀三郎は、その「英語ヲ完全に活用スルノ士ヲ養成スル」目的を以て自から創立した正則英語学校において、終生、カーライル及びエマソンを講じて倦むことを知らず、同じく三代に亘り、野に叫ぶ声として、時代の俗流に抗し、一向直進「祖国礼拝」と「御集拜誦」の同朋協力の信のために戦ひたふれた、思想界在野の先覚、三井甲之は「ゲーテの後にヴント」と称へ、詩人ゲーテの芸術と、碩学ウィルヘルム・ヴントの學術を究めて、偽新思想撃攘の永久思想戦を宣して、これに献身した。第一次世界大戦の経緯に關し『眞の戦争について』の一文を著作し、ドイツの眞の理解者としてカーライルを回顧し、イギリス国内の圧倒的世論の流れに抗して「最初より断然この戦争に反対の声をあげたであつたらう」ただ一人のイギリス人を痛惜したのは、このヴントであつた。

これら、明治以来の我が国における、學術・言論・思想界の「靈魂の系図」に關して

は、更に詳論を要するところであるが、既に以上の、甚だ意に満たぬ略説さへ、所定の紙数を越えて居るので、今回は、この暗示的、二三の素描にとどめて、この小試論を擱筆する。

(昭和四十八年八月二十一日『城西大学紀要』所載)

著者略歴（自撰）

家の系譜は、秀郷流藤原氏、相州の居住地松田を以て姓とす。江戸幕府三代將軍當時幕下に入り、与力として代々、江戸に住み幕末に及ぶ。

明治初期鉾山技師たりし父が佐渡金山に在勤中、明治二十九年相川町に生る。兄三人。父の

転勤により新潟県北蒲原郡新発田に移り、其地の小学校に入り四年の夏まで在学。父の死去に

より母に伴はれて東京に帰り小石川に住す。礫

川小学校より私立東京開成中学校に入り早稲田

大学英文科に進む。学園騒動により本科二年に

て中途退学、私立正則英語学校文学科に学ぶ。

在学中、文部省教員検定試験（英語科）に合

格、恩師の勧めにより母校の教務兼講師とな

る。尔後、財団法人電機学校（東京・神田）明

新中学校（朝鮮・黄海道載寧邑）麻布学園（東

京・港区）城西大学（埼玉県坂戸市）等諸校の

教壇に立って満八十歳に至る。二男四女あり、

目下、静岡県湖西市の長男方に同居。

著書、訳書、編書（著者自撰）

大正末期、私立正則英語学校教務時代、同僚

の先輩後藤一郎氏の推挽により研究社の『岡倉

大英和辞典』（初版）の編集に参加し一部の執筆

担当。斎藤秀三郎先生歿後、昭和七年、先生の

遺著“Advanced English Lessons,” “Mono-

graphs on Prepositions," "Radical English Verbs" (ごびれゝ一巻本)を編集し S. E. G. Press より刊行。同じく七年『昭和天業翼賛原理——明治維新の文献的現代史的研究——』を、大戦時、昭和十八年、時局論文集『米英研究』を原理日本社より刊。戦後、昭和二十四年、夜久正雄氏と共著にて訳書『ホイットマン詩撰』を吾妻書房より刊。続いて昭和二十七年より同三十五年に亘り『斎藤英文法研究シリーズ』(『前置詞用法詳解』に始まり『文章法詳解』に終る全十一巻)を同書房より刊。昭和四十二年、東大の古川哲史教授のお世話により日本ユネスコ委員会の事業として "The Japanese Mind as Mirrored in Literature" (津田左右吉『文学に顕れたる国民性』抄訳)刊。昭和四

十四年『三井甲之存稿』を三井甲之遺稿刊行会発起世話人代表として刊行。昭和五十五年、亡妻の一周忌記念として六児と共同して亡妻の遺文集を追悼詩歌、追憶記と合せて『母のおも影』を刊。昭和五十八年、甲之居士三十年忌を記念し『三井甲之詩選』を刊。最後の二書は共に自家版で非売品の編書。現在、『人生随順』誌にウイリアム・サンドラスン著『経国要略』訳その他、連載。

著者略歴

一、明治二十九年（一八九六年）

新潟県佐渡相川町に生る。

一、早稲田大学英文科中退、私立

正則英語学校に学び、文部省教

員検定試験（英語科）に合格。

一、正則英語学校教務兼講師をは

じめとし、電機学校、明新中学

校（朝鮮黄海道）、麻布学園、城

西大学等諸校の教壇に立ち満八

十歳に至って退職。現在、静岡

県湖西市に居住。

抄 研究 思想 英 米

No. 25 叢 書 研 究 文 国

昭和五十八年十二月二十日 発行
昭和五十九年四月二十日 第二刷

頒価 八〇〇円

著者 松田福松

発行所 社団法人 国民文化研究会

理事長 小田村寅二郎

東京都中央区銀座七一〇一八

電話（〇三）（五七二）一五二六、七

振替 東京 七一六〇五〇七番

印刷所 奥村印刷株式会社

東京都千代田区西神田一―一四

落丁乱丁のものはお取り替へいたします。

(既刊) 国文研叢書 (新書判)

No. 1	夜久正雄著	古事記のいのち (改訂版) (原) 昭和41年・(改) 昭和48年	316頁
No. 2	久原尚一著	日本精神史鈔 親鸞と実朝の系譜 昭和41年	279頁
No. 3	高木尚二郎編	弁証法批判の歴史 昭和42年	241頁
No. 4	小田村寅二郎編	日本思想の系譜 文献資料集・上巻(古代・中世) 昭和42年	309頁
No. 5	小田村寅二郎編	日本思想の系譜 文献資料集・中巻その1 (近世I) 昭和43年	317頁
No. 6	小田村寅二郎編	日本思想の系譜 文献資料集・中巻その2 (近世II) 昭和43年	409頁
No. 7	小田村寅二郎編	日本思想の系譜 文献資料集・下巻その1 (近代I) 昭和44年	403頁
No. 8	小田村寅二郎編	日本思想の系譜 文献資料集・下巻その2 (近代II) 昭和44年	381頁
No. 9	川井修治著	歴史と人生観 ヲルクス主義の超克 昭和43年	283頁
No. 10	小田村寅二郎編	欧米名著邦訳(明治)集 文献資料集 昭和45年	483頁
No. 11	原野一著	日本精神史鈔 花山院とその系譜 昭和45年	310頁
No. 12	夜久正雄・山田輝彦共著	短歌のすすめ (続 短歌のすすめ) 創作と鑑賞 昭和46年	309頁
No. 13	夜久正雄・山田輝彦共著	短歌のすすめ (続 短歌のすすめ) 昭和46年	316頁
No. 14	原野一編	ヨーロッパにおける ヲルクス主義批判論集 昭和48年	338頁
No. 15	夜久正雄著	白村江の戦—7世紀・東アジアの動乱 昭和49年	324頁
No. 16	桑原暁一遺稿から—著	国史の地熱—聖徳太子と橘氏の精神 昭和49年	293頁
No. 17	戸田義雄編	日本における ヲルクス主義批判論集 昭和51年	320頁
No. 18	三井甲之著	明治天皇御集研究(復刊) 昭和52年	354頁
No. 19	国民文化研究会編	いのち ささげて 戦中学徒・遺詠遺文抄 昭和53年	450頁
No. 20	国民文化研究会編	いのち ささげて 戦中学徒・遺詠遺文抄 昭和54年	421頁
No. 21	加納祐五・三浦貞蔵共編	社会主義理論との戦い(山本勝市博士論文選集) 昭和55年	420頁
No. 22	桑原暁一・遺稿から—著	戦後教育の中で “とっちゃん” 先生の国語教室 昭和56年	172頁
No. 23	小柳陽太郎著	戦後教育の中で 昭和56年	298頁
No. 24	小山田輝彦著	明治の精神 昭和57年	335頁

